

2



0025012000

0025012-000

651-15

満蒙移住案内

早速鎮夫・著

博文館

昭和10

ADE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



473

納本

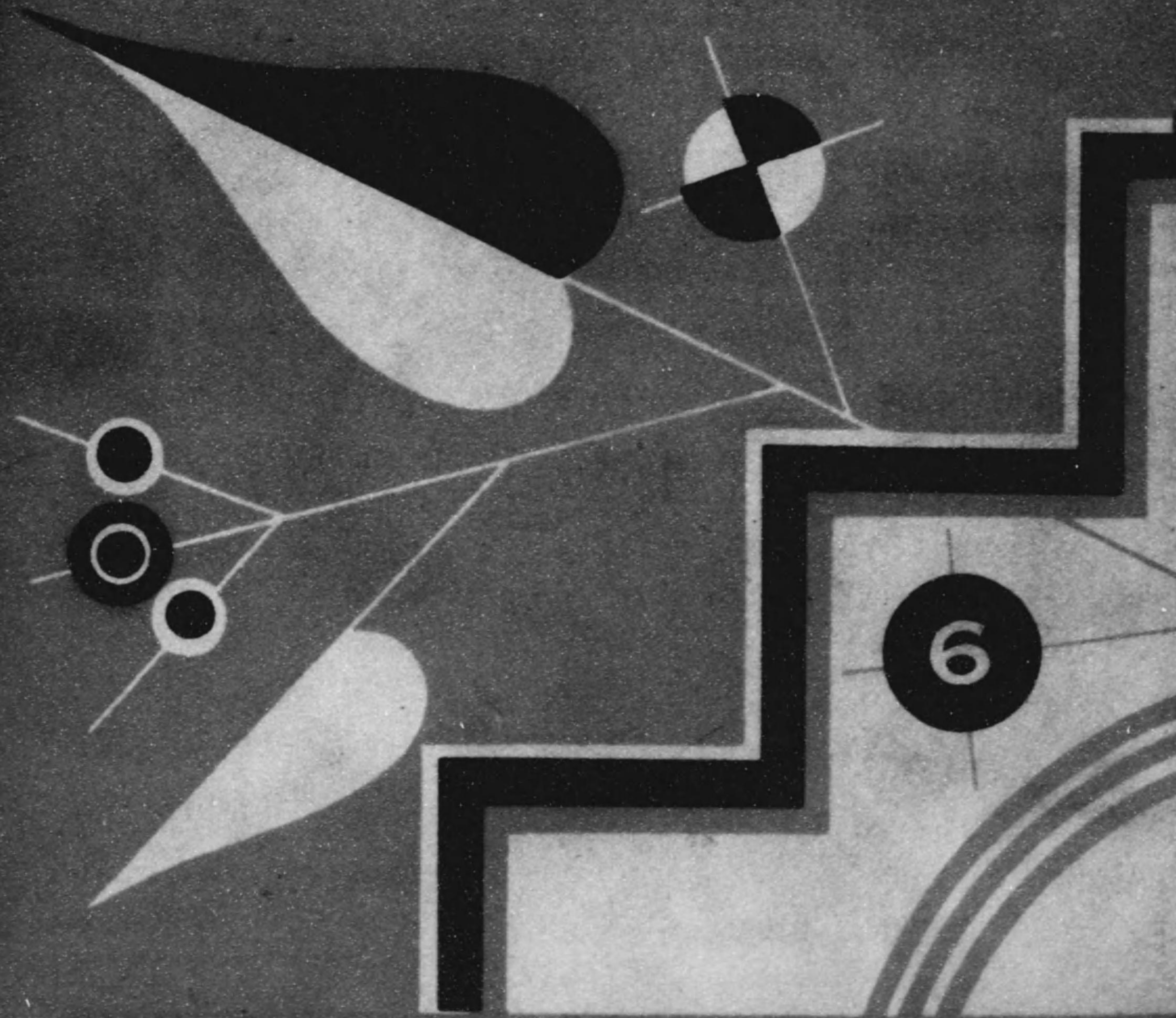
書畫界世業農

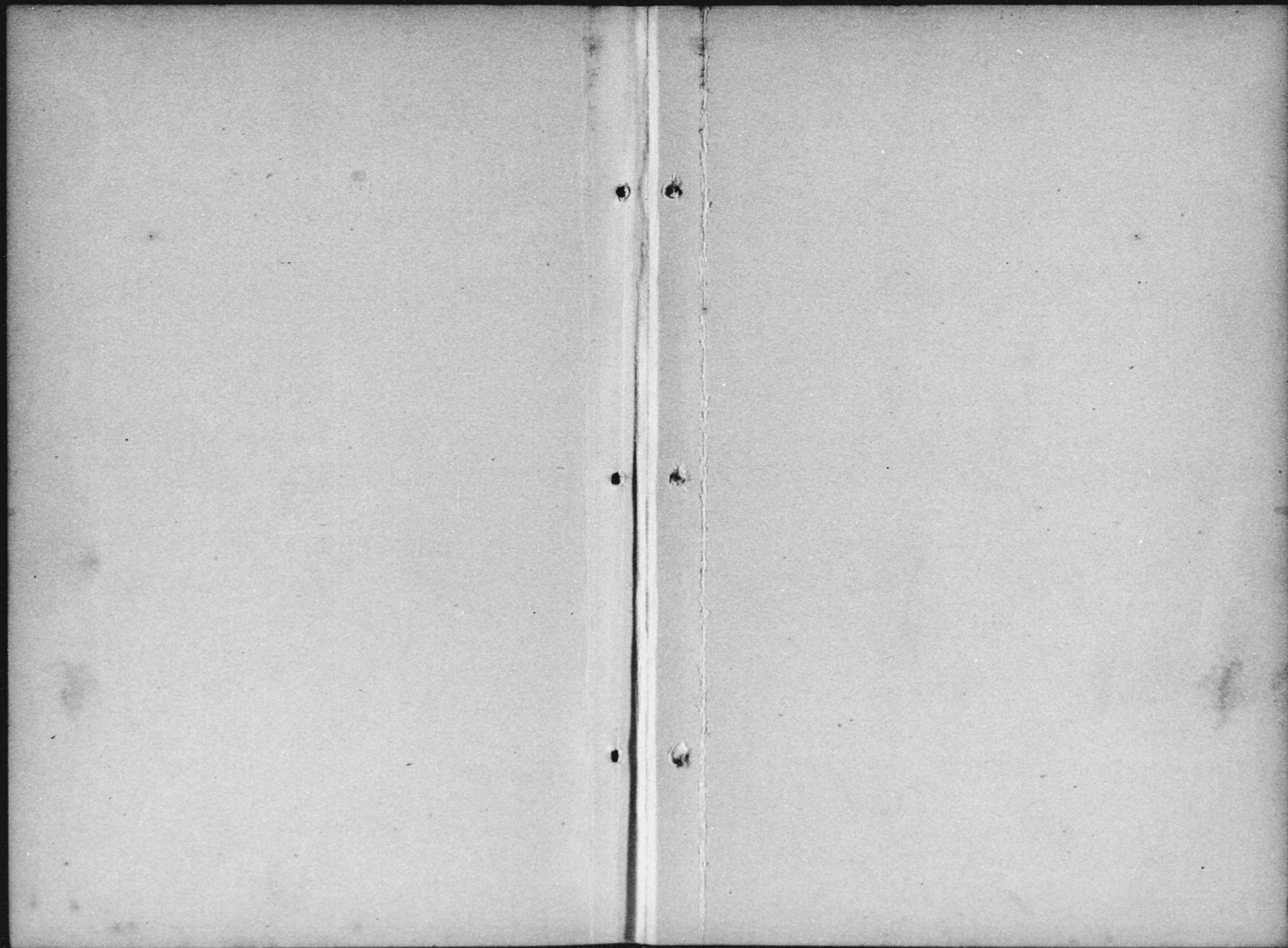


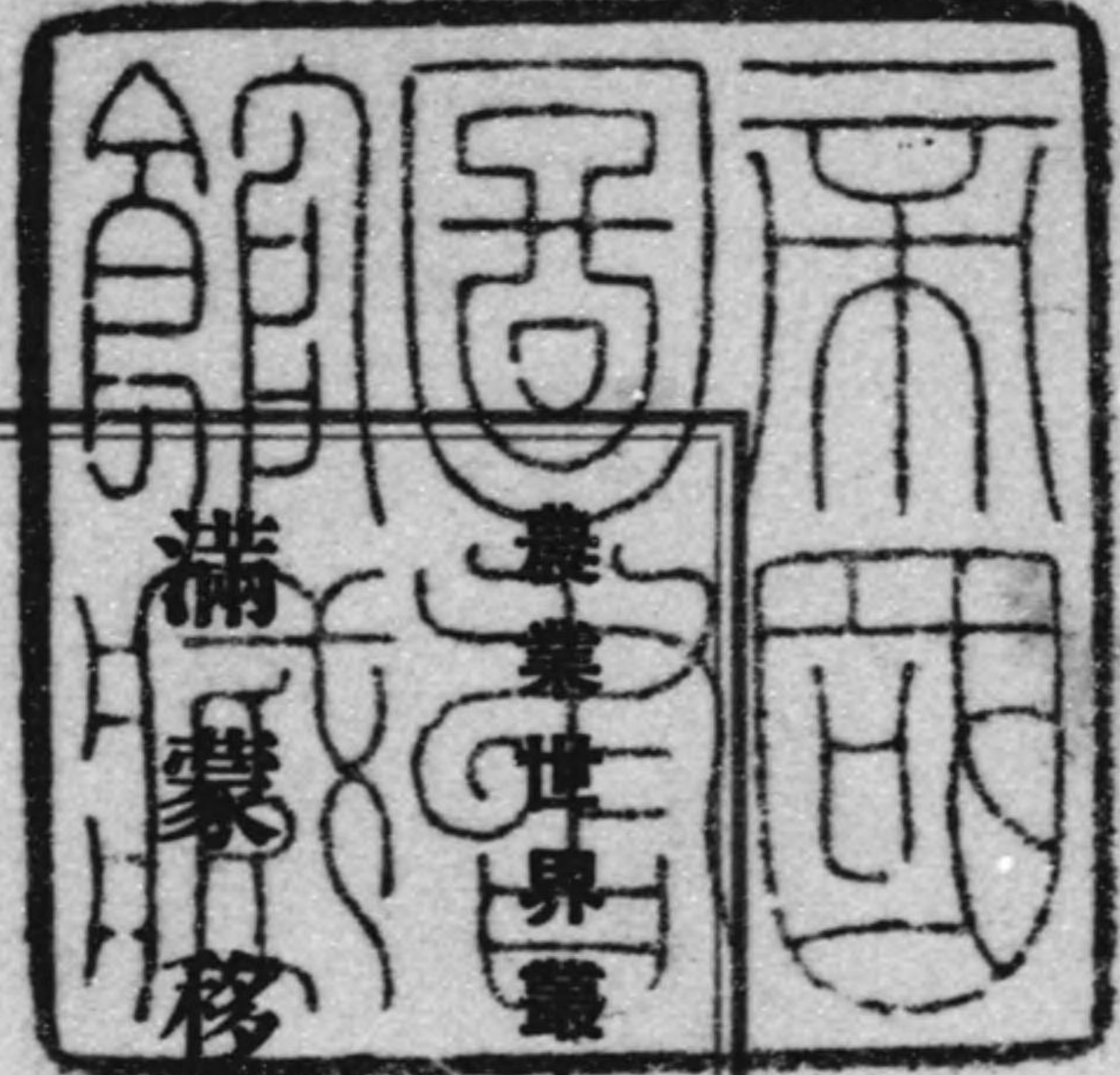
著夫鏡速早

內案住移蒙滿

行發館文博京東





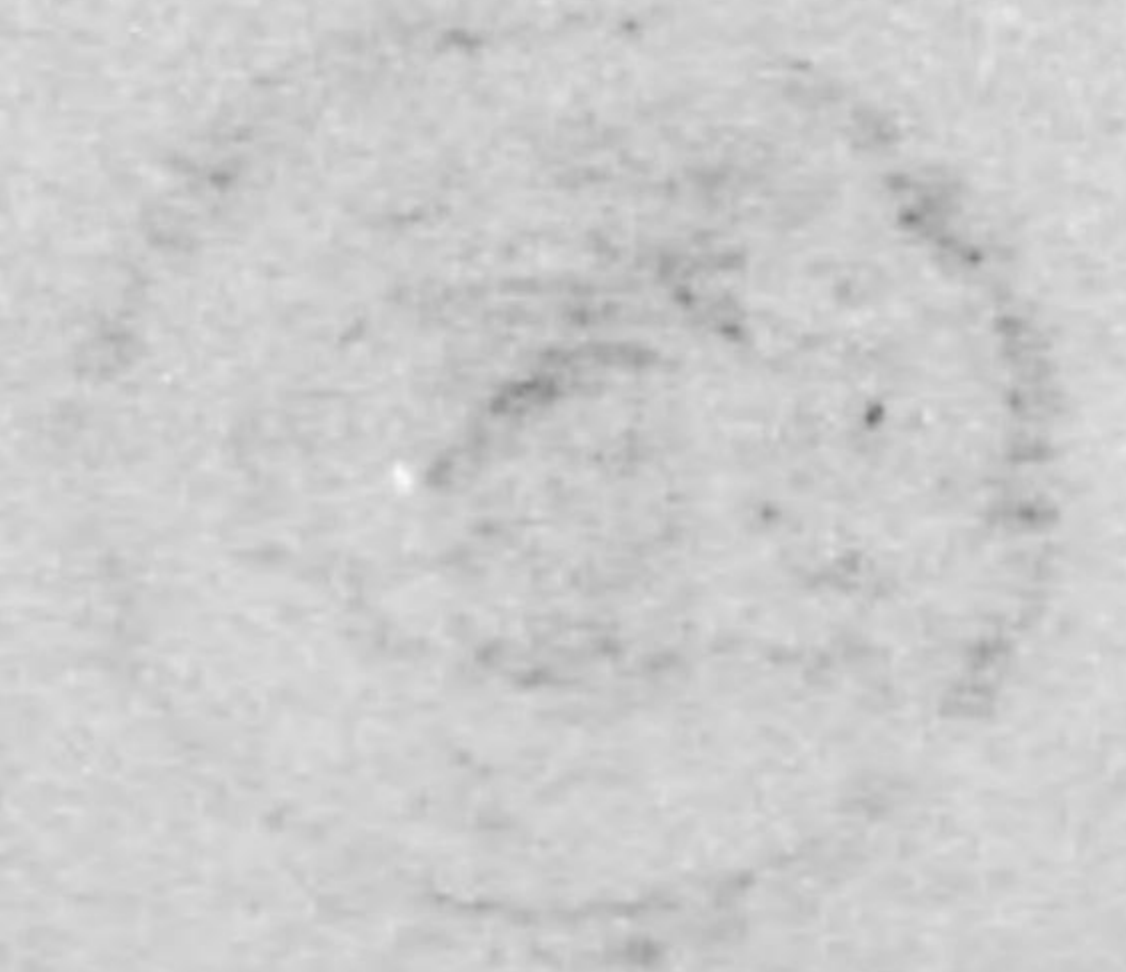
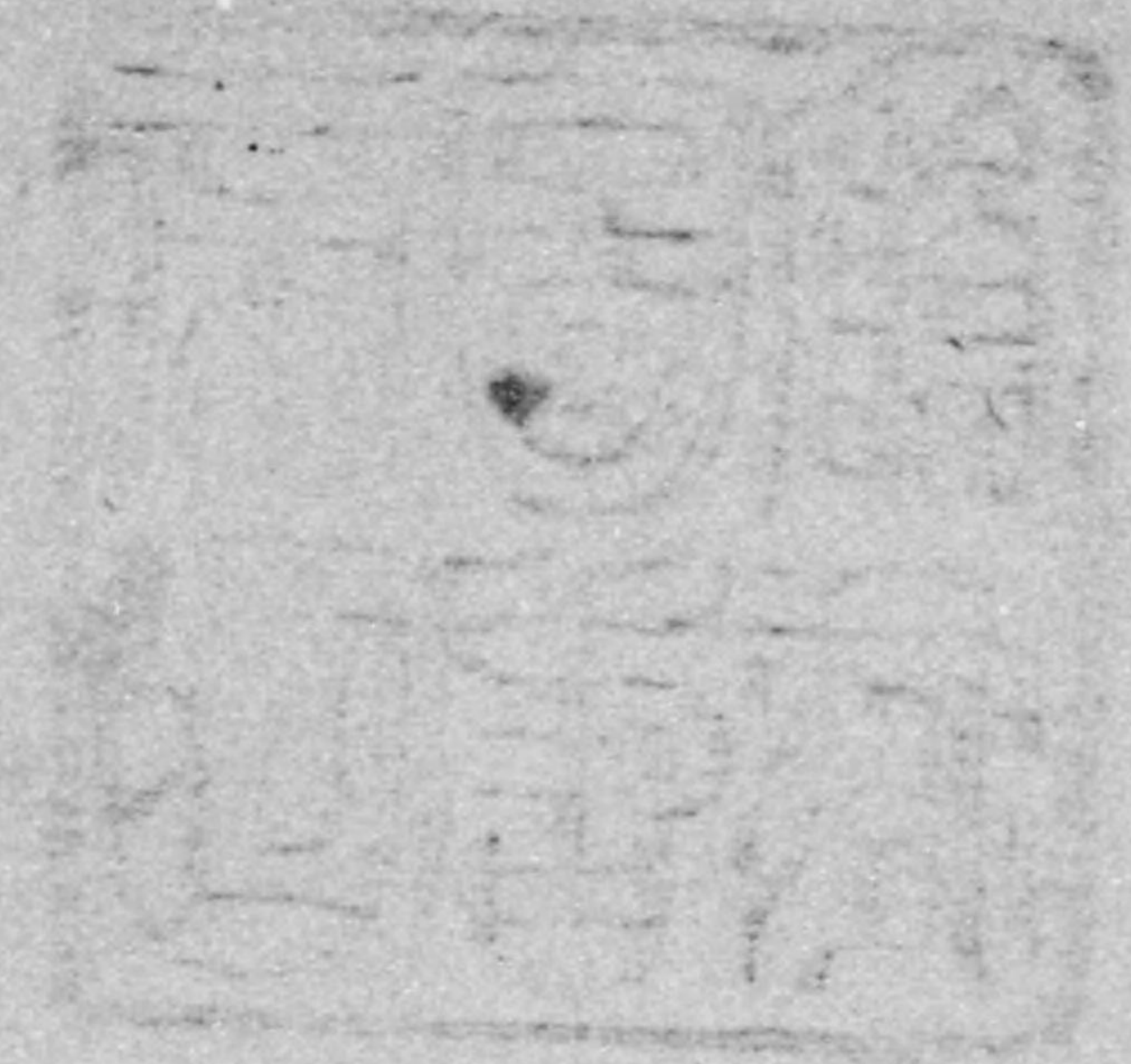


滿蒙移住
案內

早速鎮夫著

住案內

東京博文館刊



65/-15

はしき

滿洲國の移民問題を論ずるには過去及び將來の漢民族の移住や朝鮮人の移住問題にまで言及せねばならぬがこゝにはこれ等のことは略述して邦人の滿洲國移住問題のみを詳述する。

滿洲事變以來、滿洲國に於ける邦人の移住問題は各方面で論議され、今日是最早着々實行に入るべき時期に至つてゐるから今更總論がましいことは述べず、主として移住者に必要な滿洲國の概念、移住者の覺悟實地踏査せる移住地の實狀を記述することとする。

目次

滿洲移植民と國民の覺悟

日本の立場から見た滿洲移植民……………	一
經濟上から見た滿洲移民……………	一
邦人の發展すべき二大移住適地……………	九
國防上から見た滿洲移民……………	二二
滿洲の立場から見た邦人移植民……………	二四
治安維持のための移植民……………	二五
邦人の農業改良を期待する……………	二六
どんな農業改良を必要とするか……………	二七
邦人は何をなすべきか……………	二八
移植民としての邦人の實力……………	二三

北米に活躍する邦農……………二四

移植農民の指導精神……………二八

移住地としての満洲國……………三〇

 満洲國の緯度の比較……………三三

 土地は如何に利用されてゐるか……………三六

 將來を約する土地利用状況……………五一

 どれだけの人を收容できるか……………五五

農業から見た満洲國……………六〇

 恵まれたる氣温……………六三

 日照時數と降水量……………六四

 濕度と蒸發量……………六六

 無霜期間……………六七

 氣象に制肘された農法……………六八

 満洲の土質……………七二

邦農の學ぶべき乾燥地農業……………七二

どんな作物が出来るか……………七八

主要作物の生産状況……………八七

農家實際の營農狀況……………九〇

 大農經濟の南北の一例……………九六

 中農經濟の南北の一例……………一〇二

 小農經濟の南北の一例……………一一一

邦農移住者への指南

 各作物の反當收量はどんなか……………一一三

 どんな作付割合にするか……………一二一

 どんな收支の見込みか……………一二七

 水稻作を主體とする收支案……………一三〇

 南滿地方畑作を主體とする收支案……………一三三

 北滿地方畑作を主體とする收支案……………一三六

水田を主體とする經營……………一三六

北滿に於ける畑作中心經營案……………一四四

拓務省第一次自衛集團移民の營農標準……………一五二

滿洲農村のすがた

農民は大部分漢人……………一五八

農村の生長を語る……………一六四

鮮人の動向と邦人の覺悟……………一六八

過去の邦人拓殖事業……………一七二

滿洲農産物名稱解説一覽表……………一八四

滿洲移殖民と國民の覺悟

日本の立場から見た滿洲移殖民

滿洲の移殖民問題は先づこれを二つの觀點から見ねばならぬ。即ち第一は日本内地の立場から見た場合と、第二は滿洲國の立場から見た場合。謂はば滿洲國開發の立場からこれを見た場合とである。

先づ日本の立場から、滿洲に移住せねばならぬといふことは、われ／＼日本國民に取つては、わが日本を小日に成り終らせるか、大日本として永存せしむるかの岐路に立たしむるものと信ずる。ために假に二三論者のい

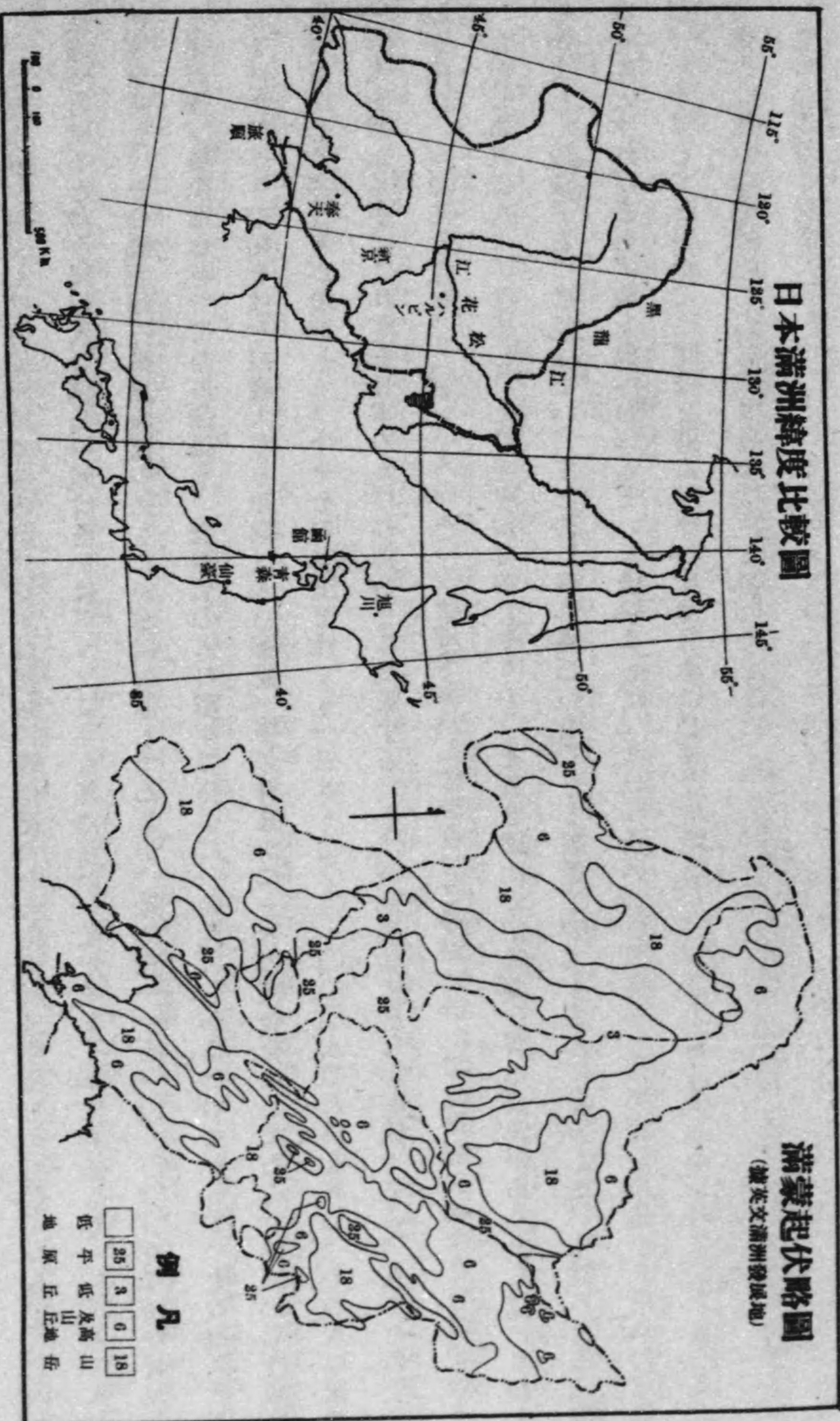
が如く、滿洲移殖民はその實行が如何に困難であつても、萬難を排して是が非でも實現せねばならぬ國家焦眉の急務である。しからば何故か、重大であるかといふと、これにまた二つの見方がある。その第一は經濟的に重要性あり、第二には國防的に重要であるからである。次にこれ等の問題を頁を追ふて検討することにする。

經濟上から見た滿洲移殖民

經濟上から見た滿洲移殖民

日本の人口問題——滿洲國に邦人の移住を必要とするのは、わが日本内地の立場からすれば人口問題、食糧及び原料問題、失業問題、農村問題等の諸問題を同時に解決する一解決方法であるからである。現在世界の中でわが國ほど狹隘なる國土内に稠密なる人口を有してゐる國は他にない。勿論統計の示すが如く一見ベルギー、オランダの如きはわが日本よりも稍々稠密の如く思はれるが、しかしこれ等の國は本國以外に廣大なる屬領地を有してゐるから、これを本國の面積に加へてその人口密度を割出せば遙かにその密度は少くなる。しかしてわが日本は廣大なる屬領地なく依然とその密度は大である。

これを少しく數字に就いて説明すると、最近内閣統計局の調査によると、昭和七年末現在の日本内地の總面積は三八二・二六五平方杆でその人口は六八・八六五・七〇〇人を算し、これを前年に比較すると一・〇〇〇・〇〇〇人の増加を示し、一平方杆の中に一七一人といふ密度を示してゐる。一平方杆にかくの如き密度を有する國は、前述の如くベルギーの二六六人、オランダの二四三人といふのがあるが、その中ベルギーは本國三〇・〇〇〇平方杆に對して二・四一〇・〇〇〇平方杆、即ち約八十倍の屬領を有してゐる故に、全體の人口密度は僅かに一平方杆に七人にしかあたらない。またオランダも二百四萬平方杆の屬領を有してゐる。故に全體の人口密度は一平方杆に三三人の割合になつてゐる。その他の歐米の主なる大國中ドイツはその本國の密度は一三七人で、日本に匹敵する稠密な人口を有してゐるが、これを詳かに考ふるに、こゝにいふ人口密度は總面積と人口數の比で、ド



イツは總面積の四四％は耕地面積であるが、日本は僅かに總面積の一六％の耕地面積しか有しておらず、この點を考へ合せるとわが國の人口稠密の態は遙かにドイツよりも甚だしい。またイギリスは本國こそ一八三人の人口密度を有し、その總面積と耕地面積の比もわが國に近似してゐるが、實に三一・八一〇・〇〇〇平方杆の廣大なる屬領及び植民地を有つてゐる關係上、全領土の人口密度は僅かに一四人にしかあたつておらず、その中カナダ、オーストラリアの如きは其の廣大なる地域は人口密度一平方杆僅かに一人の割合を示してゐる。更に北米合衆國は最近著しく移住者が増加して、今やその本土だけでも一三六・〇〇〇・〇〇〇人の人口を有し、その人口密度一六人を數ふるが、これ等を日本の人口の稠密さに比較するときは到底比較にならぬ有様である。且つその上にわが國は一年に凡そ九四〇・〇〇〇人の人口の増加率を示しており、この點に於いても世界に比なき有様である。しかし如何に人口が増加し、その密度が稠密しやうと、それを國土の中に養ひ得る資源があるならば、これを喧かましく論議するの必要はない。また若し假へ資源がなくとも製造工業でも盛んに勃興して、生活のために勞働せんとすれば必らず職を與へられるといふ國情ならば、人口の多いことは益々その國威を發揚する所以であるが、不幸にしてわが國には國民を養ふだけの食糧生産に必要な耕地なく、製造工業に必要な原料に缺くもの多く、市場その他の産業發達の要素には恵まれざる國情である。

このわが國の現状に際して、人口密度極めて尠なき南米ブラジル共和國、及びアジアの滿洲國の二國は、社會

的にまた道徳的に人口問題の解決地として、わが國民に自由の天地を提供してゐる。

日本の食糧問題——いかに國內の人口が稠密であらうと、これを養ふ食糧に不足せぬときは人口問題を詮議するを要しない。

しかるに先づわが國の食糧生産の現状を見るに、昭和七年の調査によれば日本全國の農耕地の面積は田が三・二〇四・〇〇〇町歩、畑が二・七二二・〇〇〇町歩、これを合せて五・九一六・〇〇〇町歩とされてゐる。しかもこれは大正十五年度に比較するとその當時は六・〇〇〇・〇〇〇町歩を超過しており、僅かに七八年に約八〇・〇〇〇町歩の減少を示してゐる。一方人口の増加はこれとは反對に益々増加してゐる有様で、人口の増加に反して耕地面積の減少は何を物語るかといふに、畢竟するにわが國內の土地の利用は最早限度に達してゐることを示してゐるにすぎない。

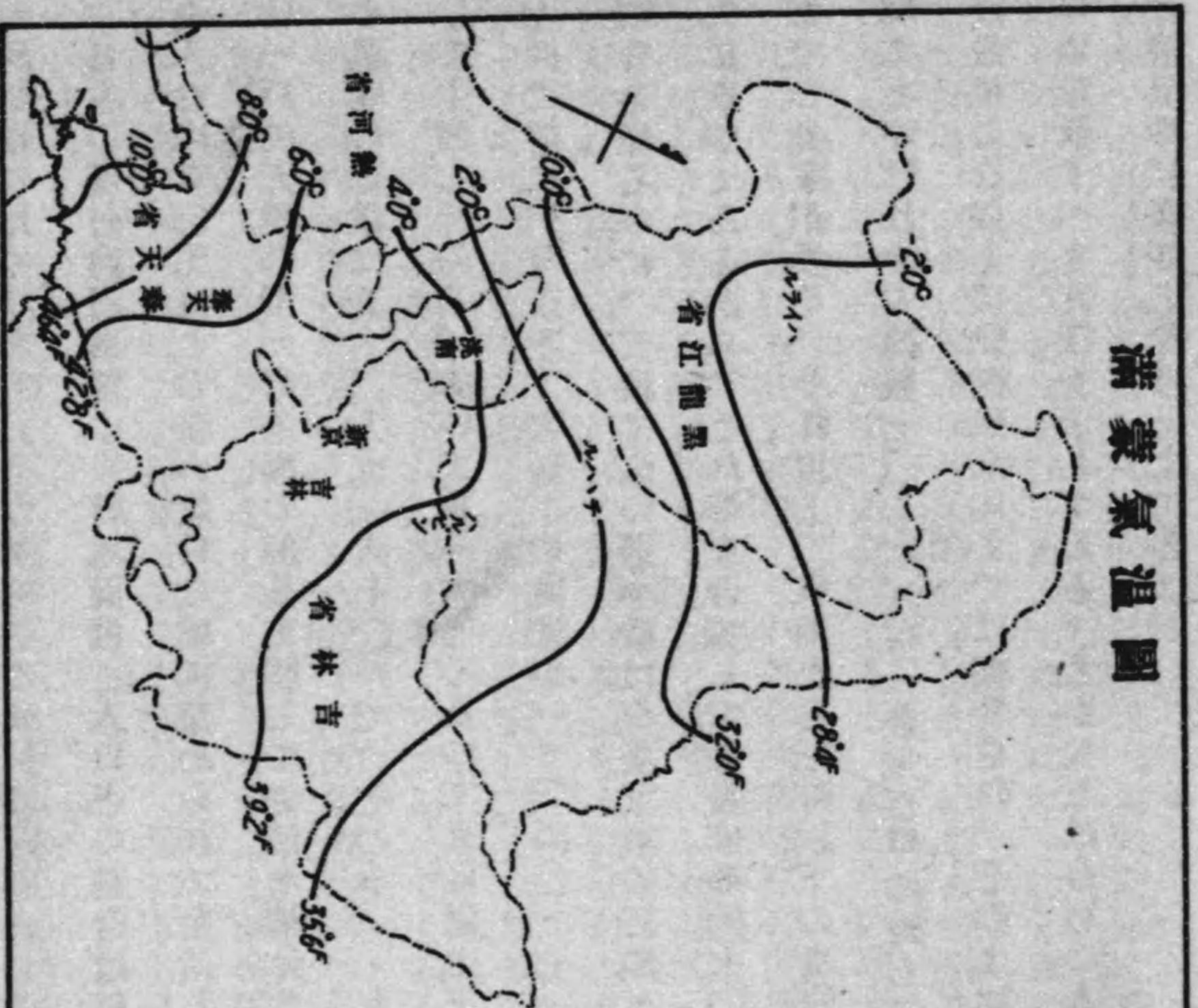
今この斷定に先だつて猶いますこし詳しくこの問題を検討してみよう。元來一國の領土がどれだけ人口を收容しそれを養ひ得るかといふに、單にその國の總面積に對する人口の割合、謂はゆる人口の密度の多寡によつて計ることは出来ない。これには他に諸種の條件を必要とするが、その中例へば國土が同じ面積でも平原が多く、農耕適地が廣く、食糧や原料を生産する場所が割合に多くあればその割合に人口を多く收容し得ることは明かな事である。また若し國內に山岳や溪谷多く、農耕適地が尠くなれば従つて人口の收容力が尠くなることはいふま

でもない。先には單に人口の密度を比較しておいたが、この點に留意して列國と日本との人口收容力を比較してみると、わが國はその地勢、細長き國土の中央に脊梁山脈が縦貫し、それから更に山脈が分れ、いづこを見ても山また山をなし一望の平原をなす處を見ない。ために農耕地と國土の割合は極めて少く、總面積の十六%にしかあたつてゐない。しかるにイギリスは農耕地は總面積の二四%にあたり、五七%が牧場になつてゐる。ドイツは四四%の農耕地に一六%の牧場となつており、フランスは四〇%の農耕地に約一九%の牧場を有してゐる。これをわが國に比較すれば、日本の農耕地と總面積の割合は大略イギリスの三分の二、ドイツの三分の一、フランスの四分の一にしか當つておらぬ状態で、牧場に至つてはわが國は總面積の九%しかないから、その割合の比はイギリスの六分の一、ドイツの二分の一、フランスの二分の一にあつてゐる。

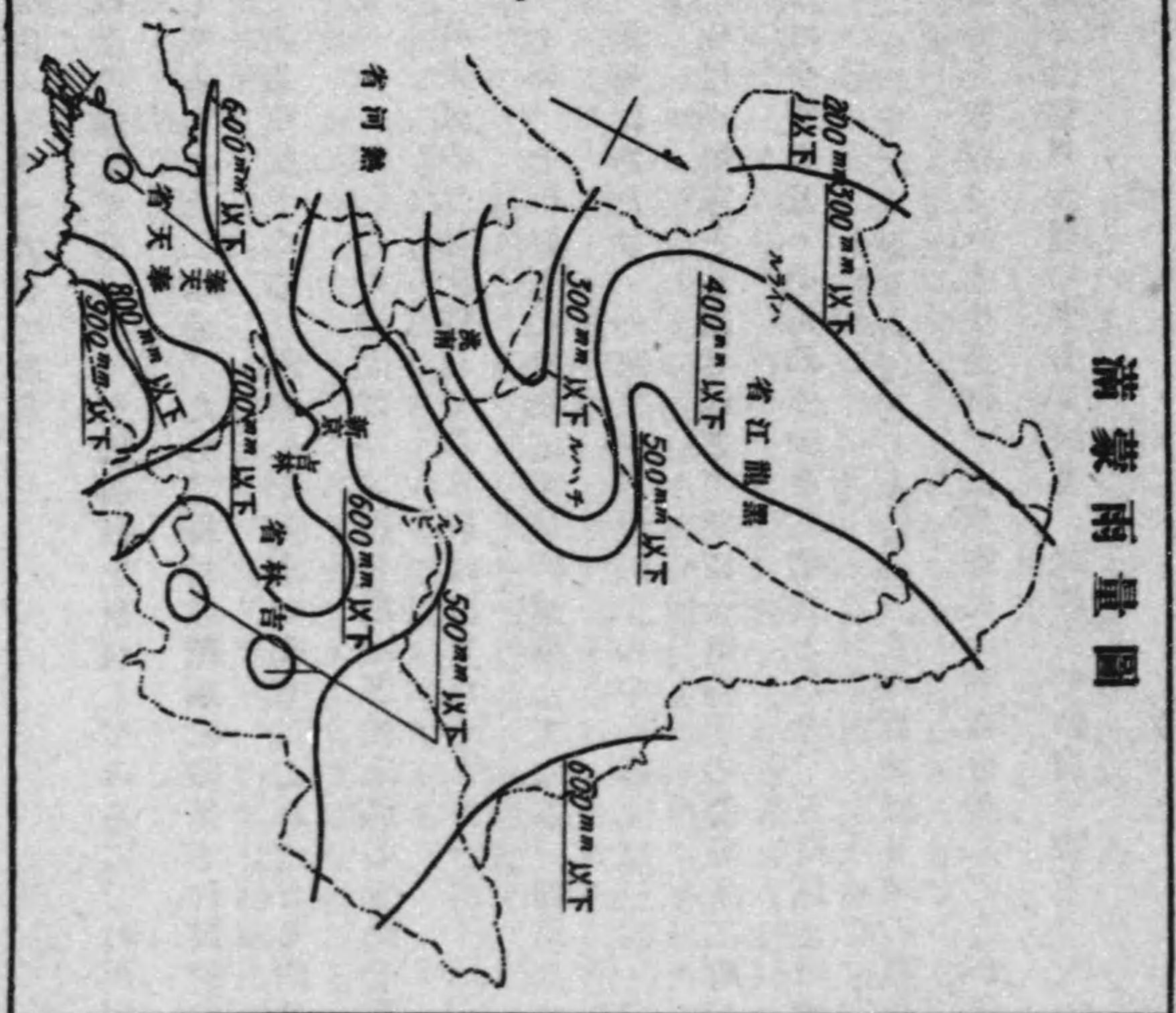
その結果として日本内地に於いては、山地は二千尺も三千尺も高き山腹を開墾し、段を造り石垣を築いて耕地としてゐる外、その農法は二毛作、三毛作と極めて集約的に土地を利用してゐるにも拘はらず、その耕地の年の減少は已に土地利用の限度に達したといはざるを得ない。また讀者の中には立體農法を唱へ農耕地の高度を高め更に山腹の開墾をなして一、二割の耕地を擴張し、これに適する農法が行へるといふものもあるが、これとても一部の改良にとゞまつて、國土人口收容力の根本解決策としては期し難い。

以上の結果からして、更に耕地面積と人口との比を求めれば、わが國の人口問題ひいては食糧問題は到底外國

滿蒙氣温圖



滿蒙雨量圖



の同問題の比ではなく、その解決法の如何は國家として由々しき一大事である。

日本の農村窮迫事情——耕地面積と人口との割合は以上の如くであるが、更に農村を直視してみると、わが國全人口の六〇%はこの狭い農村地域に集められて生活してゐることになる。ために農村は極端に細分され農耕地は一戸に五段乃至一町未満の面積を耕して生活を繼いでゐる現狀である。昭和七年度末の調査によれば日本内地の農家の總數は五・二九九・六七〇戸で、その中一・九一六・四〇〇戸は謂はゆる過少農で五段未満の土地を耕して生活してゐる。次いで稍々大きくなつて五段以上一町未満の土地を耕してゐる農民はまた一・九一六・三六七戸、更に一町以上二町以下の農家が一・二二〇・七一七戸、それ以上の農家は極端に減少してゐる。即ちこの割合を見るのに、五段未満の過小農は全農家數の三四・六%にあたり、一町未満五段以上の中小農家は三四・二%になつてゐるから、これ等を合算して全農家の約七〇%は小農家と見做される。更に一町以上の農家も二町歩までの農家が多く、それ以上二町歩から三町以下の農家は全體の五・七%の僅少なる割合となり、五町以上は大地主と呼ばれその總數七〇・〇〇〇戸、農家百戸に對して一戸半にも足りぬほどしかない。この實狀は日本の農村は最早これ以上に分割出來ぬまでに細分され、その土地から收穫される生産物では到底その家族を養ふことが出來ぬ悲歎すべき有様を示してゐる。しかもなほ農村の人々は海外發展の氣力を缺き、民族力の消費を啣ちつゝ、わが群島中に盤居しやうとしてゐる。

かかる狀態であるから失業問題は都市のみの問題でなくなつてきた。農村の二男三男は生れ故郷にあつても、働くに仕事がなく徒食を許さぬので都會に都會にと職を求めてきた。最近十年間の離村者の數はおびたゞしいものである。ために働き手を失ひ、足腰たゞぬ老人や生産能力のない幼少年等の如く教育その他の扶助養育の義務のあるもののみ残されてゐる有様である。ところが彼等の職を求め都市は世界的の不況に直面して永年職を持つてゐたものも職を失ふ有様でこれ等の失業者は再び歸村するもの多く、農村は人事に於いてかくの如き苦境にあるばかりでなく金融に於いても同じ狀態におかれてゐる。例へば政府の根強い宣傳獎勵によつて普及された郵便貯金は、預金者の中農村のものは重要な位置を占めてゐる。而してその金は都市に集中され、これを利用して得るものは廻收の早い確實な都市の企業に主として利用されて、農村がこの金の恩澤を受けることは極めて少い。一方高き租税公課に負はれ、高き利子の借財に苦しめられてゐるのが現在農村の有りの儘の姿である。

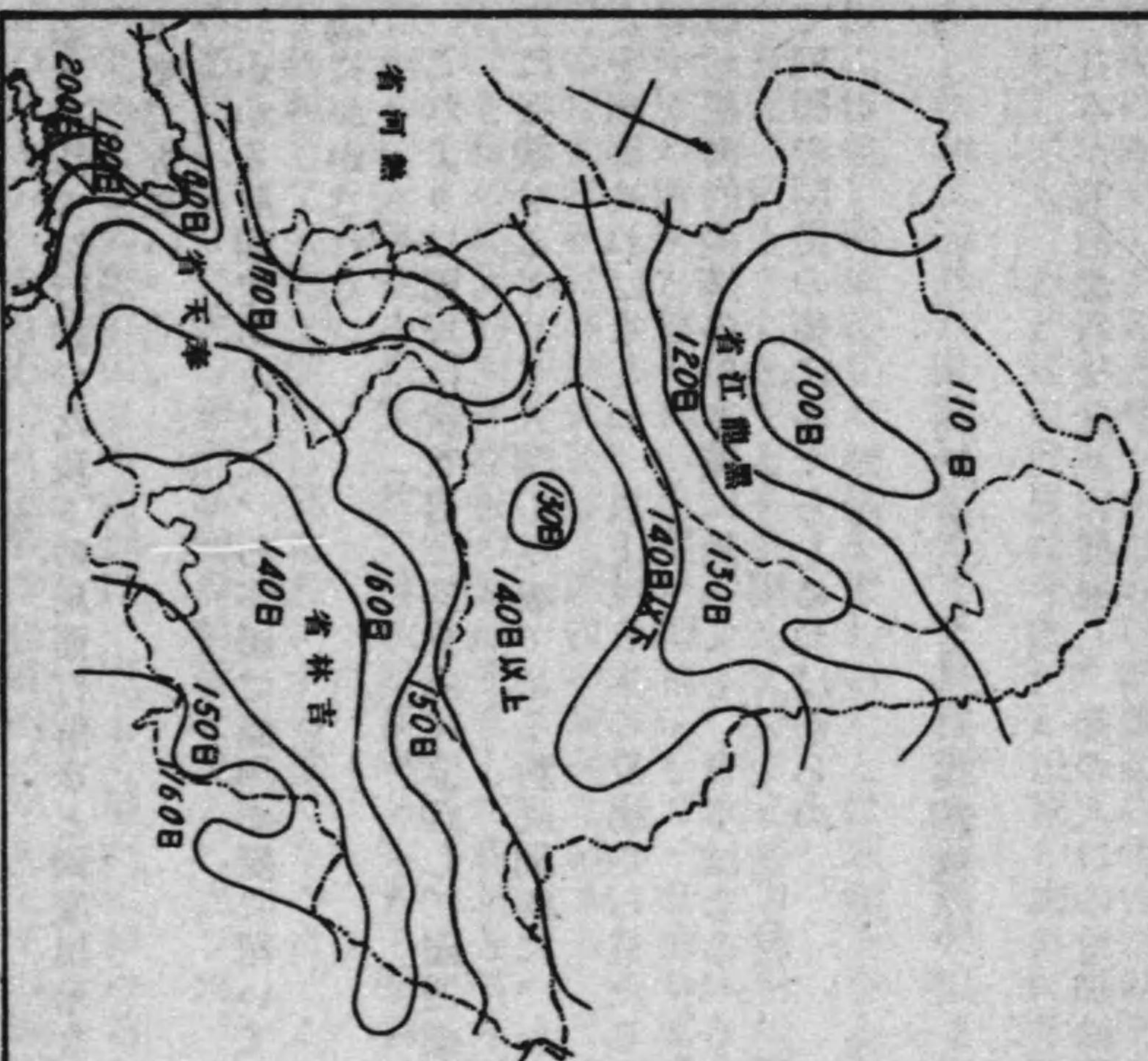
最近農村の窮狀の甚だしきため、その匡救策が唱へられてゐるが、これも聲のみ大きくその實質の伴はざるも多く、自力更生の聲やかましましきも稍々もすると彌縫策に墮してゐる。こゝに於いて海外發展、農業者移民の如きは實に永久的自力更生策であると信じて疑はぬところである。

邦人の發展すべき二大移住適地

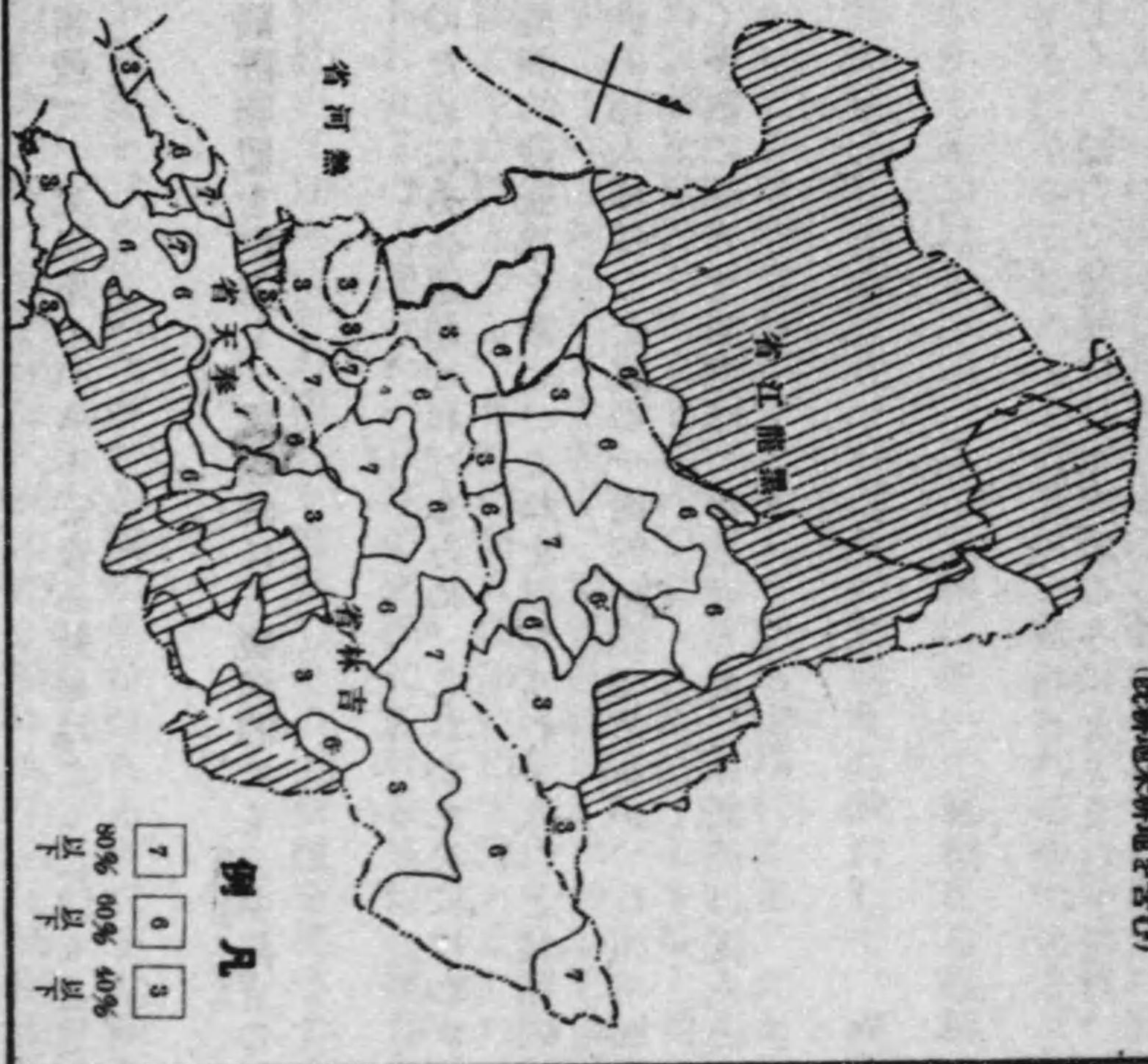
現今わが國の農村は窮迫の極度に達し、その對策として農村指導者は主としてその農法の改良、日常生活の節約勤勉を強ひてゐる。自力更生の案も多くは結局この二點に歸着し、農村に海外發展の思想を植えつけるにおろそかであつた。しかしして滿洲事變の結果はやうやく海外發展の思想を國民に促し、今やわが民族躍動期に際會してゐる。

しかるに海外現下の情勢は已に前世紀に於いて白哲人種がいたるところに跳躍しあますところなく、また白哲人種の發展する地はわが民族の發展移住を拒否してゐる。たゞ残された僅かに南米の一角ブラジルの地はわが民族の移住を歓迎してゐるが、わが國には惜むらくは住路一月半を要し餘りに遠隔の地にすぎる。しかしルーズベルト氏はかつて、「十九世紀の驚異は北米の移住發展にあつたが、二十世紀の驚異は南米の移住發展にある」と列強は南米移住を極めて重要視してゐるが、この南米中の大國ブラジルに於いては、わが民族はその數こそ劣るが、他國の移民の間に伍して遜色なくその成績は彼等を遙かに凌駕してゐる。幸に南米移民は昭和八年に南米移民二十五年の記念すべき年を迎へ、昨年（昭和八年度）の如きは二萬人を越え、毎船渡航者は激増して滿員の盛況を示してゐる。しかしこの最大レコード二萬人突破も年々九四萬人の人口の増加をなすわが國には、その四十七分の一にしかあたらぬ。その他の海外移住者の合計は昭和八年度が三萬人（ブラジル移民も含む）、人口の増加から見れば三十分の一は僅かに海外に移住して人口の調節をとり、食糧問題を解決してゐるが、かくの

滿蒙無霜平均日數



滿蒙可耕地面積比較圖 (可耕地未耕地を含む)



邦人の發展すべき二大移住適地

如き有様では行詰つた現下の局面打解など到底出来ない相談で、次に來るべき不安なる結果はこゝに諄々と述べらるまでもない。

かかる状態である上に、わが國は滿洲事變に續いて、國際聯盟を脱退し、國際的にも經濟的にも自主孤立の立場におかされた。

これよりは國民は新たな自主的立場に立脚して國運進展のために勇往邁進せねばならぬ。これがためにはわが國土に接壤せるアジア大陸の足場である新滿洲國に、わが經濟的發展地を求め、これを以つてわが人口と食糧問題とを調節せねばならぬ。以上は日本の立場から見たる滿洲の邦人移住の必要の一面的記述であるが、日滿兩國の政治經濟的提携の根本義に於いても、日本はなるべく早く多數の邦人を滿洲國に移住せしめ日系新滿洲國人として同國の開発の衝にあたらしめねばならぬ。

國防上から見た滿洲移民

日本が明治維新後急速に發展し、その人口の増加は著しく、國力の發展は日本内地のみにとゞまらず臺灣、朝鮮、樺太、南洋（委任統治領）にまで及んでゐるが、わが民族發展のためにはなほ狭しとされてゐる。わが民族はかくの如き驚くべき發展性を有し近々半世紀たらずして世界の列強の間に伍するに至り、氣宇既に世界のみ

ながら、民族發展、海外移住の點に於いては氣概を缺くものがあつた。近世の歴史は民族發展の歴史、謂はゞ移民の歴史であることさへいはれ、前世紀白哲人種はアメリカ大陸に移住し北米合衆國の形成せるなど好箇の實例からしても、わが國の發展は今後わが民族の海外に活躍するに至つて初めてその眞價を認められるのである。しかし如何に海外に發展せんにもその本國を泰山の安きにおかしめねばならぬ。この意味に於いて滿洲なる接壤地域に移住し國家存立の地盤を求むることは本國を守ると共に移住地を求め一石二鳥の賢明なる策にして、滿洲を自國の領土としなくとも自國を支持する勢力範圍に置かぬときは國家の存立を危ふくする國情にある。ために數十億の國幣と數十萬の生靈を犠牲にして、日清日露の兩大戰を敢行したことは今更こゝに詳述するを要しない。その結果日本は滿洲に於ける露國の權利を繼承し、その後三十年巨額の資本を投じ、鐵道を建設し、治安を維持し、各種の經濟的産業開發の施設をなして滿洲を日本の陸の生命線となし、また列國人の安住の天地となした。しかるに近年復々張家二代の暴政は多年日本から被護せられたることを忘れ、日本の滿洲に於ける地位と權益とを無視して公然と敵對行爲を敢てする様になつた。こゝに於いて日本はその權益を擁護しその生命線を死守するの必要に迫り、彼の滿洲事變の勃發を見るに至つた。

しかしこの間わが日本國民は、正しく滿洲に於けるわが權益を、また滿洲がわが國の生命線たる所以を認識しおつたといへやうか、日露戰爭後政府は卒先して滿鐵經營にあたり、滿洲開發に努めたが稍々もすると滿鐵偏重

主義に陥り、農業移民の如きは識者間に不能論をさへ唱ふるものあつて僅かに試験的に行はれたにすぎず、滿洲に於けるわが權益といへば、資本金四億何千萬圓の大會社をもつておるとか、何哩の鐵道が布設されておるとか、何々鑛山の權利をもつておるとかいづれも資本的權益のみをあげるのみであつた。かるが故に現任在滿邦人の大半は俸給生活の如く一時的の在住者にて土地に定着性なく、隣國支那の無秩序な暴政に常に警備を忽せにすることが出来ぬ有様であつたではないか。

滿洲國の成立後、その治安はやうやく維持されてきたつたが、われ／＼日本人の立場からいへば、この地にも少し信頼し得るわが同胞を扶植して一時的なる武力的治安維持のみでなく、人口の力に依つて日本の土臺、足場を確り固めなければならぬ。このために土地に定着性の最もかたいわが農業移民を扶植することは、ひいてはわが國防のかためとなる所以である。

滿洲の立場から見た邦人移植民

元來滿洲に在住する支那人は土地に對する執着心は極めて強い國民である。滿洲事變以前關東州に農業移民を試みたものが、日本農民を移住せしめることは土地の利用價値を高め、滿洲開發を促進し、先住土着民に間接的

は共謀して仕事を妨害するなど幾多の思はぬ災害に出會つた。これには勿論東北官憲の排日的煽動も手傳つてゐるには相違ないが、兎に角風俗、習慣が異なつてゐる兩民族が同一地方に雜居して農業を営む場合は、一方の眞意を他方に諒解せしむることは餘程の覺悟と努力を要する。日本人は個人としては優れてゐるが團體人としては缺くる點の多きことは過去布哇、北米の移住者が繰返した國民的缺陷として苦き經驗を有してゐる。この補正すべきまた補正し得られる國民的缺陷をなくすることは移住者自らの覺悟に俟たねばならぬ。これと同時に當局者または指導者は、先住滿洲國民に邦人の移住が同時に滿洲國の開發のためであり、滿洲國人の利益であることを徹底せしめる必要がある。

治安維持のための移植民

邦人の移住が滿洲を開發せしめることであり、滿洲國人に利益を享けせしめることであるといふことは、最も直接的に説明するものは先づ第一に滿洲の治安がよく維持されるといふことである。既に過去三十年來日本が滿洲の開發に手を染めてからは、滿洲は支那のいづれの地方よりも安全なる地帯として年々三十萬乃至は五十萬更に年によつては百萬を超過する漢人の移住者をみた。その原因を検討するに

- 一、滿洲に廣い未開地のあつたこと。
 - 一、日本の滿鐵經營によつて治安が維持されたこと。
 - 一、滿鐵經營にともなつて産業勃發し移住者に職を與へたこと。
 - 一、滿鐵經營によつて滿洲奥地の未開地が開發されたこと。
- 等の諸種の原因が數へられる。

事實滿洲は過去四半世紀間にその農耕地は約七割擴大され、農産物は約二倍以上に達し、支那人の安住地として數百萬の多數に幸福を與へてゐる。これは日本人が滿洲を經營せるために治安が維持され、經濟的價値が高められた結果に他ならぬ。こゝに於いてわが農業移民が多數こゝに移住するならばその治安の維持は更に確保され、産業は更に開發されることは信じて疑はぬところである。嘗つて東北官憲が排日宣傳のために詭辯を弄するが如く、決して日本の滿洲經營と施設並びに貢獻は、文化侵略でなく、經濟侵略でもない。日滿兩國の提携する東洋平和の建設事業にほかならぬ。

邦人の農業改良を期待する

滿洲は農業國とされてゐるがその農業の態はどんなか、滿洲の農業は有畜農といはれるがその畜産の狀況はど

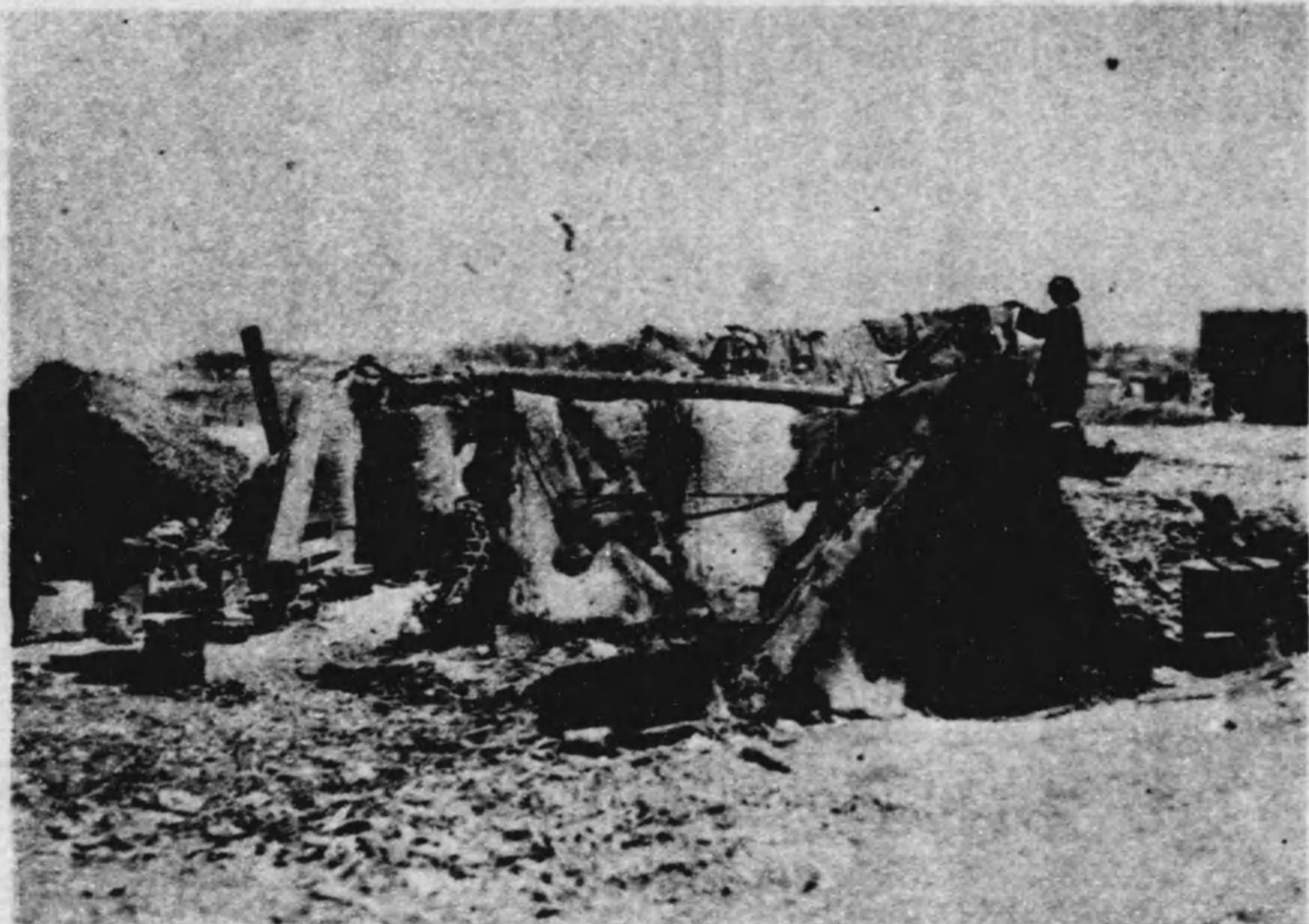
んなか、これ等については後に詳述することとし、既に滿洲には先住の農民がゐるにも拘はらず日本人の移住が必要とされてゐるのはどんな譯かといふのに、滿洲の農業は久しく個々には改良發展をなし來つたが、その品種の如きは大豆を除き、殆んど在來種の栽培をなせるが如く、その改良の餘地は多々ある。また農家の主要なる家畜の如きも病疫の犯すまゝに放置してあるなど、極めて幼稚なる状態にある。また農民は能く租衣租食、低い生活程度に甘んじて勤勞生活を送つてゐるが、その農法は決して進歩してゐるとは云ひ難い。これに反してわが邦農は明治以降幾多の訓練を経て科學的進歩發達をなして今日に及んでゐる。且つ滿洲に於ては現在までは農業者を指導する獎勵機關もなく、農業實體の研究調査も乏しい有様である。よつて科學的進歩せる邦農が適當の指導と相俟つて、日滿農業者が相提携してその改良進歩に當れば、滿洲の農業は忽ちにしてその面目を一新するであらうと期待される。

よろしく邦農は滿洲國に移住し、日系新滿洲國人として、われ／＼人類の幸福のために、東洋人の福利のために、また滿洲國の福利のために農業開發に参加することを望むものである。これはまたわが國の國運進展の道でもあるのである。

どんな農業改良を必要とするか

どんな農業改良を必要とするか

どんな農業改良を必要とするか



力苦すごすで屋小なめじみたしうか、に地の洲満の寒互 屋小力苦
るればのしが活生の

一九

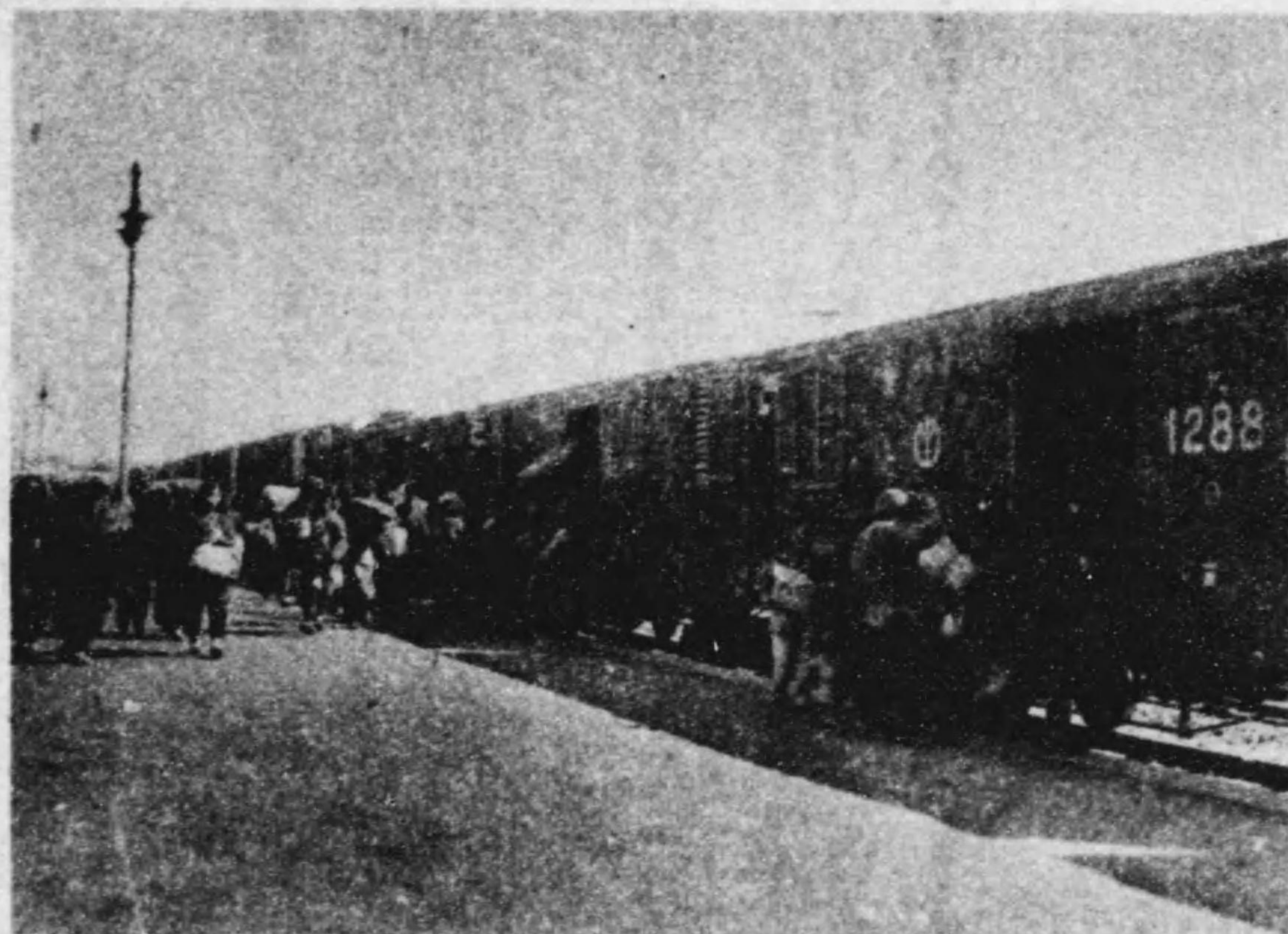


設が備設の温保くよ、でどな毛羊で形圓、は家の人古蒙 屋家の古蒙
るむてれらけ

滿洲移植民と國民の覺悟



もるす動移てに歩徒、で民移東山のゆは謂 民移する行北てに歩徒
るあで敷きしいたびあの



へ携へさ具寝類衣、り乗に車貨はのもるあ金の 民移む込乗に車貨
るす住移て

一八

現在滿洲の河川は多くは自然河なる故にその氾濫地域は非常に多い。これに日本の如く堤防でも造れば毎年確實にその土地から農作物が取れるのに滿洲の農民の多くは敢へてしない。勿論これには多額の資本を要する點もあるが、も一つは農民は三年に一度、或ひは二年に一度位洪水や旱天に遭つて農作物の不作に出會ふのは自然の廻り合せだ致し方ないと諦めてゐる。從來耕した土地が荒廢すれば他に新地を求めて耕作しゆくといふ有様で、その土地に人工を加へて改良し、資本を投じて天災を防止し、生産價值を高めるといふ點にかけては、従前はやつておらなかつた。またこれをするのに資力も組織も缺いてゐた。ここに科學的に進歩せる日本人が移住し來つて氾濫地域には堤防を築き、排水工事が出來、旱魃地域には灌溉の設備が出來ることになれば、最早開墾の餘地なしといはれてゐる南滿洲に於いても、遼河や、太子河や、渾河の流域だけでも數十萬町歩の開耕利用せらるゝことになる。かくして滿洲致るところに治水、生地、灌溉、排水の事業が起さるゝことになれば滿洲の農業は極めて確實なるものとなり、土地の生産力は激増する。

また近時滿洲の農業には灌溉の必要を説くものが多くなつた。しかし日本人は稍々もすると灌溉といへば水田利用のみのことを考へるが、滿洲の灌溉事業は寧ろ畑作増收の方法として必要なのである。例へば滿洲の春季には雨が少ない。その少ない時期が播種から發芽時期であるからこの頃の一雨でも滿洲の農民にとつては慈雨である。大豆の如き五月に三回降れば豊作、二回一回と雨の日の數が減ればその年の作柄は二分の一、三分の一に

減ずるとさへいはれてゐる。かゝる場合に人工灌溉の設備があつて適時に灌水が出來れば毎年確實に十割の作柄を見ることが出来る。

以上はその改良の要點の一端にすぎぬ。資力貧弱にして舊慣を墨守する先住農民によつては何等の發展を期待することは出來ぬが、若し日本人が参加するならば長足の進歩をみることも火を見るが如く明らかである。既に過去關東廳で行へる關東州中愛川村の移民の如き、清水技師により地下水の利用を大々的に行へる結果、過去の不成績を一掃して非常なる好結果をあらはしてゐる。また關東州の果樹栽培者や滿鐵沿線の煙草栽培者の如きは、舊慣を墨守して在來の農作物を栽培してゐる普通農家の五倍も十倍もの収益を擧げてゐる。しかも農業には秘密なく、何人もこれを習得し得る故にこの日本人の新農法に倣つて多くの原住農民は新農作物を栽培し好成績を収めてゐる實例をみても、その改良の必要は焦眉の問題である。

邦人は何をなすべきか

滿洲の農業開發に邦農が参加し、日系新滿洲國人としてその衝にあたることは、いかにその開發を早め、土地の生産價值を高めるかは已に前述したところである。いま滿洲國自體からいはいはしめれば、開發に必要な人物、資本、市場が必要である。資本、市場この二點に於いて日滿兩國は經濟的に提携して居り、人物としては邦農の營

農技術は世界に認められてゐるところである。要は日滿兩國國民の融和を念頭におき共存共榮の精神に生きる覺悟があればよい。しかして最後に杞憂するところは組織である。即ち世界は底知らぬ不況に直面して最近切實に叫ばれてゐるのは何事に於いても統制である。滿洲が過去數十年間その農業開發に何等の指導機關なく、生産物の改善、市場の開拓も區々として總てが無統制であつたことはその開發を遅らしめてゐる。わが農事移住者がこの點に留意して協同組合制度によつて經濟的方面をも充實するときは、その成功は期して待つべきものあることを疑はぬところである。

移民として邦人の實力

已に滿洲國に邦農を扶植し國家百年の計を樹てるは、わが國として現下焦眉の急務なることは説述した。また同時に滿洲國側から見るとその資源開發には邦人に期待すること多きことも述べた。しからばその邦人はわが國及び滿洲國として期待する移民としての充分の資格を持つてゐるかどうか、改めて検討してみねばならぬ。それには移民として邦人の過去の成功不成功を顧み、併せて滿洲國移住者として適不適をも考へ合せて見ねばならぬ。過去の不成功の原因を探究して前者の轍を履まざるは人間ののみが持つ聰明の指示である。しかるに邦人の滿洲移民の事績は過去に於いては極めて微々たるもので寧ろ不振だつた。その上議者の中には邦人は到底滿洲に移住するとも、土着の漢民族と經濟的に競争出來ぬといはれ、現在に於いてこの主張を強くなすものがある。殊に農業方面では勤勉で粗衣粗食に甘じて低級なる生活をなし、極めて低い生活程度の原住民の間に伍して、日本人の如き文化的生活に馴れた者がどうして發展し得るかといふ疑問は、世上に流布され今日も議論されるところである。

しからば過去滿洲農民の中に伍して働いてきた邦農はいかなる事績を残してゐるか、移住者としての邦人は世

界各地でどんな働きをしたか頁を追ふて詳述する。

北米に活躍する邦農

日本移民が北米に活躍したのは、北米太平洋岸に金礦が発見され、大陸横断鐵道が敷設され、西部太平洋沿岸に灌溉事業が起つて乾燥地農業として極めて粗放の穀作農から、集約的の灌溉園藝農に變らんとする頃であつた。一方に鐵道工事が勃興し、各種事業が起り労働者をしきりに要求しておつたので、布哇に甘蔗栽培をしてゐた邦人が多擧してアメリカ大陸に進出するに至つたのである。丁度この頃支那の労働者は既にこの地に移住して居つたが、移住禁止法を受けてその數は年一年と減少していつた。一方太平洋沿岸は果樹栽培に好適だといふので果樹園を創始せしものは、やうやく結實の期になつて益々労働者の不足を來し、資本家は金の太鼓を叩いて労働者を募集する有様であつた。

ためにその當時はこの地方は歐洲東南諸國の労働者の人種展覽會場の如くであつた。しかしてその中で一番身體の小さい邦人は、知らず知らずの中に日本獨特の負けじ魂にかられ、他國の労働者が何事をするにもゆつくり極めて能率の上らぬ仕事ぶりをみて齒がゆかつた。して邦人は誰れもその敏捷さで他國人の二倍も三倍もの仕事をして資本家を驚かしめた。その上日本人はその勞農法に於いて過去一律に教へられた艱苦勳の徳と、國民性

の負けじ魂によつて百四十度の炎天下非常なる奮闘努力の結果、乾燥地の荒野を灌溉を施せる沃野に一變せしめてしまつた。かくして現在のカルフォルニヤの世界に冠たる果實は、實にわが日本人によつて開發されたものと誇り得るのである。

しかしかくの如き誇りをもつ日本人が、この地で排日の厄に會ひ、土地の所有權は拒否されてゐる。また労働移住をも拒否されてゐるのは何故か、その當時の移住者の多くは謂はゆる出稼ぎ的の考へをもつており、勤勉に働き貯蓄に一心になつてゐるが、他のものと融和を缺いてゐた。勿論排日運動の中には他の人種上の偏見等諸種の理由もあるが、日本人が團體人として融和を缺く國民的缺陷は、移住者の思想も一變せる今日もなほ充分に補正せねばならぬ缺點である。過去に於いて滿洲に移住せる邦農は先住農民と相入れなかつた。また今後も假令滿洲國が發展し治安が維持されやうと、先住農民と移住農民との軋轢は繰返されやう。この際に邦農はよく己れの使命達成のために、自己の仕事が滿洲國自體のためであり、滿洲開發のためであることを教へしめ、徒に抗争などすべきでない。

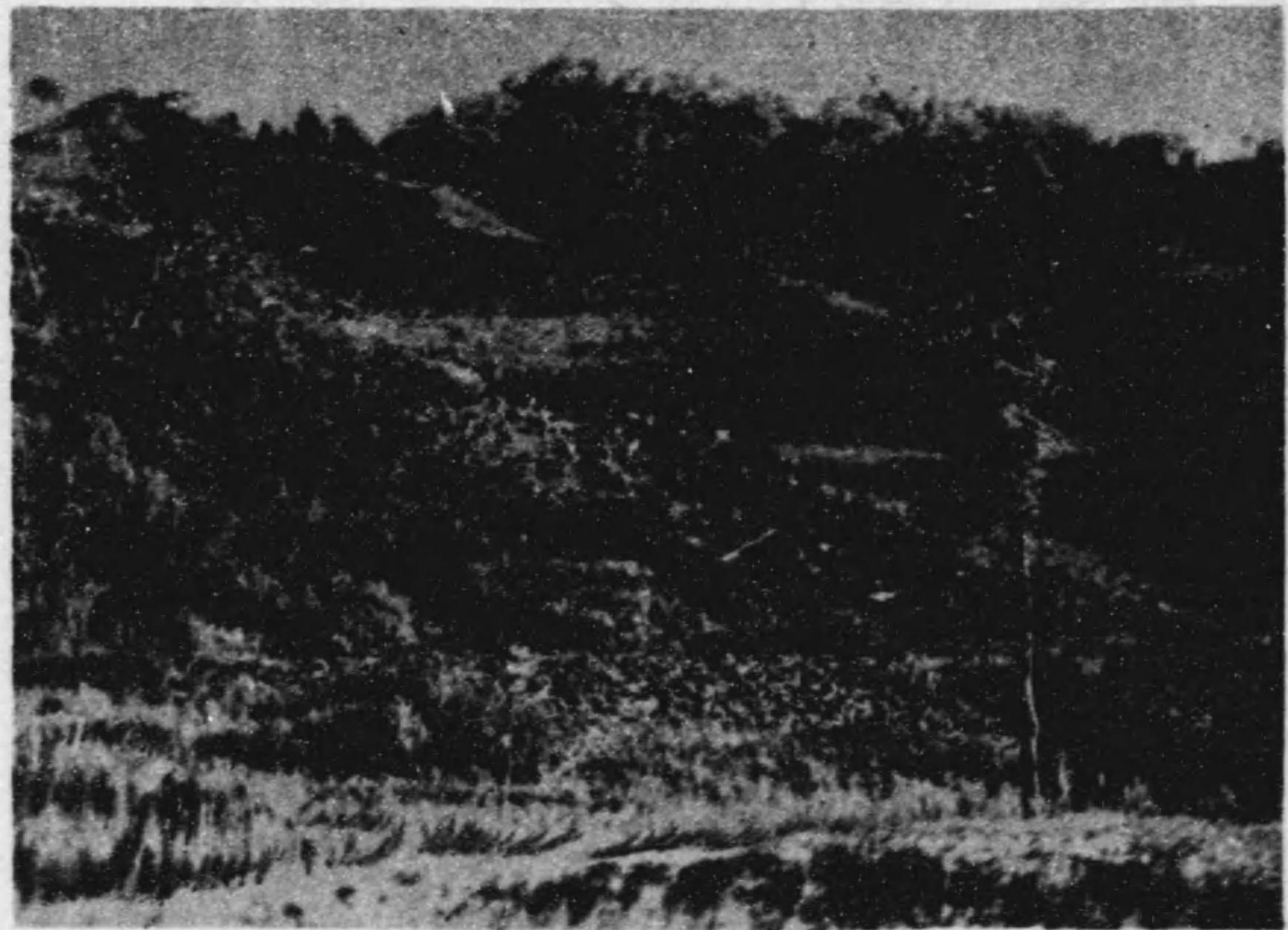
以上の一點を充分心懸けるならば、邦農が北米カルフォルニヤを開發したるが如く、邦農は滿洲をも忽ちに開發するだらう。國民は偏に北米に活躍せる邦人の失敗を鑑み、滿洲に於いては再びこの失敗を繰返さざるやう人間の聰明を覆ふことのなきやう覺悟せねばならぬ。

北米に活躍する邦農



てめ極はとこる見を雪積、もとし殿はさ寒は冬の洲滿 嶺 爺 老
。いなくす

二七



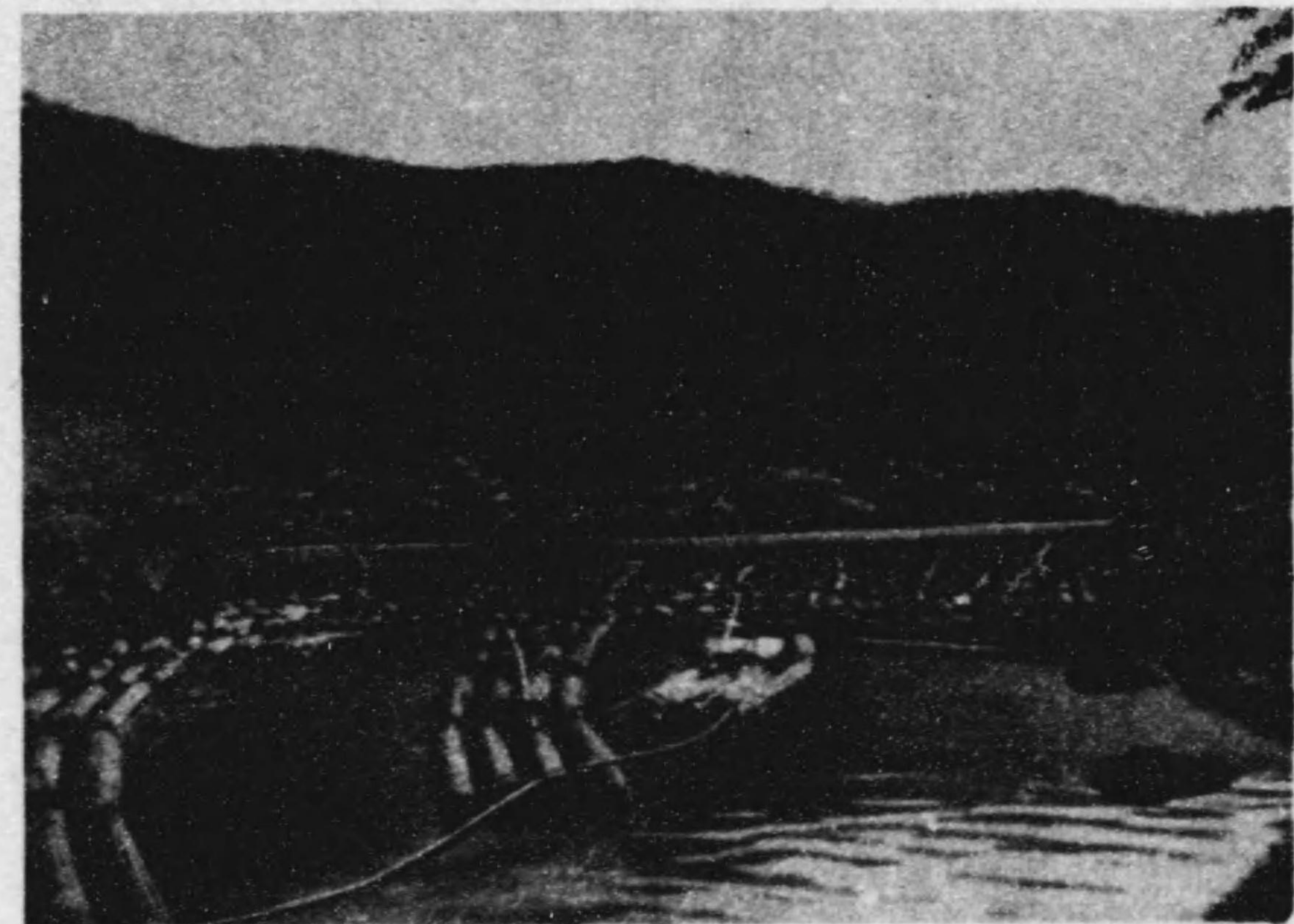
てつなと地耕、てれさ拓開にん盛が林森近最、は地のこ 河道二
。るむてつ變

移植民として邦人の實力



のるす在點の景風るあ趣畫たしうか、に處る到地の洲滿 景風の滿北
。るけ受見を

二六



出搬てつよに運舟、は材木るな富豊のそ、てに近附河哈 流上河林海
。るれさ

移植農民の指導精神

筆はすこしく横路に逸るが、現今日本にとつて移住適地とされてゐる南米ブラジルへの渡航者の多くは、コーヒ―園契約移民として渡航し、四五年はコーヒ―園の労働者として働き、その後借地農となり更に自作農即ち地主となつてゐる。北米に於いても多くは最初労働者として裸一貫からたゞきあげてゐる。こゝに至ると、滿洲移民は多少趣を異にしてゐる。滿洲には已に生活程度の遙かに低い、勤勉なる労働者に溢れ、日本人は到底これ等の筋勞生活者と競争出来ぬ。且つ滿洲先住農民は生活程度また低くその體力は如何なる労働にも堪へこれまた到底邦人が經濟競争に打勝てぬところであると断定し、邦人の滿洲農業移民を不能なりと杞憂するものがある。實狀を知らざる机上の空論を喜ぶ皮相なる見界といはねばならぬ。

その第一は、滿洲には勞働力あつて賃銀の安い苦力は豊富で、これと邦人が労働によつて競争するならば、或ひは負けるかも知れぬが、已に幾度か繰返して述べた如く邦人の滿洲移民は、その農業開發の使命を帯びてゐるので、單なる労働に移住するのではないことを自覺せねばならぬ。

それならば先住滿洲農民がこの労働賃銀の安い苦力を使役して營農せるものと、邦農が彼の地に移住してまた同じ苦力を使役して農業を営むものとを比較するに、先住農民の生活程度また低く到底その競争には打勝てぬの

はいかなる理由かといふに、過去關東洲または滿鐵沿線の邦農の失敗者は、自己を先住民よりも文化的に進んでゐるといふ優越感から、自らは鋤、鍬を取らず、農場經營に就いて新しい研究はせず、郷に入つて郷に習ふ心懸けのないものばかりであつた。如何に滿洲は労働力に豊富で、その賃銀が安からうと、これを活用せず自ら額に汗せずして懷手をしてゐて上前を刎ねやうとする不心得では、到底滿洲先住農民の比ではないのが當然である。かくの如き劣敗者の例をもつて邦人の滿洲移住の不能を唱ふるは片腹痛きことで、現に彼等の中に伍して優位なる地位を示めてゐる實例が多々ある。要するに滿洲に於いて邦人が先住農民の間に介在してよく成績をあげ得るか否かは、その本質的問題でなく、精神のもちやうである。指導精神の確立が望ましい。

而して邦農は明治維新以降農村指導者は常に辛苦勤勉の徳を教へ、その農法の改良を説き、邦農の營農技術は科學的に著しく發展進歩してゐる。加ふに海外にあつて日本人特有の負けじ魂によつて恐るべき活躍をなしてきたつた。たゞ憾むのは共同精神の缺除である。滿洲に於いて邦農の職責は、その産業の開發にあると共に、先住農民と融和して東洋の福利増進にある。統制ある協同組合制度を採用し、自主的經濟組織の上に活躍せねばならぬといふ一事である。

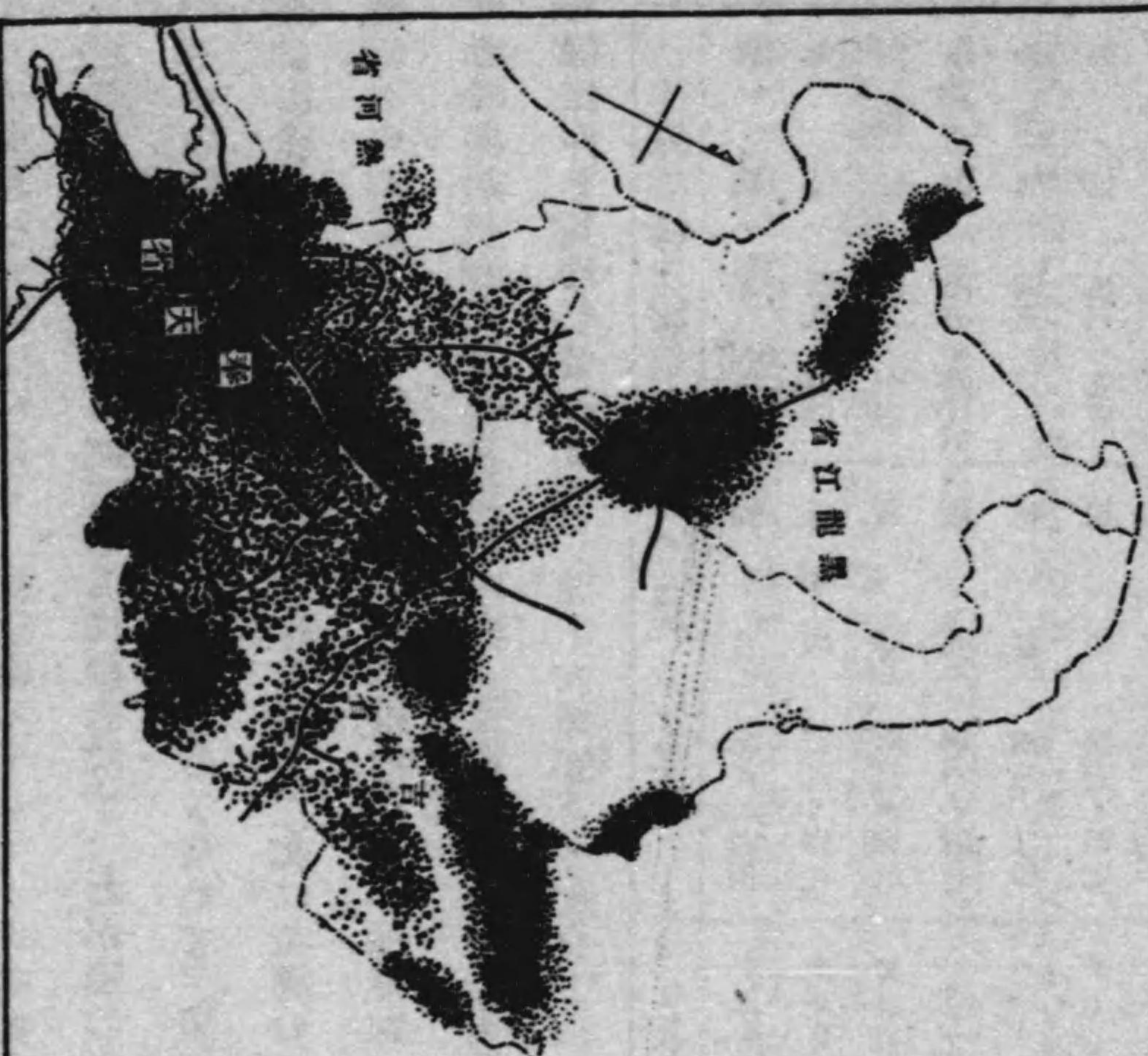
移住地としての満洲國

満洲國の緯度の比較

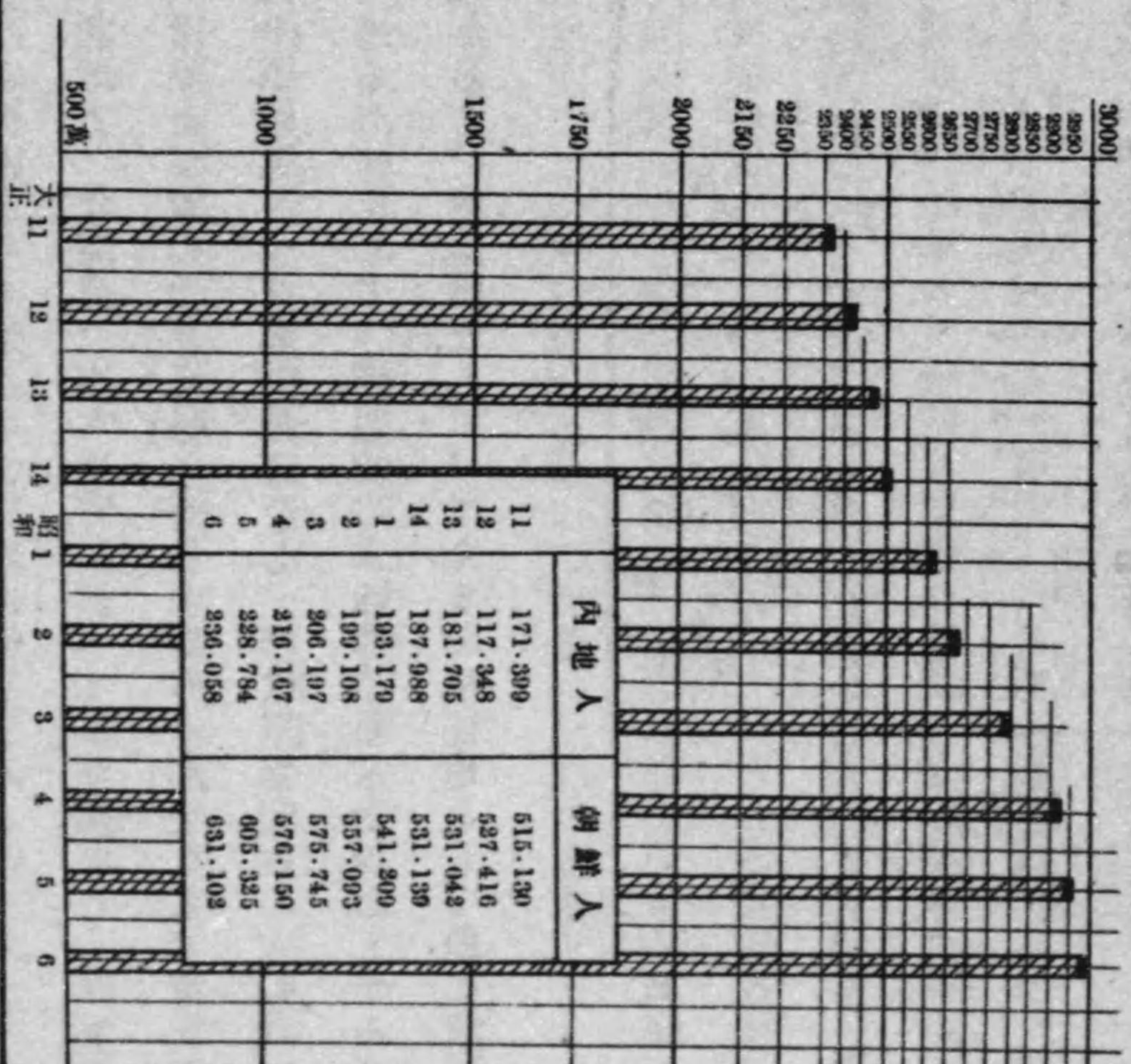
満洲國といへば寒氣骨を刺すが如き北邊^{ほくへん}茫漠^{ぼうばく}なる地域を想像し、その位置及びその面積、地形、氣象等に就いて正しい認識を缺くものゝ多いのを遺憾^{いけん}とする。

しかしてその位置は、事實に於いて北邊國境の如きは不分明にして日ソ滿三國間の問題になつてゐるところもあるが、大體に於いて南は金州半島の南端北緯三八度四五分から、北は黒龍江右岸の北緯五三度三〇分にわたり、その東西は東經八八度二〇分の科布多西部から東經一三五度二〇分の黒龍江烏蘇里の合流點にわたる地域をいふ。しかしかくの如き一面的記述のみにては、事實に於いて未だ充分にその概念を把握^{はあく}し難い。世界地圖を開いて満洲國を指摘し、更にこれを同緯度の世界の他國に比較するならば、意外に同國が高緯度にあることに氣付くだらう。先づその緯度の本邦を見るに、山形縣の山形から樺太の中央に至る地方にあたつてゐる。また北米カリフォルニアのサンフランシスコからカナダのバンクーバーに至る地方、及び歐洲ではイタリーの南端から南歐地帯

滿蒙在住邦人分布圖



滿蒙人口圖表 (全人口)



は、満洲國と同緯度にあり、農業國のデンマークの如きは満洲國よりも遙かに低緯度に位してゐる。たゞその位置が同緯度にあるに拘らばず、わが國の東北地方、北海道、樺太地方に較べて冬期甚だしく寒氣の厳しいのは、その地形、地勢に影響さるゝため、満洲國はわが國の如き島嶼（島嶼）と異り大陸の一部をなし、東北に長白山脈相聳えて日本海との關係を絶ち、北は北滿の大平原に連なつて地平線に没し、西は東部蒙古の大荒野に續いてゴビ沙漠ある故に、その氣象はわが國が海洋性であるのに反して、模範的の大陸性の氣象を現わしてゐる。ために冬期その寒氣は甚だしいが、その緯度は必しも低からず、農業國として、はたまた移住地として他に諸種の好條件を具備してゐる。

滿洲國	日本	北米	西歐
旗順 三八・四七	加茂 三八・四四	サンフランシスコ 三七・四〇	リスボン 三八・五二
大連 三八・五四	金華山 三八・四七	ナクラメント 三八・三四	マドリード 四〇・二四
熊岳城 四〇・一三	青森 四〇・五〇	ワシントン 三八・五三	ロンドン 四一・〇〇
奉天 四一・四八	函館 四一・四八	フィラデルフィア 四〇・〇〇	ローマ 四一・五三
公主嶺 四三・三一	根室 四三・二〇	ニューヨーク 四〇・四二	マルセイユ 四三・二三
新京 四三・五五	旭川 四三・四七	デトロイト 四二・二四	ボルドー 四四・四八
鄭家屯 四三・四〇	大泊 四六・三九	ミネオポリス 四五・〇〇	ヴェニス 四五・二四
哈爾濱 四五・七〇		シヤトル 四七・三二	ブタベスト 四七・三二

土地は如何に利用されてゐるか

已に満洲國の位置の概念は得られたと思ふ。しかし世人はなほ滿洲と呼び、滿蒙といひならはされてゐて、極めて概念的にこれを取扱ひ、その地理的境域の漠としてゐるものが多い。滿洲とは嘗て女眞民族の住した滿洲と蒙古諸族の住した東部内蒙古の地域を包括するもので、ために滿蒙とも稱せられ行政上は東北四省即ち遼寧省（奉天省）、吉林省、黒龍江省、熱河省及び新たに設けられた興安省を指してゐるが、その中、熱河省と興安省を除いた東三省を通常狹義に滿洲と呼んでゐる。しかしこの東三省の中でも今日猶東蒙の一部の地は王公の封建的地域があり、縣令は布かれず、數字的調査も不充分である故に、これ等の地域を除いて今後は説述することゝする。また今後の統計も、調査不充分なる地の數字は示されてゐない。

滿洲の總面積は、昭和四年度滿洲産業統計に六七・一四二方里（一・〇三五・五三〇平方杆）、人口二九・一九七・九二〇人、人口密度は一平方杆に二八・一人になつてゐる。これを省別にすると遼寧省は八〇・九人、吉林省は三三・九人、黒龍江省は八・八人の割であつて、日本内地の人口密度に比較するときは五・八分の一、日本全體からみると四・四分の一に相當してゐる。

地域	總面積		人口	人口密度		既耕地
	方里	平方杆		一方里當	一平方杆當	
遼寧省	一二・〇〇八	一八五・一九九	一四・九八八・五六〇	一・二四八	八〇・九	五・一七六
吉林省	一七・三六〇	二六七・七四三	九・〇七五・六三〇	五二二	三三・九	二・九〇一
黑龍江省	三七・七七四	五八二・五八八	五・一三三・七三〇	一三六	八・八	二・〇八四
合計	六七・一四二	一・〇三五・五三〇	二九・一九七・九二〇	四三六	二八・三	三・四四〇
熱河省	一〇・一六八	—	四五〇・〇〇〇	—	—	—
關東州	二二四	三・七二五	八八三・七七八	—	三五七・〇	—
滿鐵附屬地	一七	—	三四二・〇四三	—	—	—
日本總面積	四三・七三七	六七四・八七八	九〇・三五五・〇四一	—	一三四	—
内地	二四・七一九	三八二・〇七四	六四・四四七・七二四	—	一六九	—
朝鮮	一四・三二二	二二〇・七四七	二二・〇五七・九六七	—	九五	—
臺灣	二・三二四	三五・九七四	四・五九四・一六一	—	一二八	—
南洋	二・三三九	三六・〇九〇	二九五・一八七	—	八	—
南洋	一三九	二・一四九	六九・六二七	—	三二	—

なほこれを理解やすからしむるために、グラフに表示すれば別圖の如くである。

またこれを中國の省別（一九二五年現在）の人口と人口密度に比較するときは、滿洲國は猶人口の包容力を有することを教へられ、かの山東の出稼移民の移住も肯ずかれる。

しかして滿洲の地の如く廣袤たる地域に、鐵道として基幹をなすものが一部分のみに敷かれ、他は河川による交通の便宜を與へられてゐる未開地はその人口の分布は極めて偏在的にして、その内部は新京を中心人口密度濃く、滿鐵幹線の背後に向つて密集してゐる。ために遼寧省の東北及び南部は殆んど開拓されておるといつてもよい。この邊は舊くから徠住した民族は各部落を形成しており、四洮線及び洮昂線の西部背後は現在刻々と開拓されてゐるから、漸次に人口の密度も濃くなつてゆくことは想像に難くない。

また哈爾濱を中心として東支南部線一帯も既に人口の密度は相當に稠密を示してゐるが、東支東部線、松花江下流地方、東支西部線地方はその人口密度は猶南滿地方の三分の一乃至は十分の一の稀薄なる有様で、如實に鐵道の敷設が植民を促し、移民はこの沿線の地味の豊沃なる地域に分散してゐることを物語つてゐる。

地方別	總面積(平方杆)	人口	人口密度(一平方杆)
奉天以南地方	七一・八五五	七・〇五七・二七〇	九八・二
京奉線地方	一七・五九八	二・三三五・六〇〇	一三二・七
開原地方	二一・八〇八	二・八〇八・一四〇	一二八・七
瀋海線地方	二三・五八二	一・二〇六・一六〇	五一・一

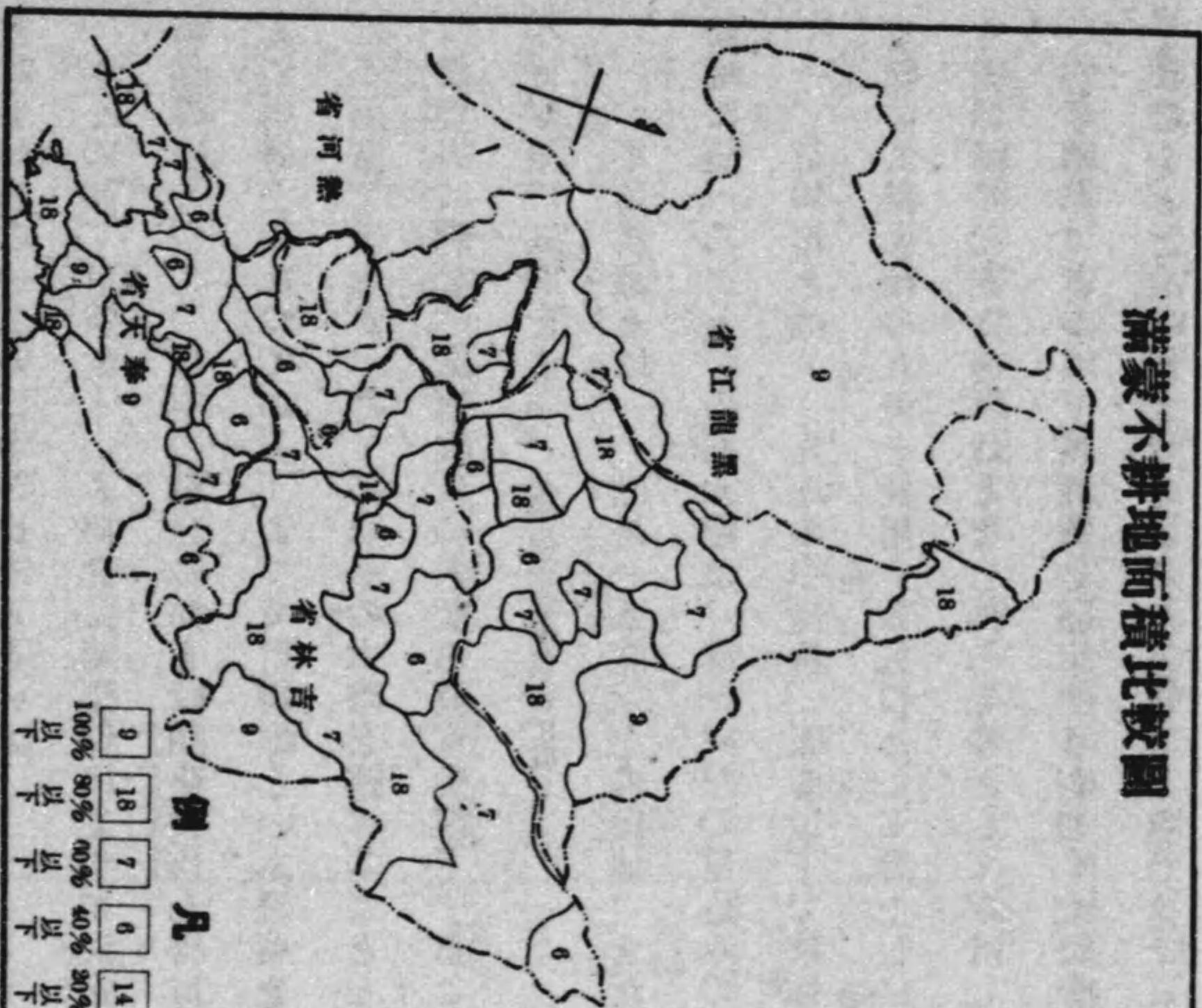
土地は如何に利用されてゐるか

部	北	部
北滿その他の地方	一・〇三七・五二九	二八・一
東支西部線地方	三〇一・七五〇	〇・七
東支東部線地方	二二七・五六六	一二・二
呼海線地方	二二七・五六六	三七・七
松花江下流地方	三九・七九九	二〇・七
東支東部線地方	九一・五九七	二〇・七
哈爾濱省區	六一・一八三	一八七・八
東支南部線地方	二八・〇二四	九〇七・四
哈爾濱省區	五二四	七五・三
東支南部線地方	二・一一一・三〇〇	七五・三
四洮線地方	四六・二八四	一三八・七
長春公主嶺地方	一八・八七八	一八・〇
吉長線地方	四八・九二二	二五・六
間島地方	三九・一五九	一四・七
東支南部線地方	二・六二〇・二〇〇	一四・七
四洮線地方	一・二九七・七三〇	一八・〇
長春公主嶺地方	一・二五三・〇七〇	二五・六
間島地方	五七八・〇〇〇	一四・七
東支南部線地方	二・一一一・三〇〇	七五・三
哈爾濱省區	四七五・四九〇	九〇七・四
東支東部線地方	一・一四九・一五〇	一八七・八
呼海線地方	一・八九九・四九〇	二〇・七
松花江下流地方	一・三八九・二三〇	三七・七
東支東部線地方	二・七九一・九八〇	一二・二
哈爾濱省區	二二五・一一〇	〇・七
東支南部線地方	二九・一九七・九二〇	二八・一

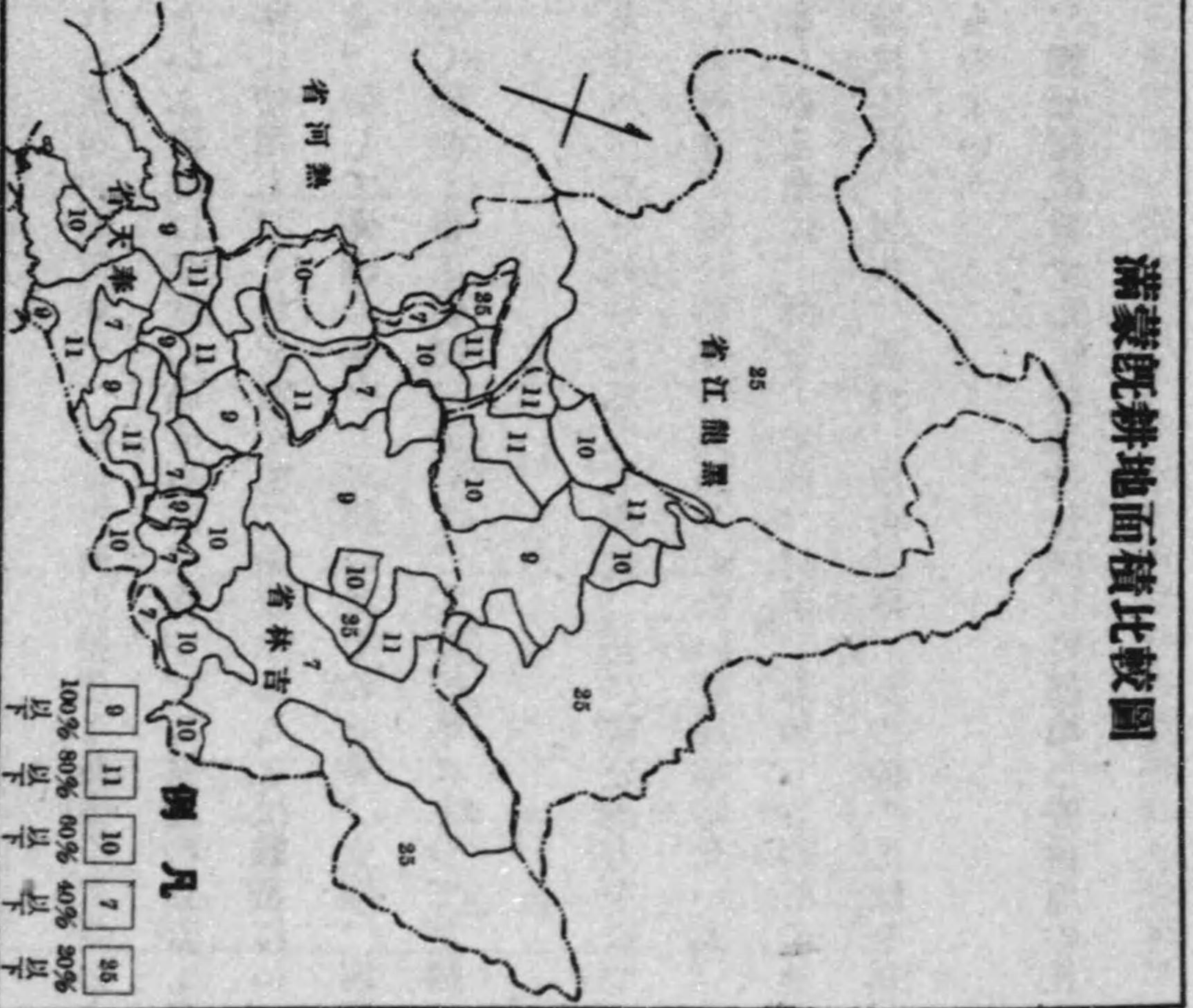
將來を約する土地利用狀況

日本の山村に行けば、山腹の六七合目に至るまで段階をなして開墾し、耕作せられてゐるのを見受ける。また識者中には立體農法を唱へ日本の農村の可耕地は現在よりも更に一段の高所まで開墾することによつて、更に可

滿蒙不耕地面積比較圖



滿蒙既耕地面積比較圖



將來を約する土地利用狀況

耕地を現在の一二割は増加出来るといふ。

かくの如く可耕地といふ概念は諸條件によつて決定される相対的の言葉で、社會經濟の發達と農業の經營の合理化等によつて、日本の場合の如きは開墾耕作し得可しといふ限界は極度に高められ、従つて可耕地の分野も過去の場合と異なつてゐる。よつて可耕地といふ言葉を嚴密に使用し、これを數字的に論及することは嚴密にいへば不適當であるが、こゝにはその大略を述べることとする。而して滿洲の場合、可耕地はその地勢、土壤、四圍の環境等に應じ、土地改良に大なる資本を投下することなく開墾し得る範圍に於いて、左の標準によつて可耕地、不可耕地の區別をする。(滿洲調査報告書に據る)

一、不可耕地とは 傾斜一五度以上の山地、また雜草さへ生育せぬ砂丘地や石礫地、及び當分人力を以つて耕地に變へることの出來ぬ濕地、當分開墾の見込みのない森林地、更に耕作の見込みのない曹達地等をいふ。

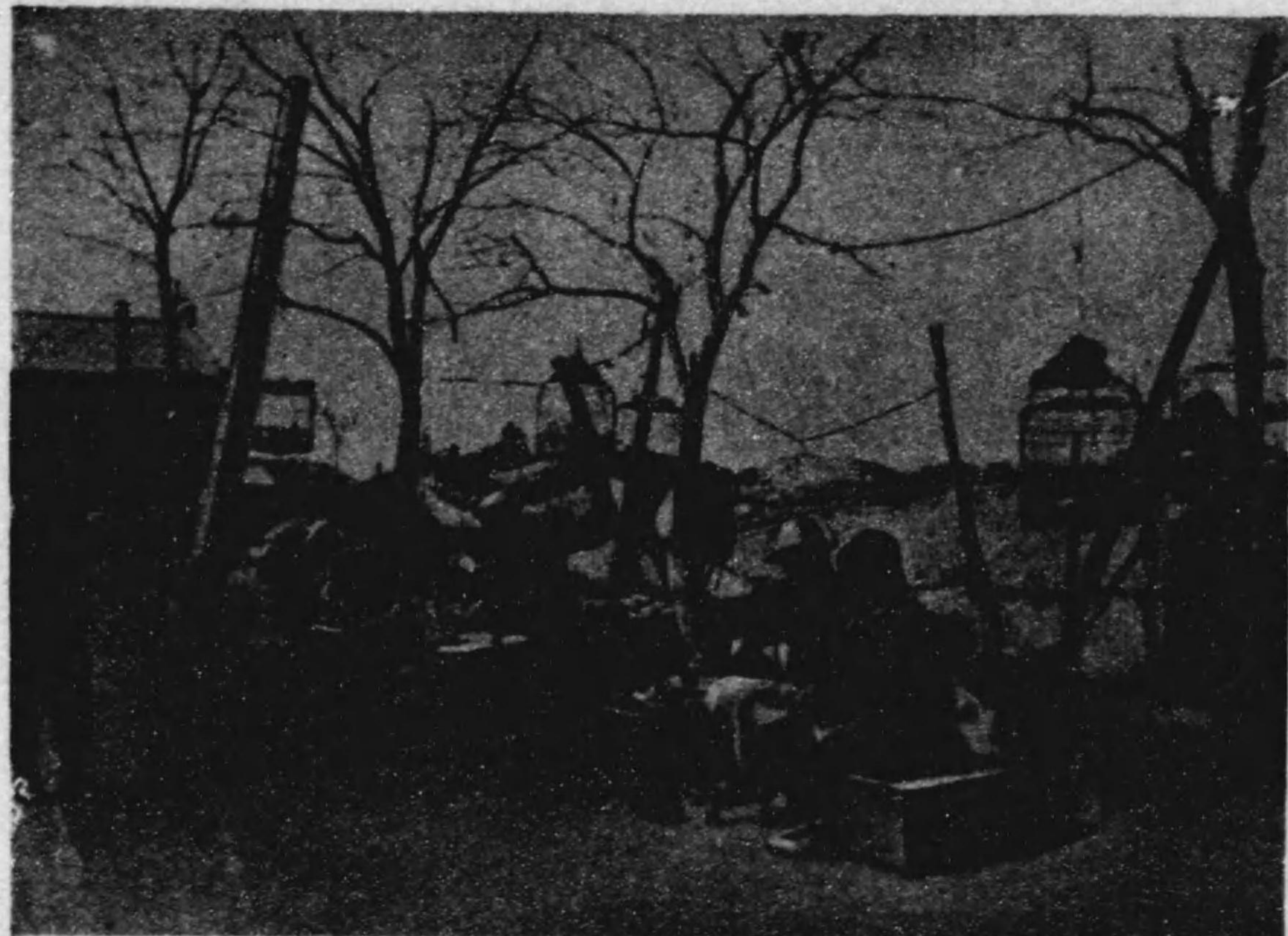
一、可耕地とは 丘地の中傾斜一五度以下で耕作をなし得る地は、溝谷、地隙、村落、墓地、寺廟等の地域を除いて總面積の五%を使用するものとして計上し、平地は道路、河川、墓地、市街村落、その他の地域を差引き總面積の七五%を耕地となし得るものとして推計したものをいふ。

右の標準によつて、滿洲國を圖示するが如く七區分し、總面積に對する可耕地の比率、可耕地と既耕地の比率を推算すると次の如くである。(大正四年度の調査)

これはいづれも推定調査によるものにしてその後滿洲の經濟界の動向並に、諸種の産業統計調査から推算すると、滿洲の可耕地はいまだその二分の一しか開墾されてゐないことになる。

昭和四年度の土地利用の比率は次の如くである。

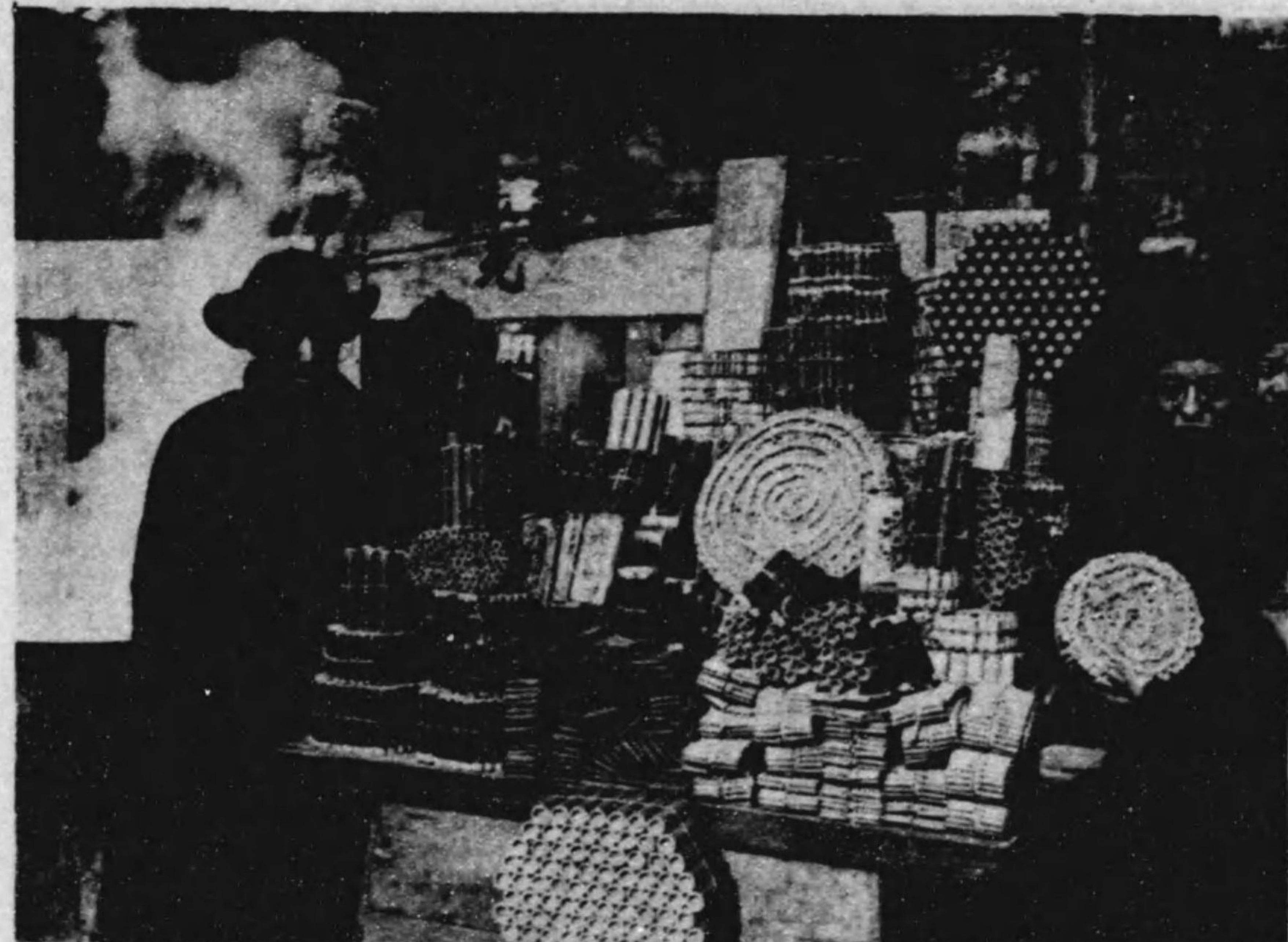
省別	總面積		總面積に對する比率				可耕地に對する比率	
	方里	町	可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地
遼寧省	一二・〇〇八	一八七・七四八・四三	三四・六%	六五・四%	二四・一%	一〇・五%	六九・七%	三〇・三%
吉林省	一七・三六〇	二六九・九八二・七三	三九・七%	六〇・三%	一八・〇%	二一・七%	四五・五%	五四・六%
黑龍江省	三七・七七四	五八七・四六一・二四	二一・二%	七八・八%	六・五%	一四・七%	三〇・七%	六九・三%
計	六七・一四二	一・〇四五・一九二・四〇	二八・四%	七一・六%	二二・六%	一五・八%	四四・五%	五五・五%
熱河省	一〇・一六八							
關東省	二二・四							
滿鐵附屬地	一七							
日本内地	二四・七一九				一五・〇%			
朝鮮	一四・三二二				二〇・〇%			



かこどていどな雀雲てつ遠とし直靴の傍路の京東 し直靴の傍路
るすが分氣の的陸大



の趣に常非、で板看の店食飲、はのるゐてれさ出に頭街 板看の舗店
るあでのもたつ異



あを火花、は日の祭やひ祝は人那支、てついと竹爆 賣火花の道街
るあが慣習ふ合ひころよてけ



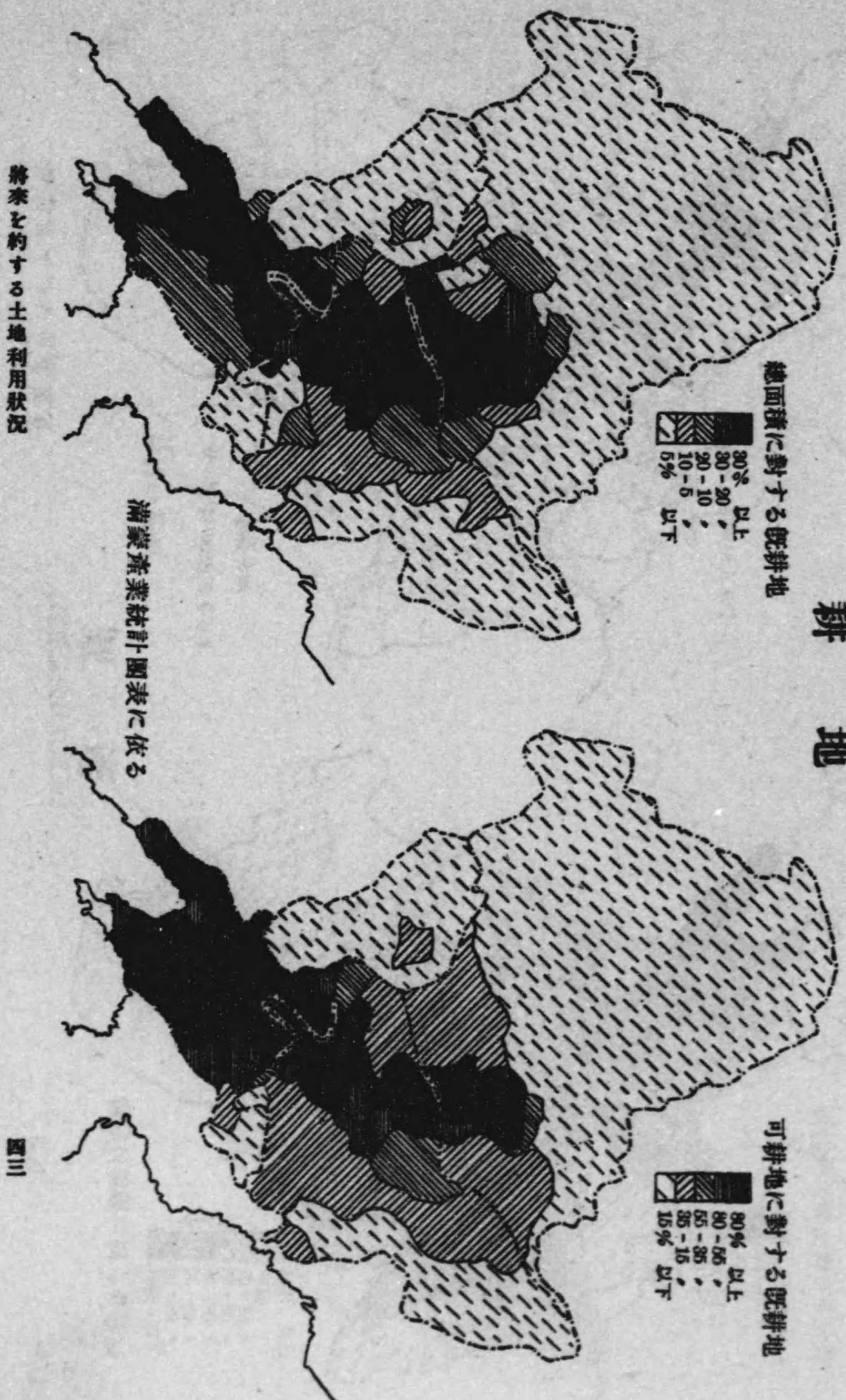
民土。るあが傾ぬ來出分十が溶入、はで洲満いし乏に水 浴 水
。態の浴水の

しかしてこの農耕地は如何に利用されてゐるかといふのに、滿洲の農産物の種類數十種の中、就中その特産物として知られる大豆、高粱、粟は總耕地の七〇%まで占めてゐる。猶詳細は次の項農業上から見た滿洲國に記述することとしこゝには村越信夫氏の Geographical Review 誌上に發表せられたる圖を掲げておく。

	作付面積	全耕地の比	遼寧省	吉林省	黑龍江省
大豆	四〇二・六一四七 ^町	三〇・三%	二〇・五%	三〇・〇%	三五・〇%
高粱	二九九・二〇六七	二二・五%	三四・六%	一八・二%	一三・八%
粟	二二五・一一三五	一六・二%		(平均)	
玉蜀黍	八八・四一七九	六・七%			
小麥	一三〇・八九二二	九・九%			
水稻	八・九〇八六	〇・七%			
陸稻	一一・二九〇六	〇・九%			
その他	一〇五・二九九一	七・九%			
煙草	四・四五六〇	〇・五%			
棉花	三・四三二五	〇・二%			

以上の圖及び表によつて大豆は東支東部沿線は滿洲の穀倉とも稱せられ、東支兩部線及び吉長線に通ずる一帯

耕地

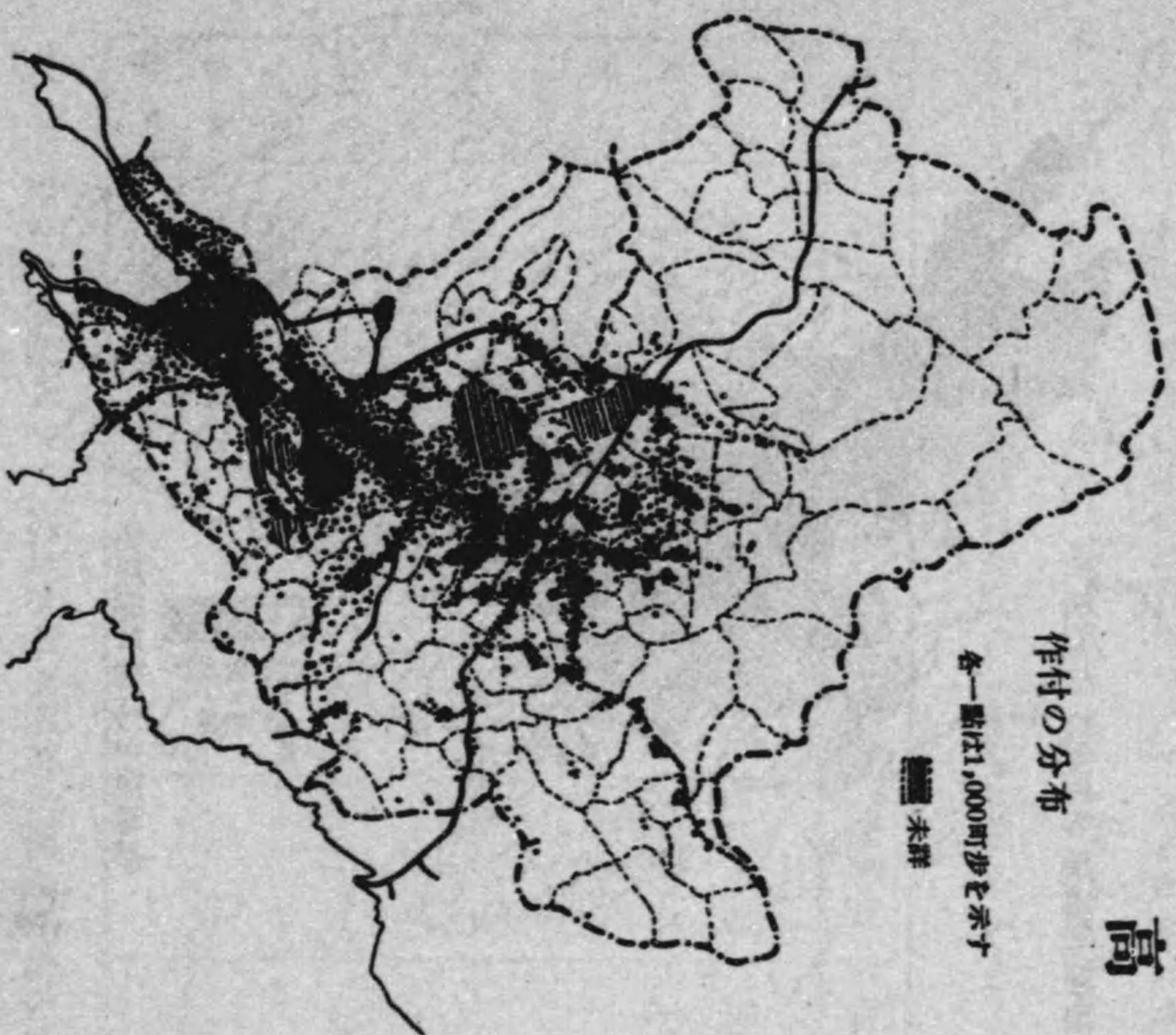


滿蒙産業統計圖表に依る

將來を約する土地利用狀況

四三

移住地としての滿洲圖



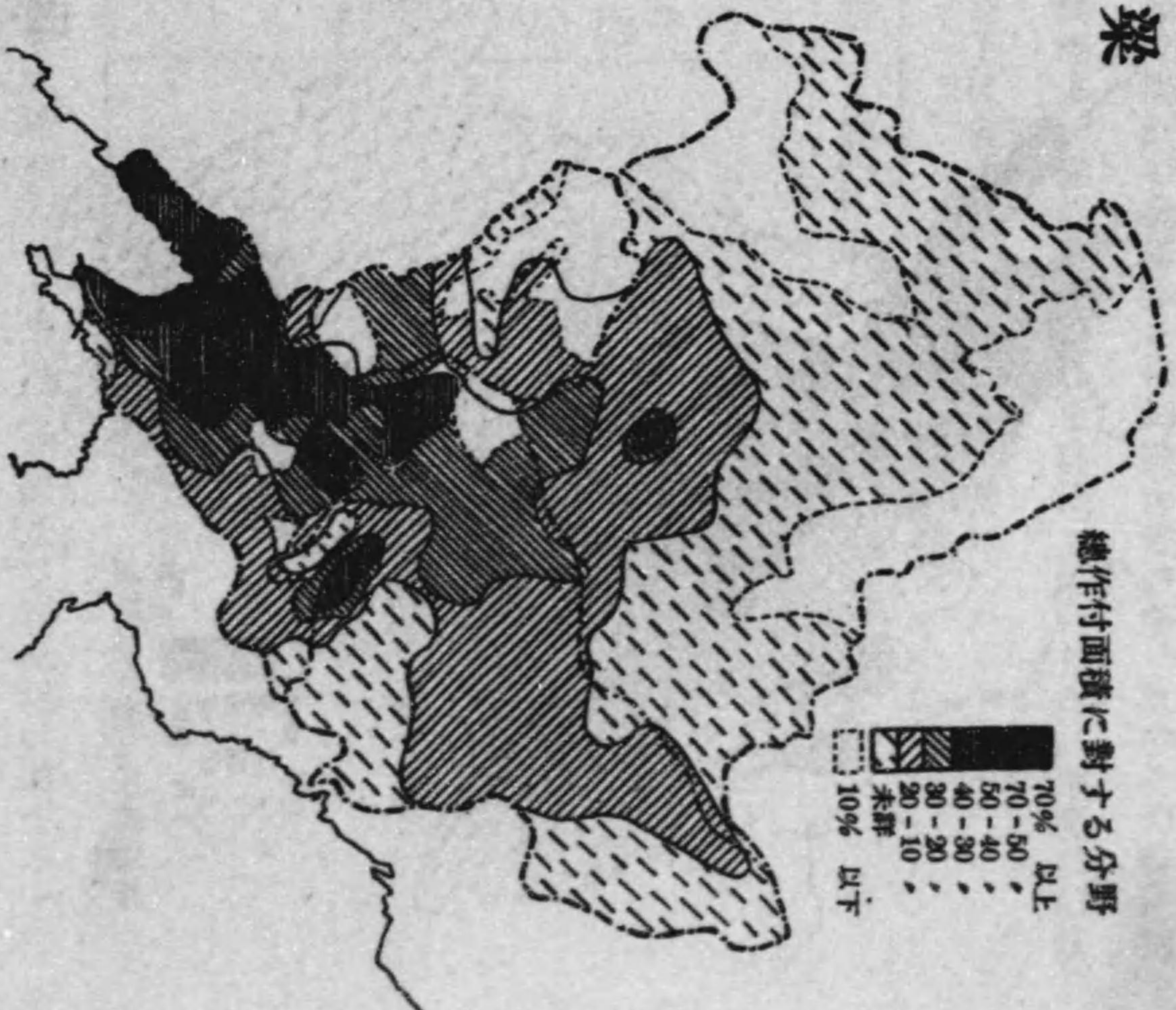
作付の分布
 各一點は1,000町歩を示す
 未詳

高粱

(村越信夫氏に依る)

四四

總作付面積に對する分野

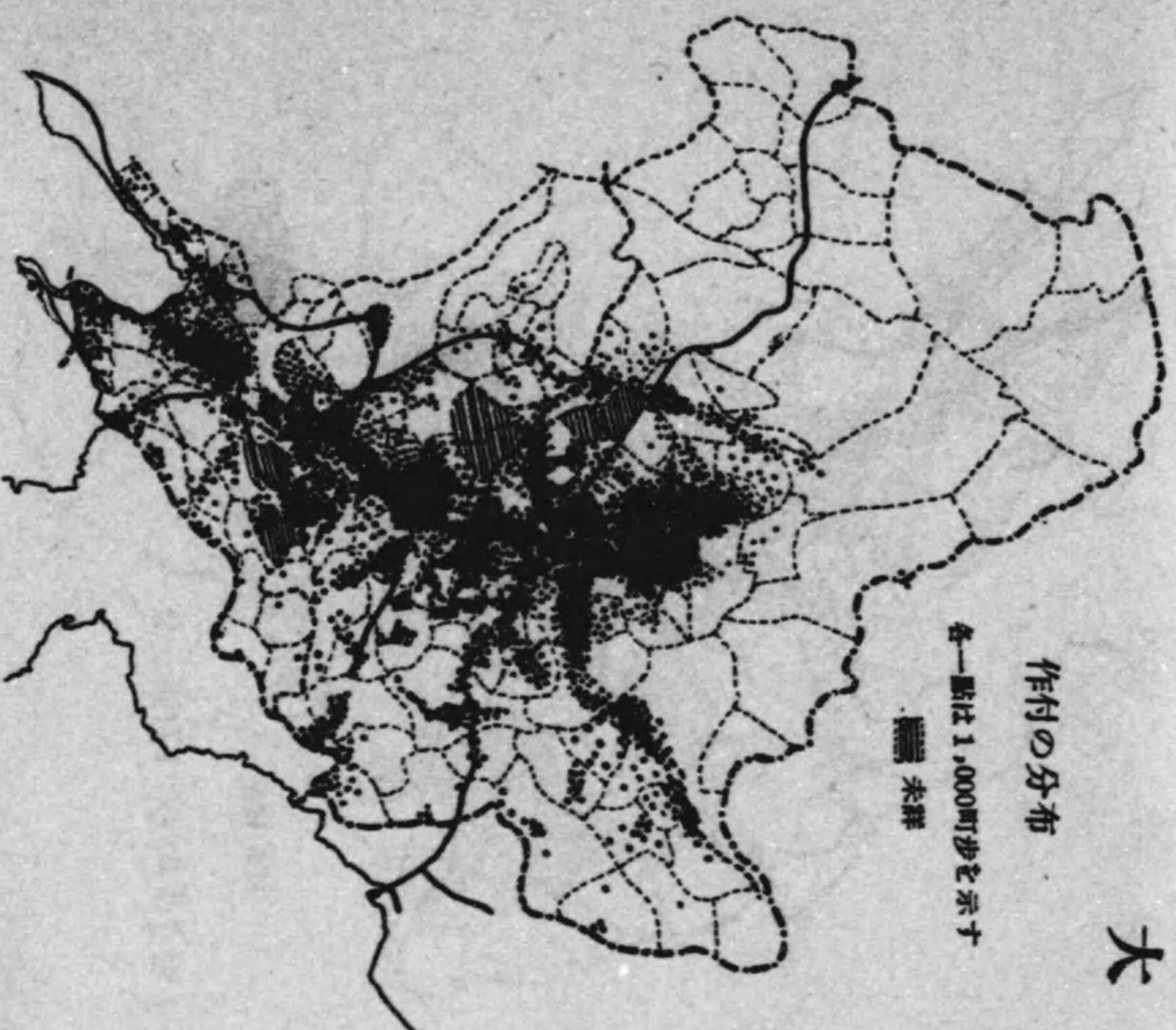


作付の分布
 各一點は1,000町歩を示す
 未詳

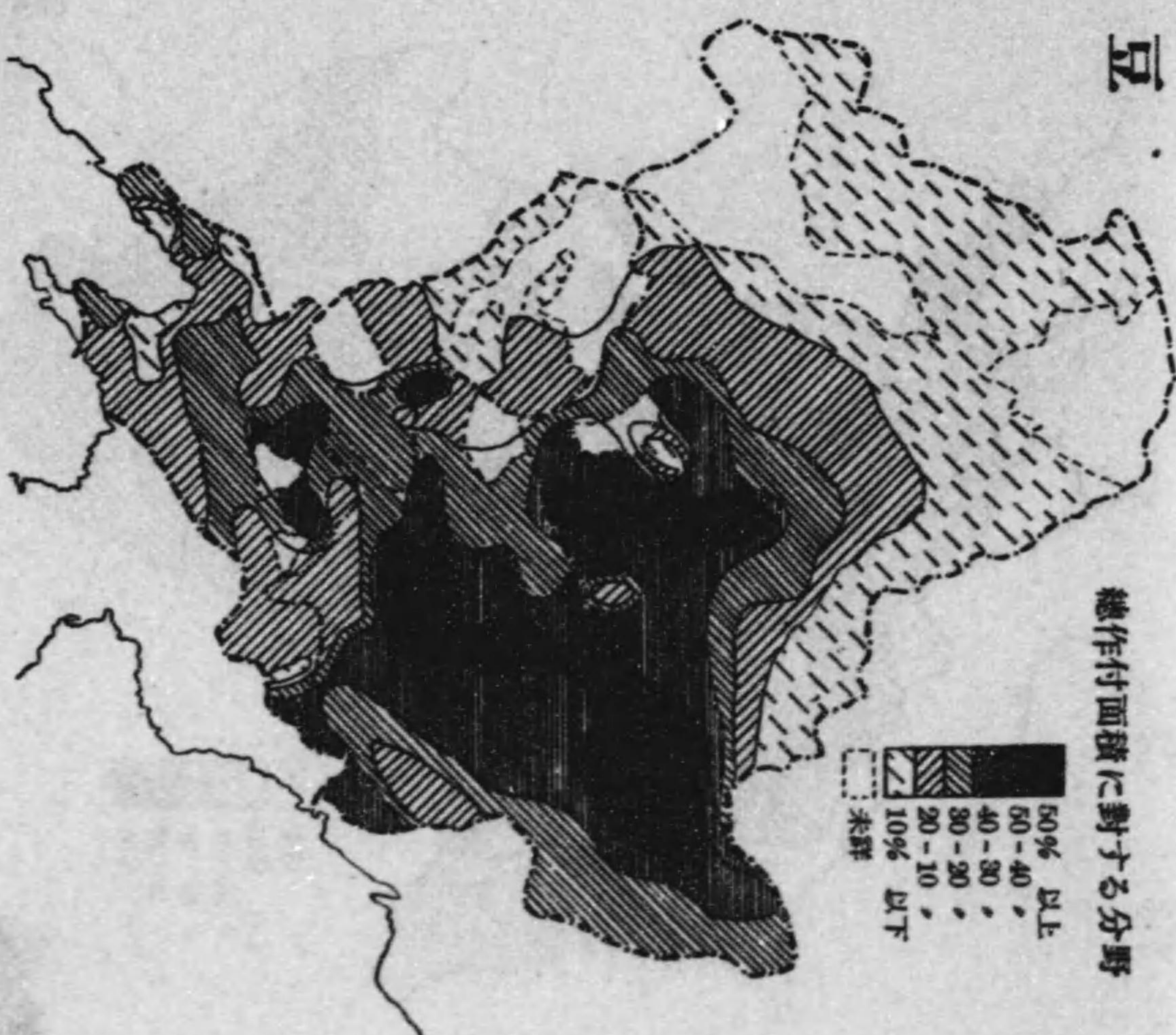
大豆

(村越信夫氏に依る)

將來を約する土地利用狀況

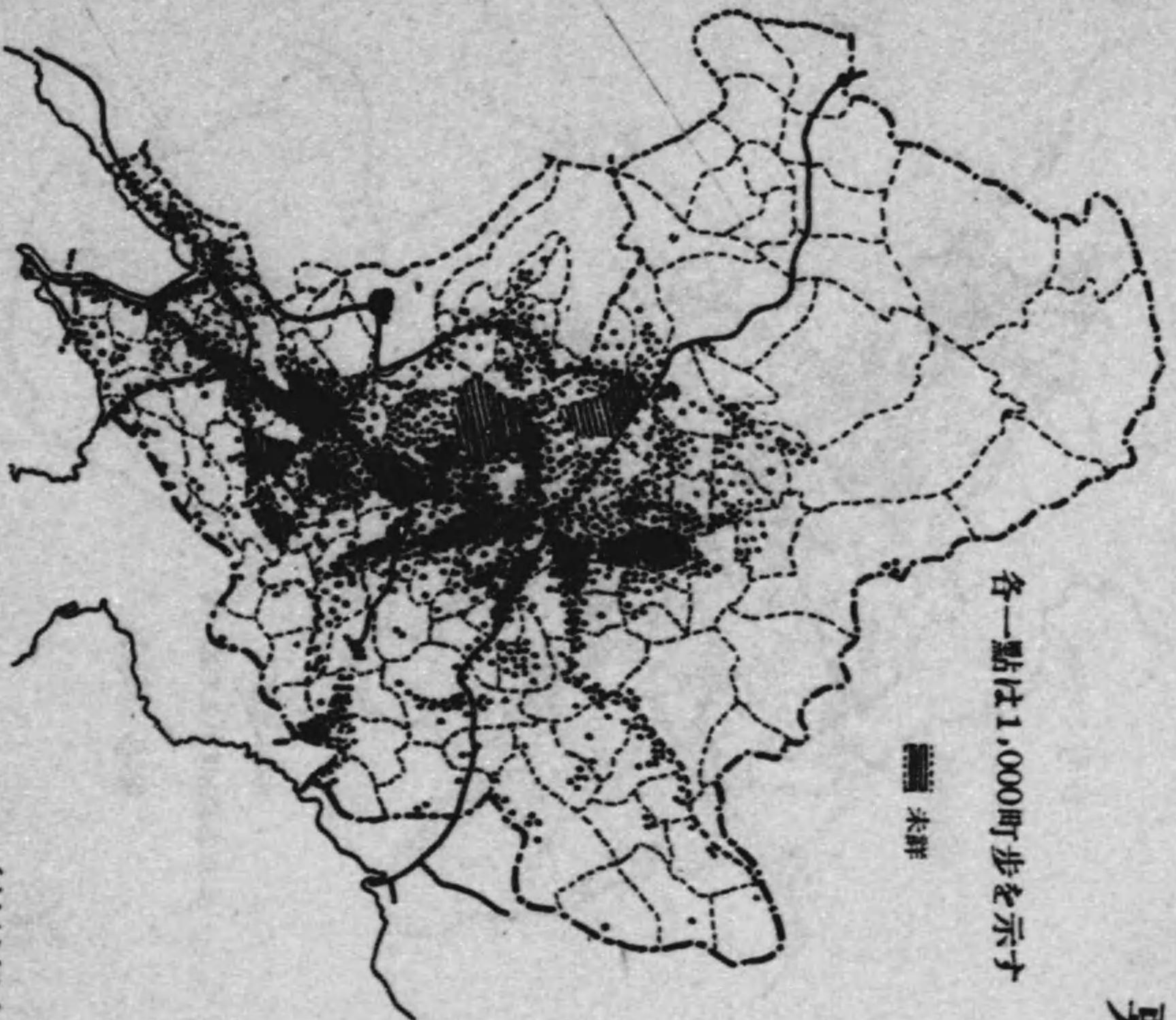


總作付面積に對する分野



四五

移住地としての満洲國



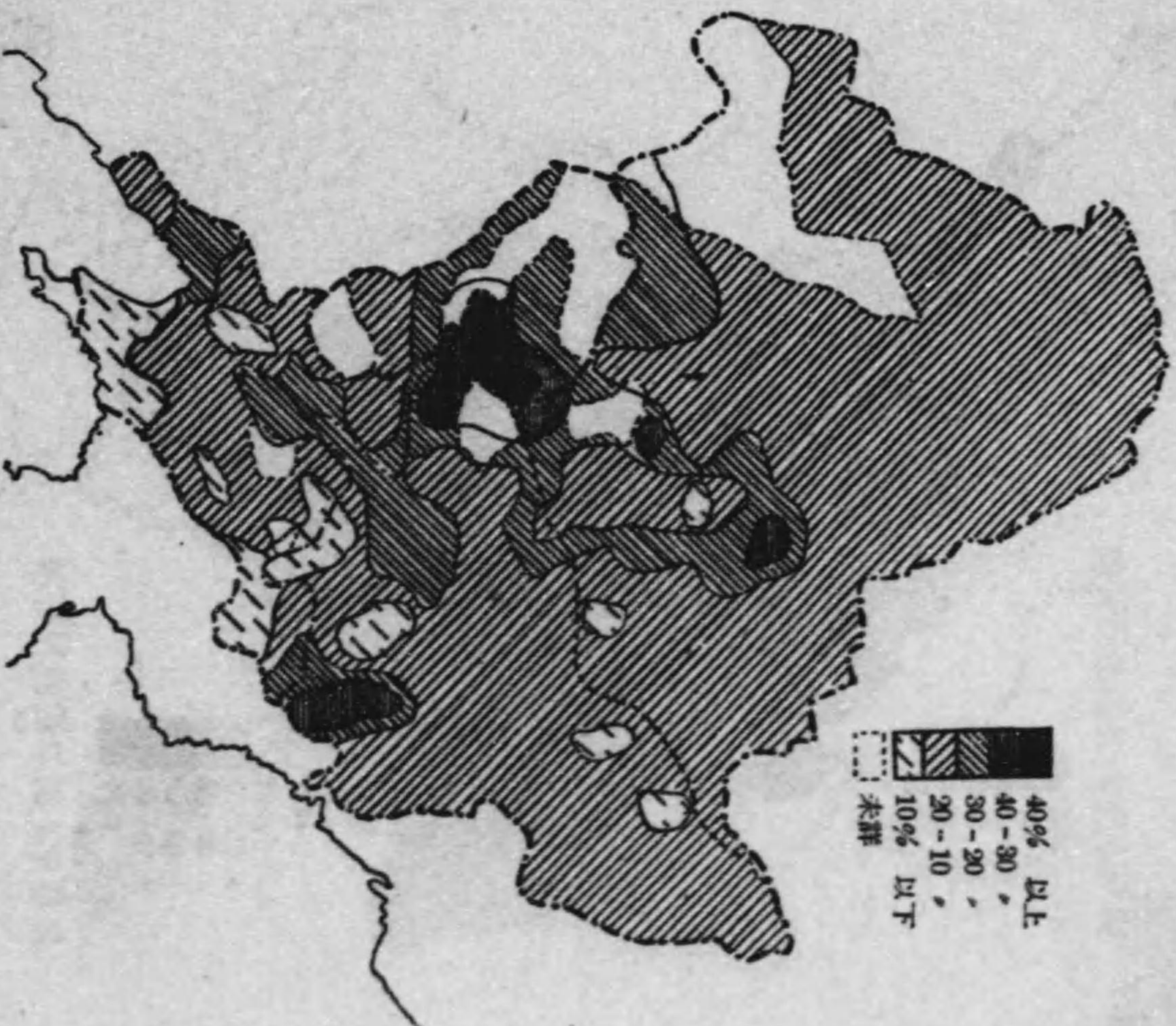
各一點は1,000町歩を示す

■ 未詳

粟

(村越信夫氏に依る)

四六



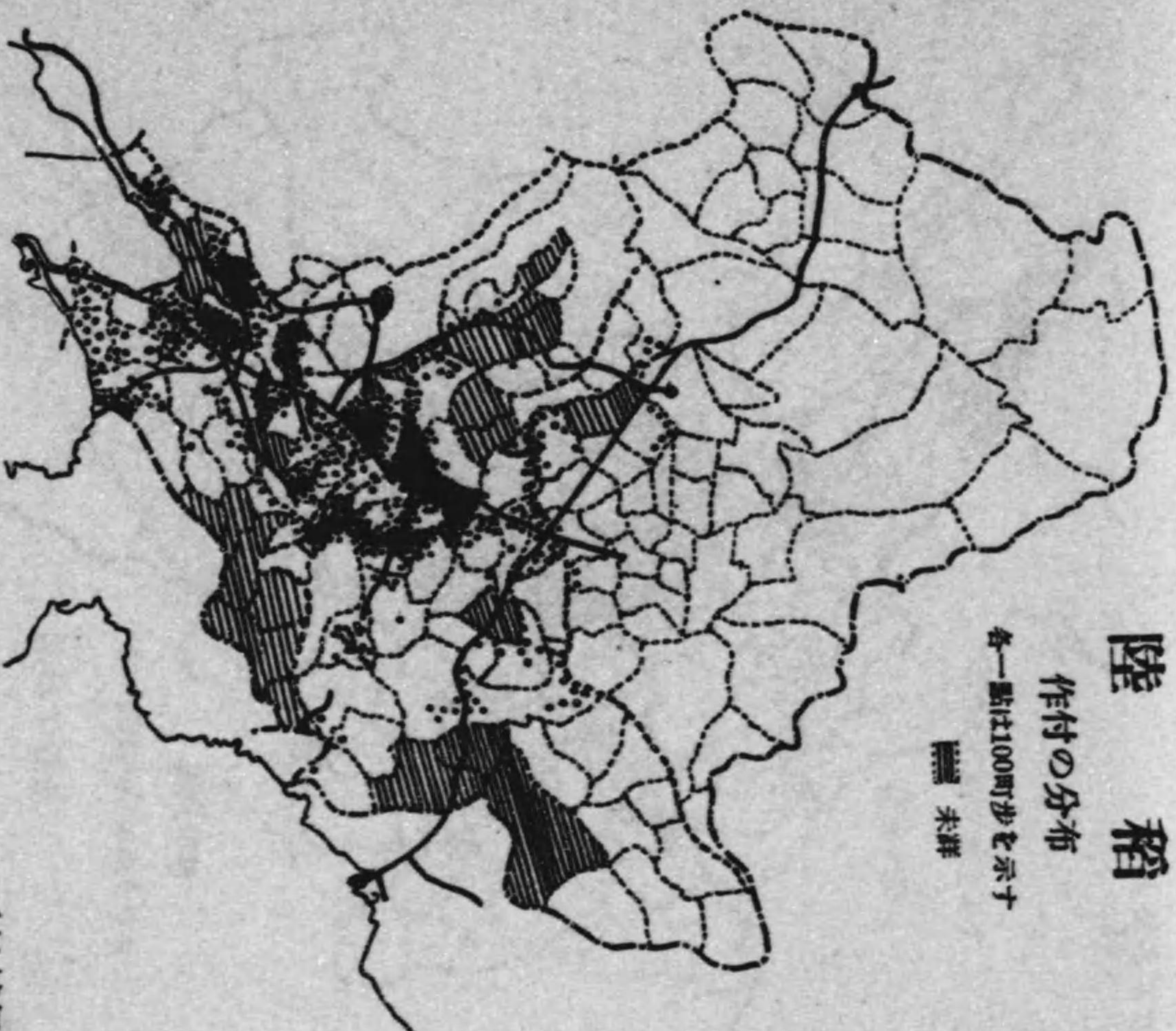
40% 以上
30-40
20-30
10-20
10% 以下
未詳

陸 稻

作付の分布

各一點は100町歩を示す

■ 未詳



將來を約する土地利用狀況

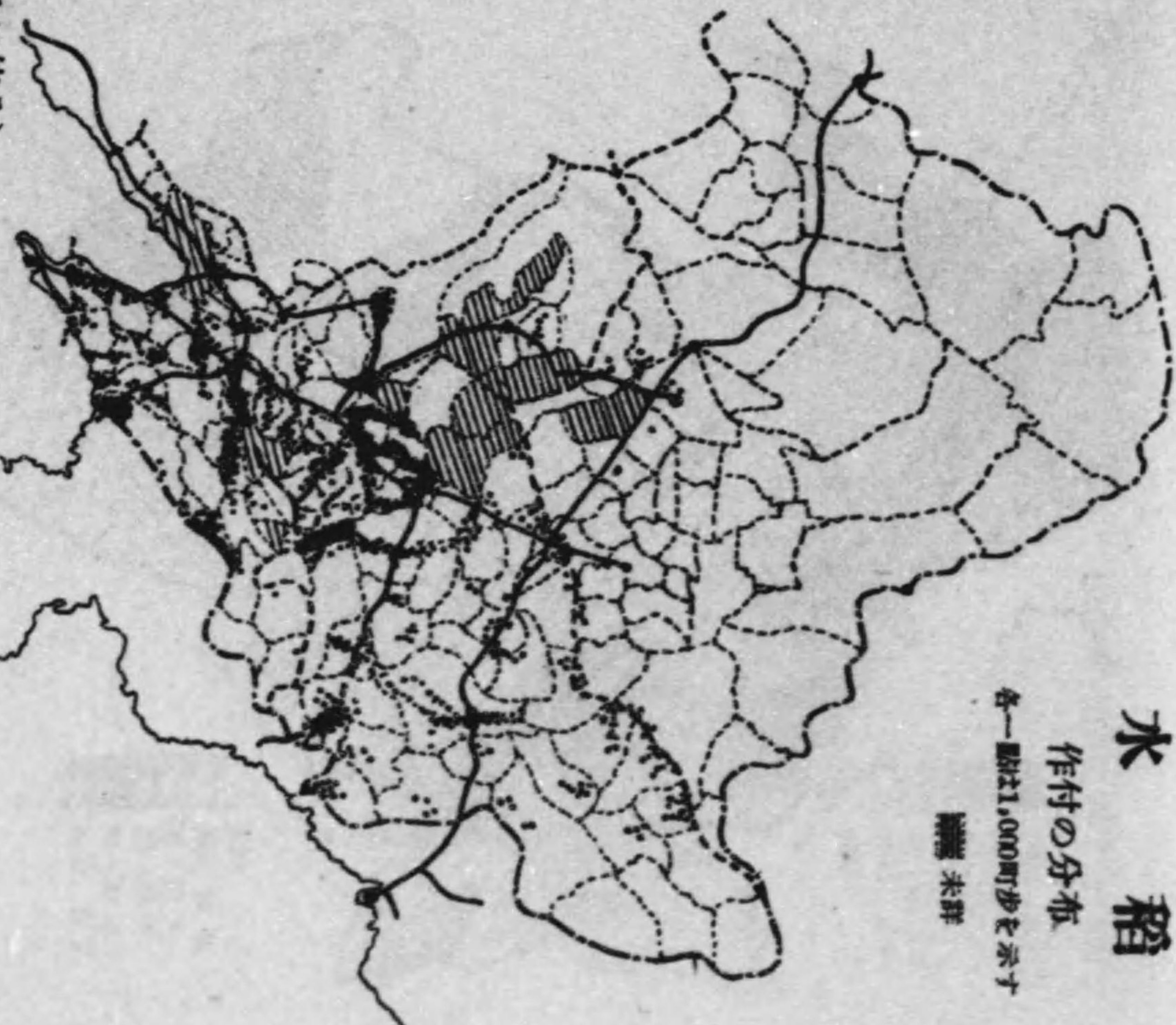
(村越信夫氏に依る)

水 稻

作付の分布

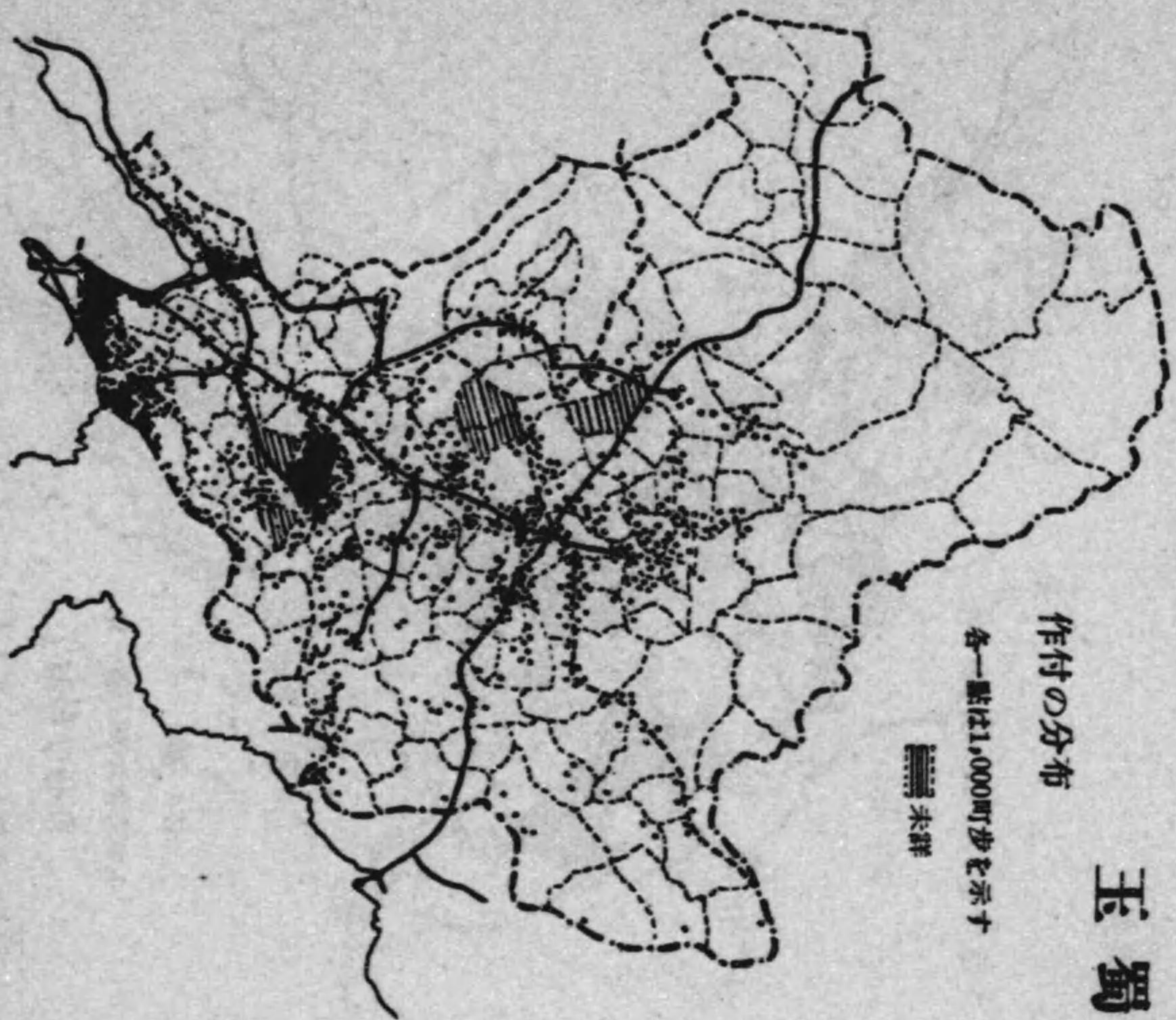
各一點は1,000町歩を示す

■ 未詳



四七

移住地としての滿洲國



作付の分布

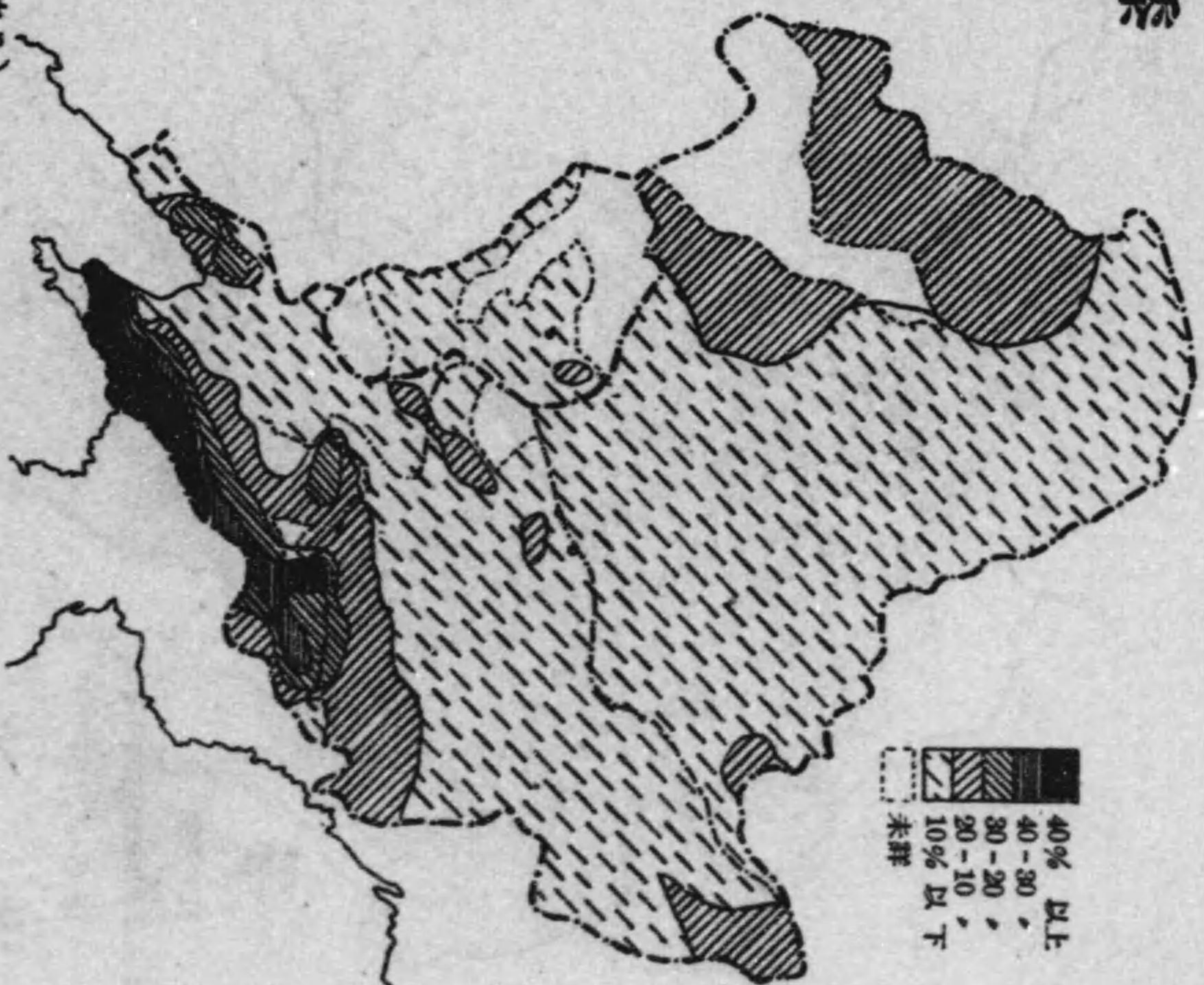
各一畝は1,000町歩を示す

未詳

玉蜀黍

(村越信夫氏に依る)

四八

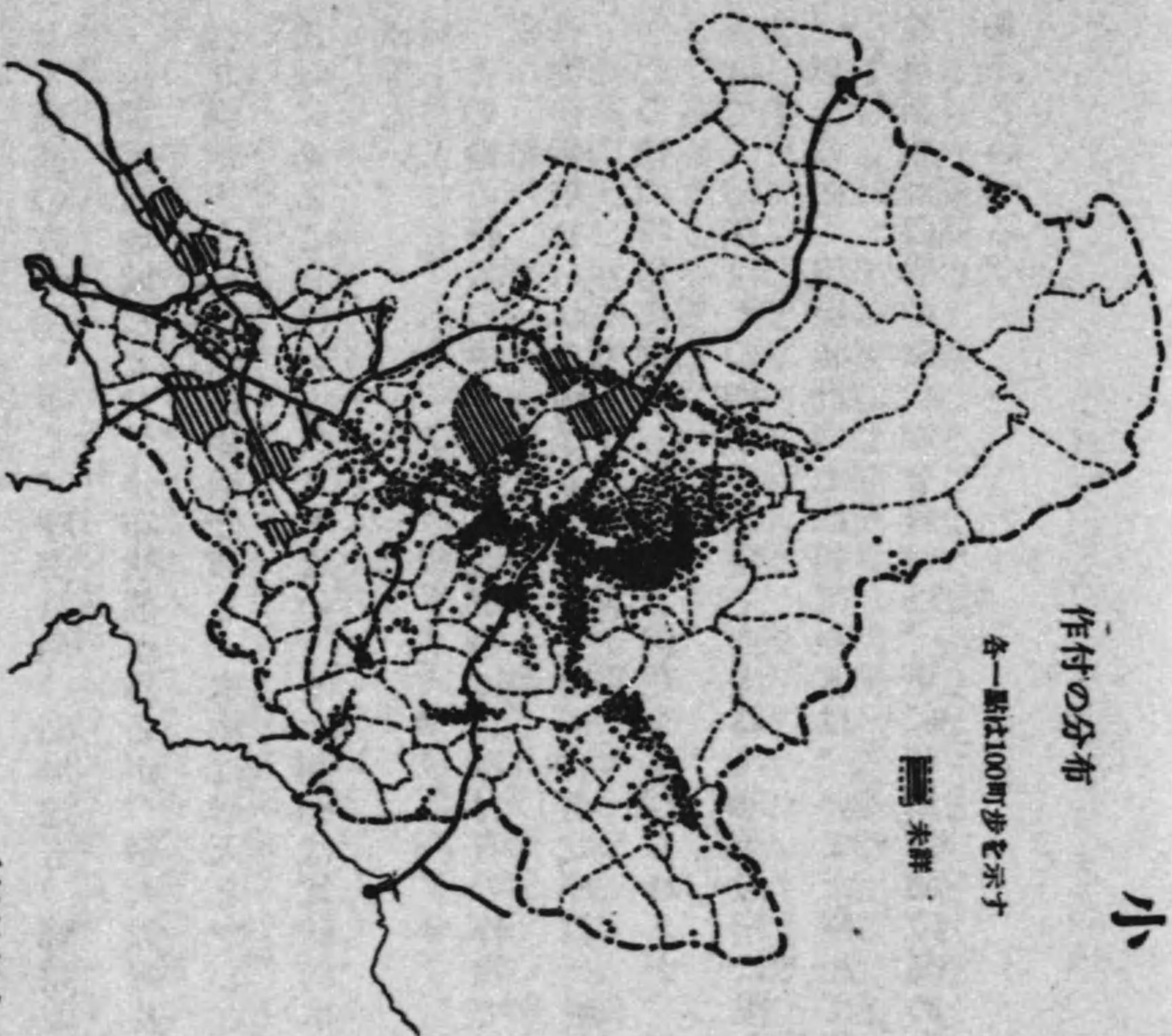


40% 以上
 30-40
 20-30
 10% 以下
 未詳

小麦

(村越信夫氏に依る)

将来を約する土地利用状況



作付の分布

各一畝は100町歩を示す

未詳

總作付面積に對する分野

50% 以上
 40-50
 30-40
 20-30
 10% 以下
 未詳

四九

に主として栽培せられてゐる。次に高粱はその分布集團地域は奉天以南地方及び京奉線地方である。粟は北滿よりも南滿の方が稍々多く、呼海沿線、間島地方、鄭通線に集團分布されてゐる。

玉蜀黍は地域によつて分布状態が異なるが、奉天以南及び開原、瀋海沿線の山岳地帯に集團分布しており、小麥は北滿地方が壓倒的に集團分布し、水稻は奉天を中心とする地域と、その以南及び間島、吉長沿線等山間河川の流域にあることはいふまでもない。また陸稻は比較的水濕豊富なる圃場に栽培せられる故に水稻の分布状態とほぼ等しい。

その他の雜穀の中、燕麥、亞麻等は北滿特有の作物であり、大麥、黍、稗、蕎麥等も開墾當初は比較的低級の作物が栽培せられる關係も手傳つてその作付比率は比較的北滿に多い。

その他の特用作物として煙草、綿花を挙げられるが、煙草は南滿の多くは農家の菜園に自家用に栽培せられる程度で、綿花はその作物の性質上南滿特に奉天以南に限られてゐる。

以上の如く現況滿洲の土地利用程度は、いまだ極めて粗放なるまゝで凡そ開墾せられたといはれる南滿地方も今後排水灌溉等の諸設備を施せば、更に利用價值は高められ、且つその全般からいふならば土地の利用は將來にあるといへる。

どれだけの人を收容できるか

ならば滿洲の土地はどこまで擴張され、まだどれだけの人が收容出来るかといふに、この問題は興味ある問題ではあるが、その推算は經濟界の状況と營農管理の状況によつて起算點が左右せられる故に推算は困難である。若し強ひてこれを求めるならば、現在までの人口増加の趨勢と、耕地の關係、現在農業經營經濟の状態から假設して推論するの他はない。

滿洲の人口増加状態——未だ國勢調査等の精密なる調査を缺く滿洲國の特に過去の人口の調査は容易なことでない。總べて査定するの他はない。而してその査定の標準等に就いては本書には歧路にわたる故に、滿鐵調査時報（昭和四年三號）によつてその結果と大綱を述べておく。滿洲の人口は明治四十年（一九〇七年）に一六・〇〇〇・〇〇〇人、昭和二年（一九二七年）に二六・七〇〇・〇〇〇人になつてゐるから、二十年間に一〇・七〇〇・〇〇〇人の増加を示してゐる。而してこの増加数は自然増加数ばかりでなく、日露戦争後日本が卒先して滿鐵を經營し、治安維持に努めた結果流入してきた移住者の数がおびたゞしいものである。しかしこれ等の區別も正確なる數字を缺く故に、關東州中の支那人の自然増加率を算定し、他省も同率と假定しその自然増加数を推算し、移住増加数を推算する他はない。

左に掲げる諸表は滿鐵調査課及び外務省亞細亞局の調査によるもので、自然増加数は五・三七〇・〇〇〇人、移住増加数は五・〇三〇・〇〇〇人、全増加数一〇・四〇〇・〇〇〇人の四八%強は移民による増加であることが判る。

かくの如く滿洲の人口の増加は他から移住する者が半ばを占めてゐるといふことは、畢竟するに滿洲が人口の收容力が大であるといふことを物語るもので、更に詳らかにこれを觀察すると歴史の繰返すところ滿洲は滿漢農民の鬭争の跡であり、葛藤の繪卷である。こゝに移住者といふのは主として漢民族を指すもので、征服者の滿洲人は農業の技術に乏しく、被征服者の漢人に農業の實權を握られ、經濟的にかへつて漢人の壓迫を受けるやうな有様である。

しかしてこれ等の移住者は滿洲中のどこに流入しどの位定着するかといふのに、遼寧省の南部、吉林省の吉長、東支南部線地方の如く既に相當開墾された地方には尠く、未開墾地の多い北滿地方に吸収され、吉林、黑龍江省はその八三%を占めてゐる。

人口と耕地の割合は——しからは現在滿洲の既耕地が人口一人當りいくばくに當つてゐるかといふのに、遼寧省は三・〇〇反、吉林省は五・三六反、黑龍江省が七・四六反、全體を平均すると四・五二反となつてゐる。次の表を参照されたい。

省別	既耕地	人口	一人當耕地面積
遼寧省	四・五〇三・八八一町	一四・九八八・五六〇	三・〇〇反
吉林省	四・八六六・七五九	九・〇七五・六三〇	五・三六反
黑龍江省	三・八三一・一六八	五・一三三・七三〇	七・四六反
計	一三・二〇一・八〇八	二九・一九七・九二〇	四・五二反

右表を、支那本部に比較すると東三省を除いた他の省は、直隸、山西省のみ稍々數値たかきも、他省は極めて尠く、平均一・四反にあつてゐるから、滿洲は支那本部の三倍、山東省とは二倍の耕地を一人當り持つてゐることになる。この事實は山東移民等漢人の移住を雄辯に物語る原因である。

また人口密度と開墾擴張の比較的飽和状態にあるといふ關東州に於いては一人當りの耕地面積は二・二九五反に當つてゐる。次にこれ等は日本と比較してみると、別表の如く、滿洲は一毛作なるためもあるが、一人あたりの耕地面積は遙かに大いことを示めてゐる。

果してどの位入れられるか——關東州の耕地は現在一人當り二・二九五反に當つてゐるが、これを限度とし滿洲各地が關東州と同様に開墾せらるれば果してどの位の人口が收容出来るか推算出來ぬことはない。

	既耕地更に收容し得る人口	未耕地に收容し得る人口	計
遼寧省	四・六三六・一九〇	八・五二二・五四〇	一三・一五八・七三〇
吉林省	二二・一三〇・二九〇	二五・四八一・三四〇	三七・六一一・六三〇
黒龍江省	一一・五五九・八一〇	三七・六九〇・〇二〇	四九・二四九・八三〇
計	二八・三二六・二九〇	七一・六九三・九〇〇	一〇〇・〇二〇・一九〇

即ち、今後一〇〇・〇二〇・一九〇人の人を收容し得られることになる。

しからば、現在の人口増加と同じ條件で將來すゝんでゆけば何年後に飽和状態に達するかといふと、

	昭和四年人口	將來收容し得る人口	將來の年數	計算に依る年數
遼寧省	一四・九八八・五六〇	一三・一五八・七三〇		
吉林省	九・〇七五・六三〇	三七・六一一・六三〇	五四	五三・六
黒龍江省	五・一三三・七三〇	四九・二四九・八三〇	一〇三	一〇三・〇
計	二九・一九七・九二〇	一〇〇・〇二〇・一九〇		

右の計算によると、將來満洲に政治的社會的に大なる變革のない限りに於いては、近々半世紀たらずして満洲全土は關東州の如くに開拓せられることになる。勿論この推算の中には興安省、熱河省は含まぬ。

農業から見た満洲國

元來農業ほど自然條件に支配せられるものはない。いかに肥沃なる土地でも氣象が悪ければ植物の成長は不可能である。作物は特に人工的に淘汰改良されたものだから氣候に對する適應性も相當強くなつてゐるが、これとても温、熱、寒三帯に互つて分布するやうなものはない。小麦の如きは南はインドから北はシベリヤまで栽培されてゐるが、インドは北方高原で、緯度こそ熱帯にあるが氣候は温帯に屬する地帯である。

植物の生育即ち發芽、生長、開花、成熟にはその間これを可能ならしめる温度を必要とする。この温度の關係は極めて敏感に働くもので同種の作物でも、この温度に對する適應性によつて品種が夫々改良され、同一品種に於いてはその温度の最低最高の差は極めてすくない。

恵まれたる氣温

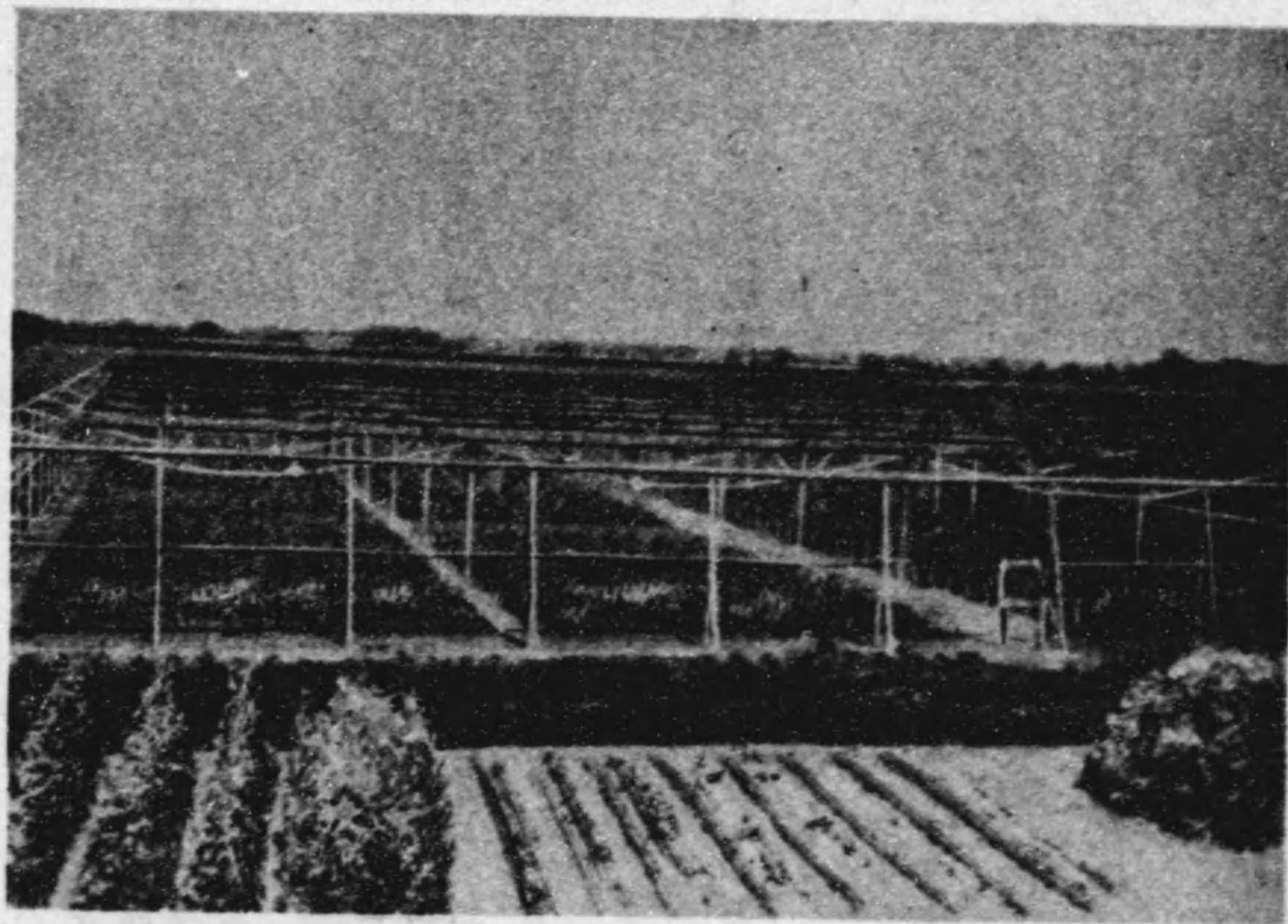
滿洲の氣温は既に比較したる同緯度の世界の他地方の年平均温度よりもその平均温度は低い。しかしこれは同地が大陸性の氣象を現わして冬期に著しく温度が下降するために平均温度が低いので、滿洲では植物の生長期四

恵まれたる気温



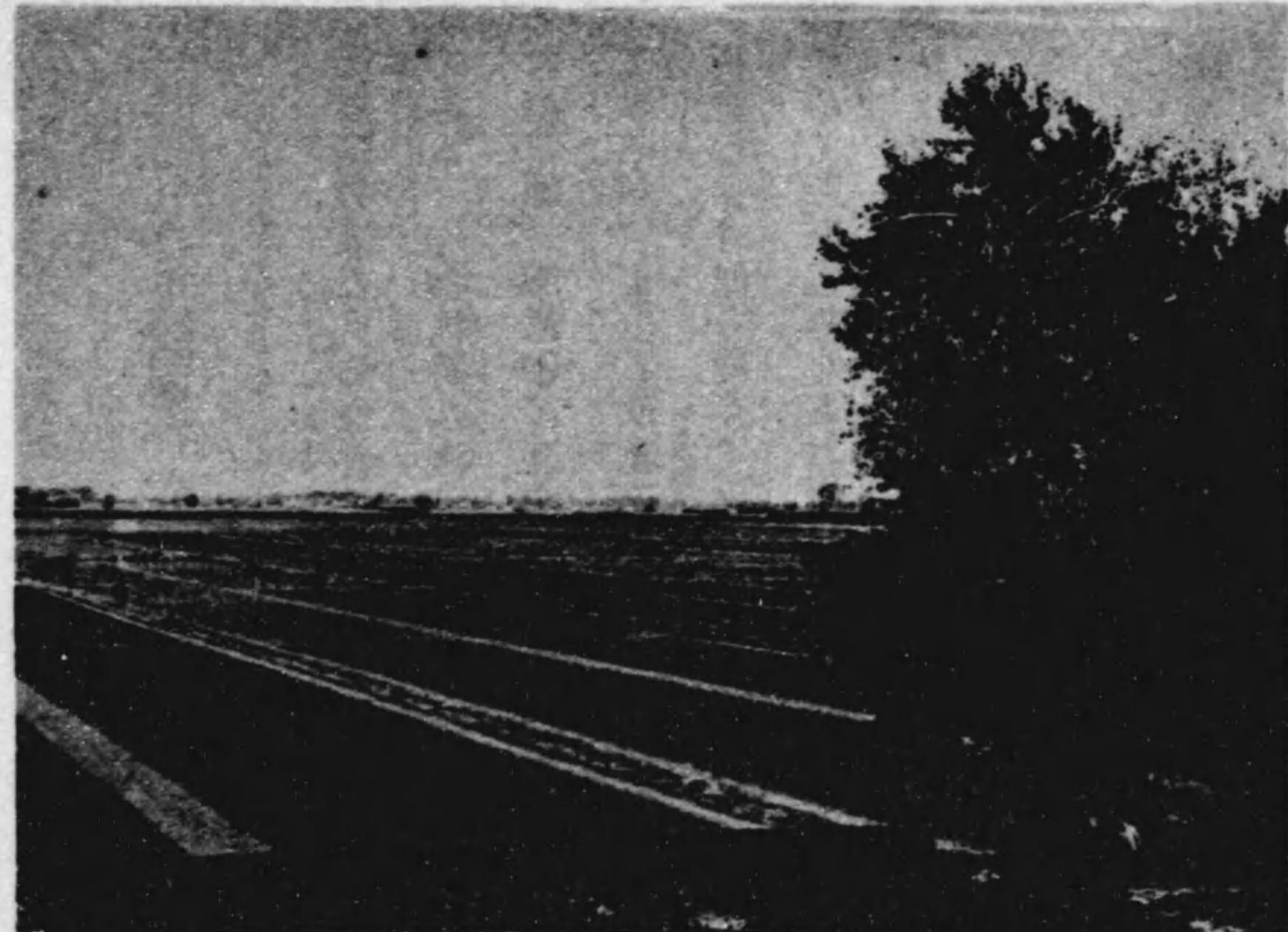
らむ用に製作の種良改で場験試嶺主公 鋼金用良改物作式ンデエス
。るむてれ

五七



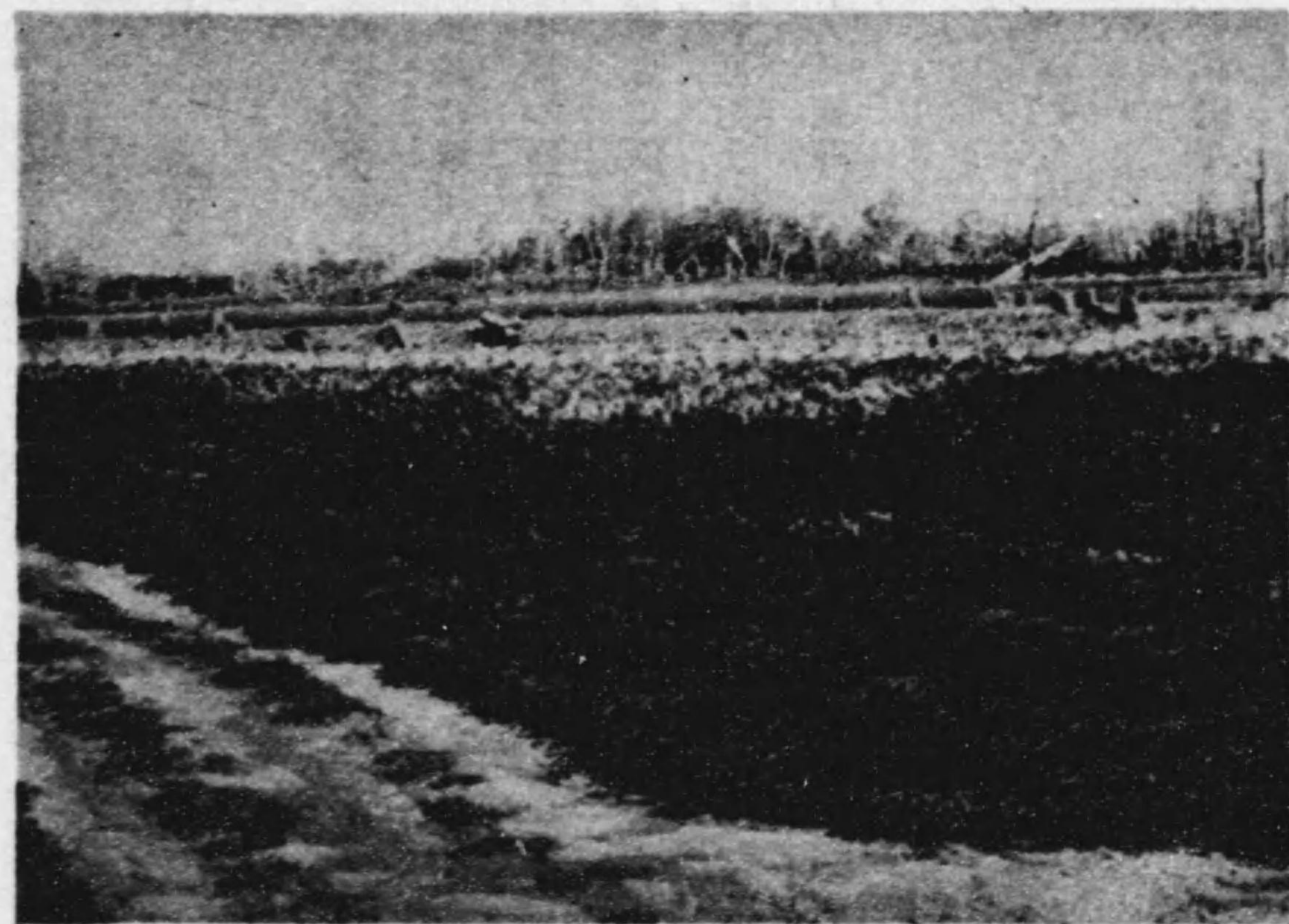
視望有に常非てしと物作殊特 ,は培栽ブツホ 培栽ブツホの皮面一
。るむてれさ

農業から見た満洲國



種雜の羊編 ,良改の物産農の他のそ豆大で場験試 場験試事農嶺主公
。るむてつやと等良改

五六



。るむてげあと續成好な常非 ,は果結の培栽験試の稻陸 跡の力努
。だ豊たまも味地

五月頃から急に温度は上昇し、七月に入れば同緯度の何れの地方よりも遙かに高温を示し、九月に至ると再び下降し十月になれば寒冷の氣候になる。よつて滿洲の農作物は極めて短期間によく成熟し、気温の點では大いに恵まれてゐるともいへる。

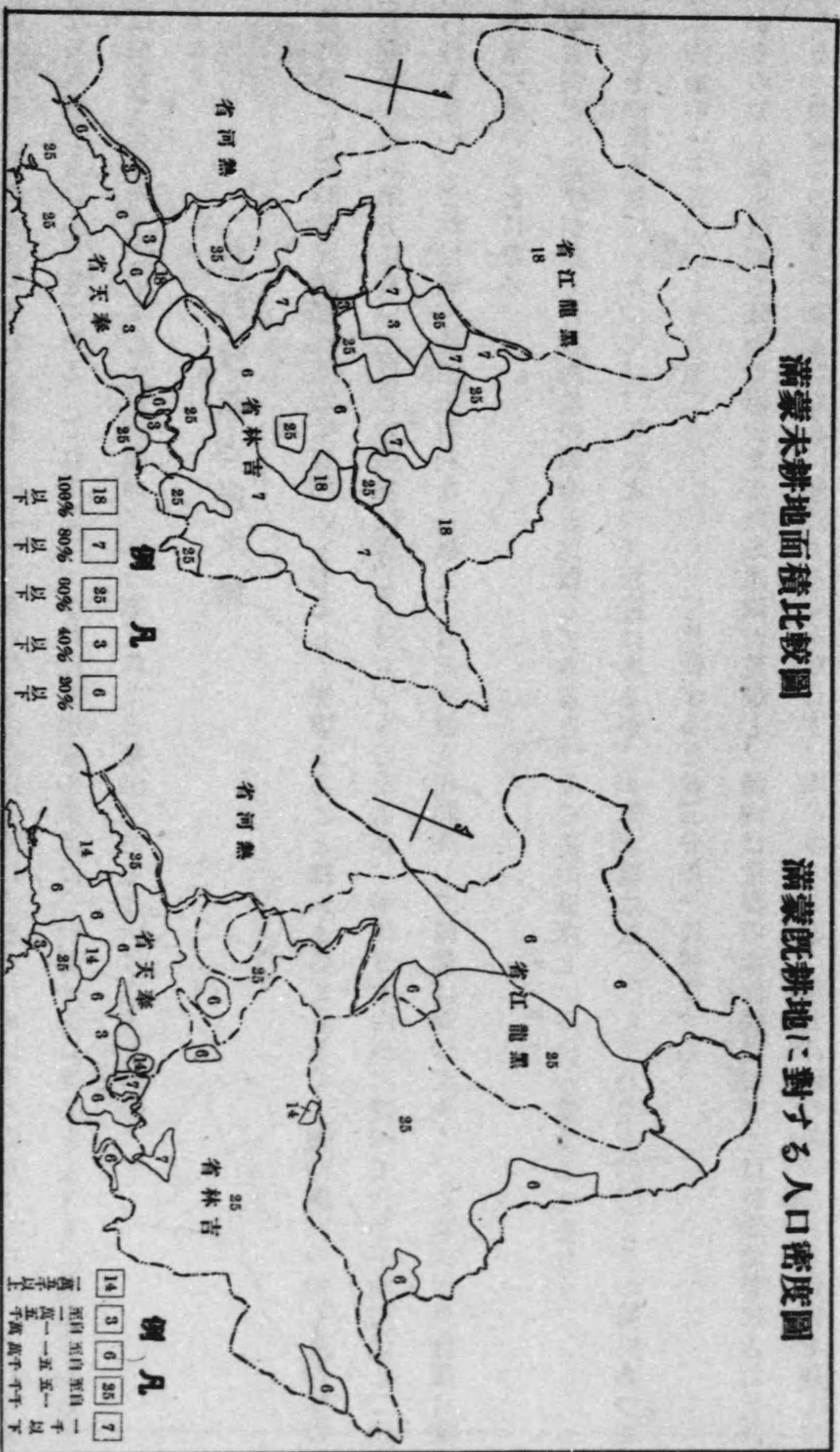
しかしてこれを年平均によらず農作期間の平均気温に就いてみるに、長春、吉林は同緯度の北海道札幌、旭川、根室地方よりも高温で、秋田、福島、長野地方と相似たるものがある。農作期間中の最高温度は水戸、福島、新潟と同じく、農作期間中の最低温度は新潟、秋田、青森と大差はない。これを以てすれば、奉天、長春、吉林の農作期間中の温度は日本の東北地方と大差はない。

最高最低の差違を見ると、その最も甚だしいのは旭川と奉天で、これに次ぐのは長春と長野である。吉林の差違の少いのは山岳地方で風が少い爲である。

なほ冬期結氷期長く夏期農作物の生育期の短い結果として、日本の如く米作の裏作に麥を作るやうな土地利用方法が出来ぬばかりでなく、短期間に發育成熟する特定のものに限定されてゐる。また越年性の農作物は、その氣候の關係から栽培されず、この點は不利益の如く思はれるが、却つて氣候寒冷にして冬期地下結氷し、土壤は膨軟して空氣の透入をよくし、土壤を風化分解を助けるため、三尺乃至五尺深耕すると同結果になる。ために支那農民は不完全なる犁と少許の施肥で、比較的土壤の肥力を要する雜穀類を連作してゐるのは、全く冬期深凍す

滿蒙未耕地面積比較圖

滿蒙既耕地に對する人口密度圖



る賜である。その他日本内地で惱まされる病害蟲の如きは冬期寒冷にすぎるためにその繁殖すくなく、これも寒冷なる天恵ともいふべきである。これを以つてすれば満洲國の氣温は、一利一害はあるとしても、農業上から見れば決して不適なりといふことは出来ぬ。寧ろ恵まれたる氣温であるといはざるを得ぬ。

日照時數と降水量

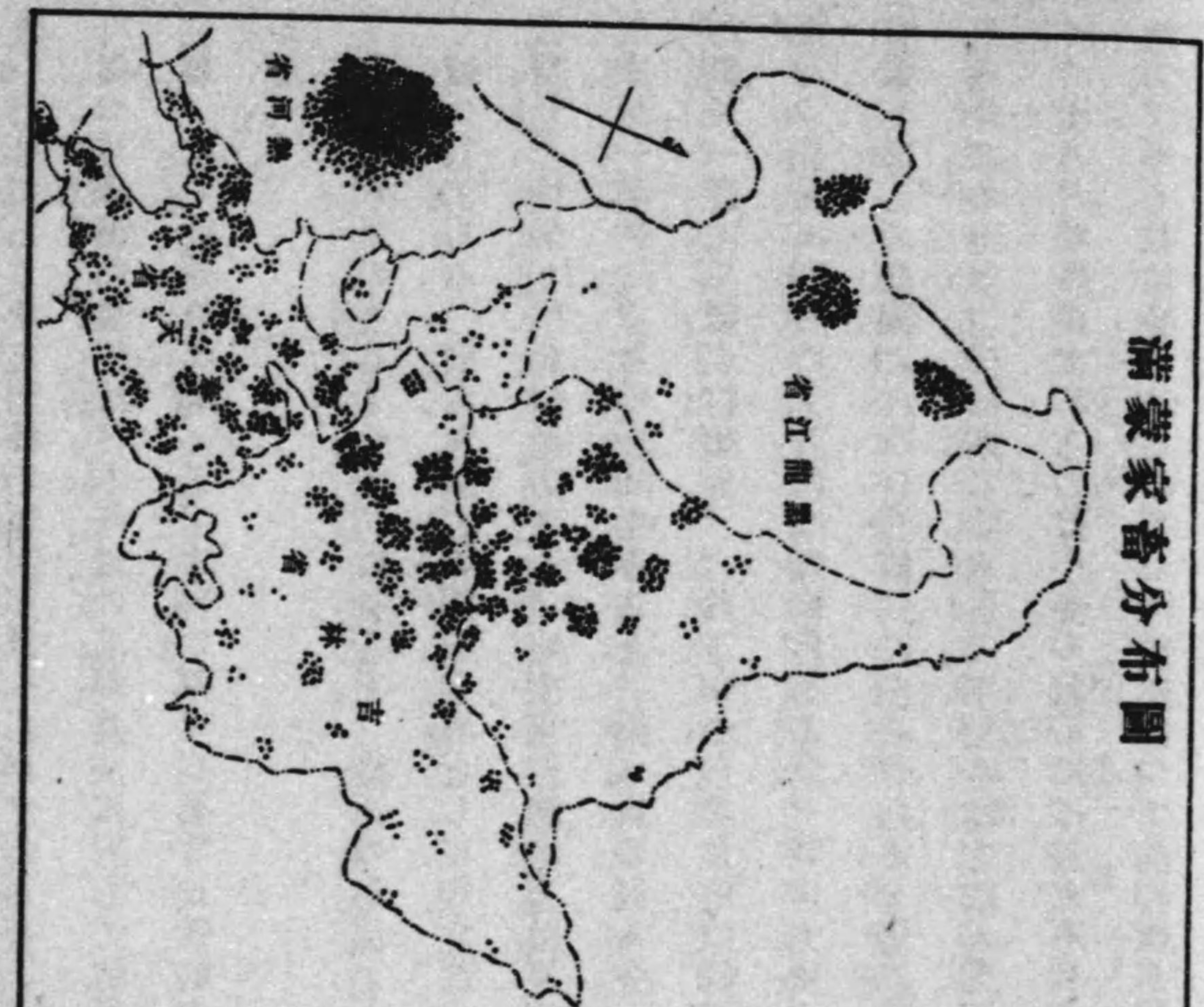
農作物に日照時數の關係はその生育にいちぢるしく影響することはいふまでもなく、特に満洲の如く農作物の生育期間の短い地方に於いてはこの關係は著しく目立つものなるが、幸に日本内地に較べて全年平均に比し二〇%内外も多い。これは満洲農業上有利なる點で、日照時數と相關係して雨量は却つて少く、ために屋外作業日數が非常に多いことになる。

事實別表に示すが如く日本内地の場合と比較してみると、その差の甚だしいのに一驚するであらう。

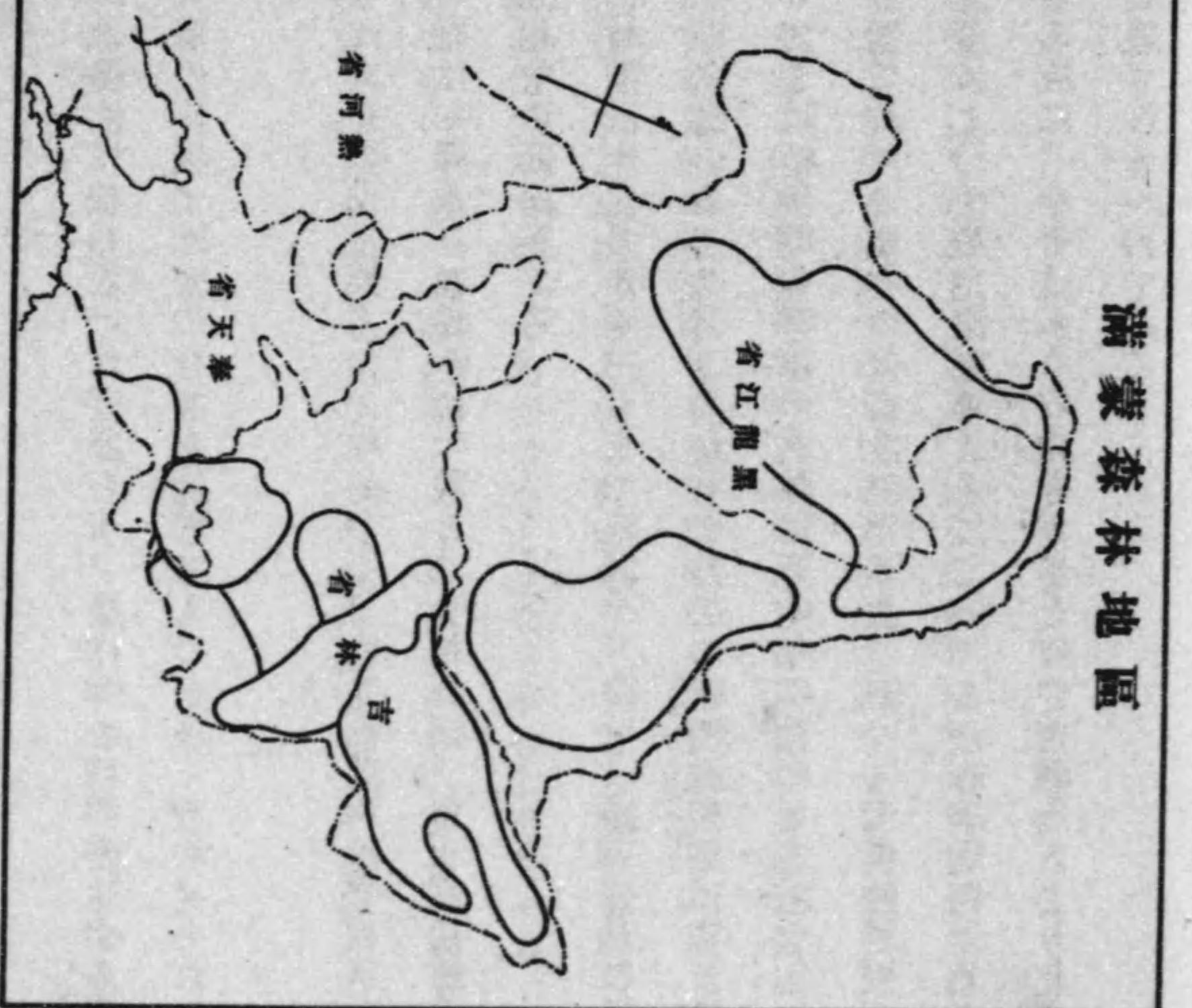
更にその降水量にいたつては、年によつて相違はあるが、年降水量は五〇〇ミリ乃至七〇〇ミリの間にあつて、日本内地の一・五〇〇ミリ乃至二・〇〇〇ミリに比較すると約三分の一に相當する。

かくの如く降水量即ち降雨の尠少なるため土地は乾燥し、満洲は世界の亞乾燥地帯あかんちやうちたい若くは乾燥地帯に入れられてゐる。勿論この原因は降水量のみに原因するのみならず、風の多いこと、晴天日數の多いことも蒸發を盛んに

滿蒙家畜分布圖



滿蒙森林地帯圖



日照時數と降水量

ならしめてゐるなど諸種の原因が數へられてゐる。

従つて滿洲の農法は日本内地の溫潤農法に對して乾燥地農法に依らなければならず、農作物も葉の密生する菽豆類、若くは乾燥に堪える禾本科の粟、高粱等比較的大形の作物で地表の日照を遮るものが多く栽培せられてゐる。

なほ降水量の多寡を地方的に見ると、滿洲の南部よりは東北の山岳地方に比較的多く、西北部蒙古地帯は著しく減少してゐる。即ち東蒙古の通遼を境として西北部一帯は年降水日數僅かに十數日にすぎぬが、東北山岳地方は著しく増加して北滿地方でも、東支東部線地方は夏期相當の降雨がある。

また一年中降水量の分布をみると、降水量の最も少い時期は十二月から三月までの四ヶ月間で、四・五月の播種期は一般に早魃が打續き、六月下旬から八月迄は降雨期にはいる。八月下旬から十月迄の收穫調製期しうくわくていせいはまた乾燥し、全般に作物の生育には好條件なるが、特に大豆の如きは播種期の降雨の有無はその年の豊凶を左右するの有様である。勿論これは自然條件に左右せらるゝ儘に放置されたる現在の營農状態なる故、かゝる天災の結果が見られるのだが、播種期の降水量の不足の如きは人工灌溉によつて補足出来ぬことはない。また春季降雨すくなく、七八月頃多雨であるのは小麥の栽培には甚だ不利なる故に、小麥はかくの如き氣候を持つ南滿地方より北滿地方に多く栽培せられるのも、降雨によつて農作物が制限される一例である。

濕度と蒸發量

滿洲は何れの地方も各月を通じて日本内地よりも空氣は著しく乾燥してゐる。特に播種期に於いて最も甚だしく。日本内地で温度の少い地方でも年平均七〇%を越してゐるが、滿洲では大連の六六%、新京、公主嶺の六〇%、が多濕の地方で遙かに内地よりも乾燥してゐるが、北米の乾燥地帯年平均五〇%以下に比較すると相當に濕度を持つてゐることになる。なほ別表にもあるが如く、播種期には濕度尠きも生育期に多く收穫期にまた減じてゐることは、農作上好條件といはねばならない。特に收穫期の濕度は、收穫物の貯藏保存に大なる影響を與へ、この期に乾濕交々致るときは不測の大損害を蒙るが、滿洲に於いてはこの點では申し分なき氣候状態である。も一つ滿洲の氣象の一特色は日照時數の多いこと、風の多いこと、その結果として蒸發量が多いことである。而して土壤面から水の蒸發するのは、若し氣象状態が同じだとすると、次の三つの事項によつてその量は左右せられる。

- 一、空氣に接觸する土壤の含水量
- 一、蒸發の起る土壤の表面の大きさ
- 一、毛細管によつて下方から水を吸上げる時間の遲速

現在滿洲關東州の一部に於いて乾燥地農業から灌溉園藝農法に變り、集約的に營農されきたつたのは一つにこの蒸發量を防ぎ、人工灌溉によつてその水量を補足するに心懸け、工夫をしたにすぎない。

無霜期間

植物が霜害を被るか否かは、植物の種類によつて異り、また同種類のもでも生育の程度によつてその被害の度を異にする。温暖な地方の植物は寒冷の地方の植物には決して害のない様な微霜にも忽ち凍涸こぼしてしまふが、これに反して寒冷の地方の植物は大低温度に堪え著しい霜害を被らない。

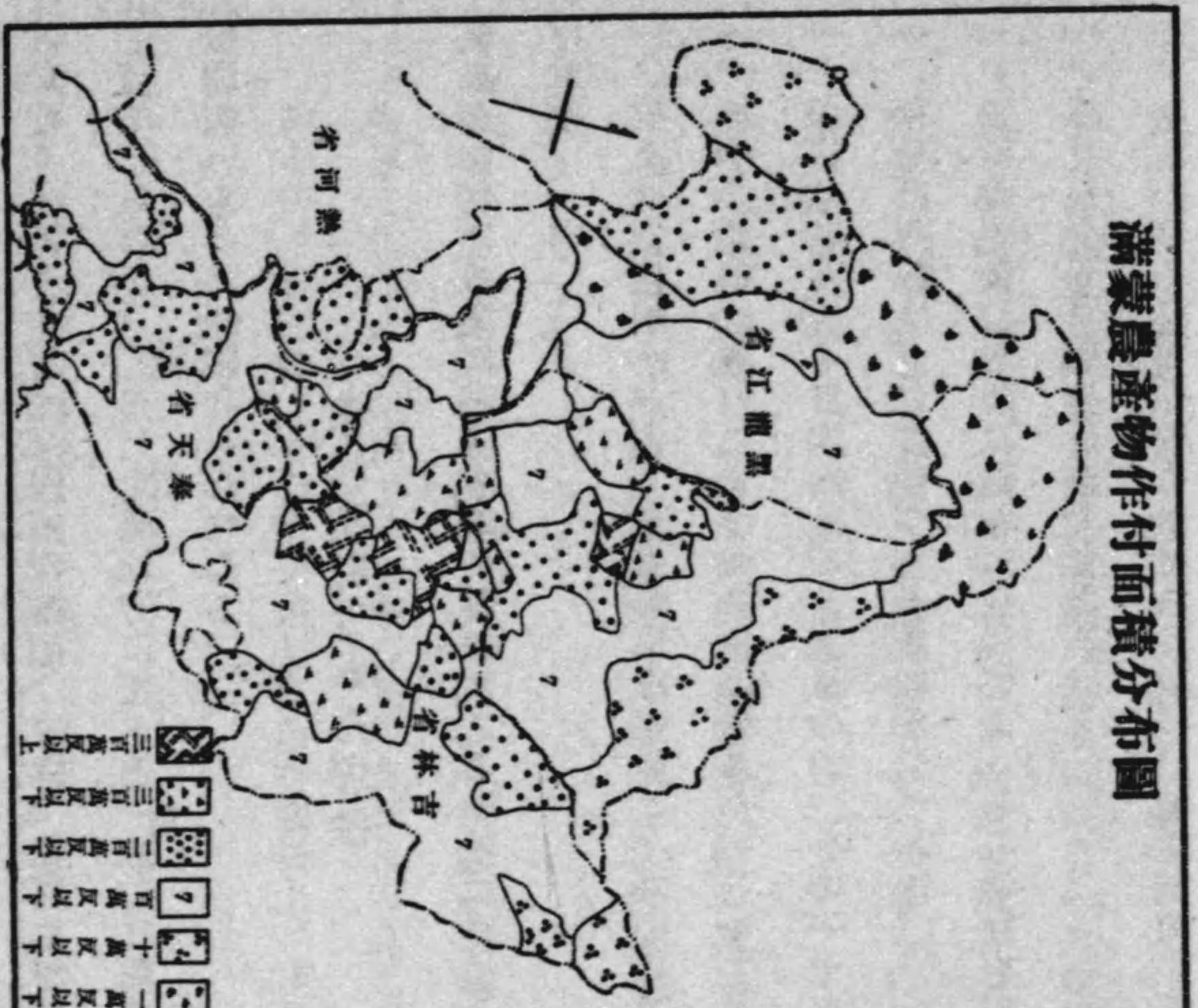
滿洲に栽培せられる農作物中、比較上霜害の有無を區別すると次の如くである。

- 一、霜害を被り易いもの、大豆、高粱、綿花、果樹、桑樹、煙草
- 一、霜害によく堪えるもの、甜菜、麥類、

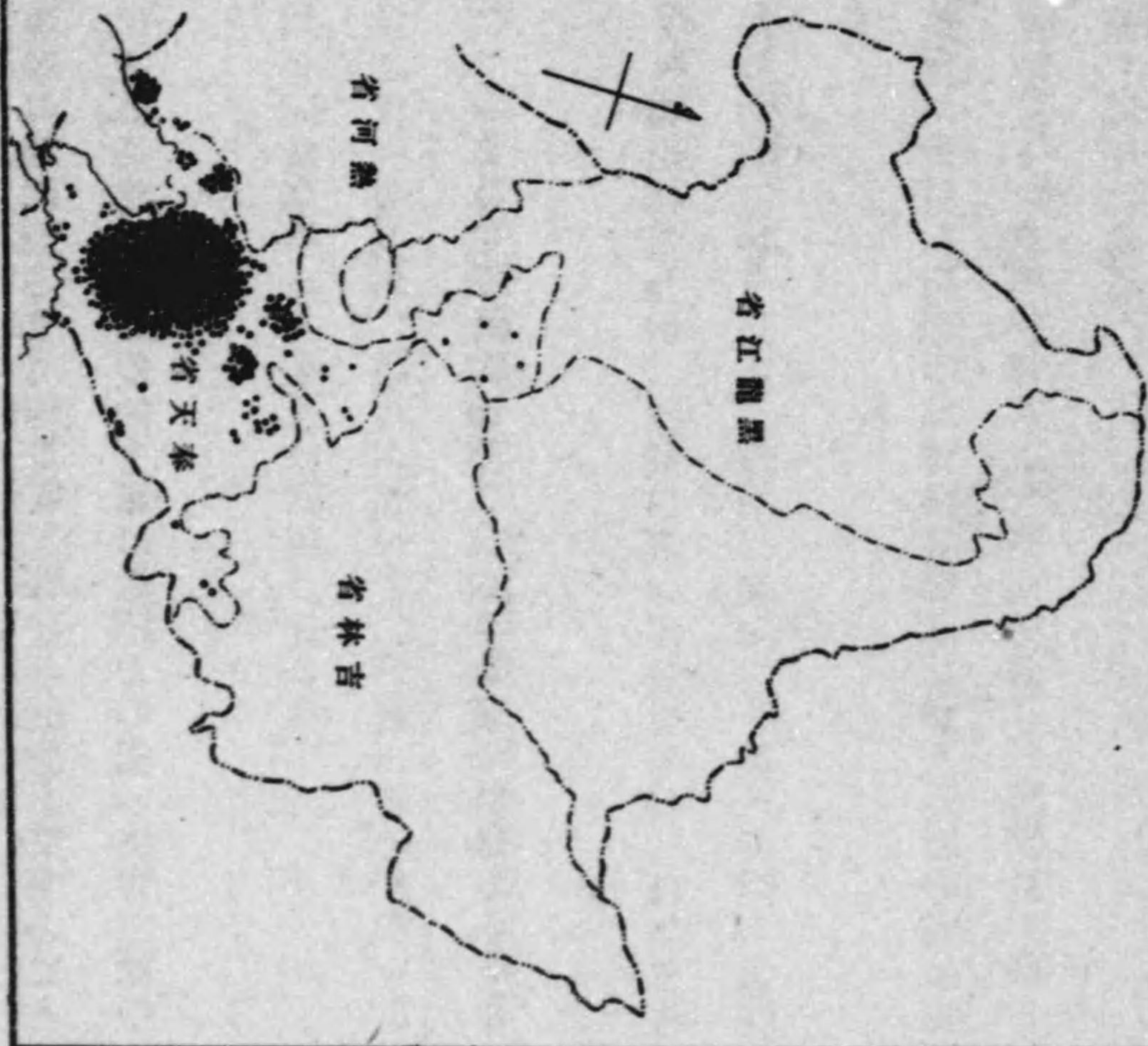
勿論霜に傷み易い植物も、生活機能の休眠中はよく霜害に堪えるが、生長をし初めてから霜害を受けるならば忽ちにしてやられてしまふ。ために農家では無霜期間の長短と共に晩霜を最も忌む。

滿洲の無霜期間は、内地と同緯度の地方に較べるのに、その冬期の温度著しく寒冷なるに拘はらず、無霜期間は必しも短くはない。即ち關東州では約二〇〇日、奉天以南では約一六〇（一五〇）日もある故に、霜害に罹り

滿蒙農産物作付面積分布圖



滿蒙棉花作付面積分布圖



易い大豆、高粱、または特作用の棉花、果樹、桑樹または煙草の類に至るまで何等霜害豫防の装置を講ずることなく栽培せられる。しかし北滿地方になると一四〇日前後に短縮され、麥類の如き霜に抵抗力の強い生育期間の比較的短いものに制限せられてゐる。

氣象に制肘された農法

氣象が如何に農業に密接不離の關係にあるか既に詳述した、いまこゝに概括してこの地の農業に影響ある點をあげれば、

- 一、氣温は春秋兩季が短く夏冬の兩季が長く、寒暑の差が甚だしい。
- 一、地中の凍結は各地によつて非常に異なるが一乃至二メートルに及ぶ。
- 一、雨量は甚だしく日本内地の年總量の約三分の一である。
- 一、雨量は内陸に進むに従つて多量になつてゐる。
- 一、雨期の特徴は内陸に進むに従つてよくその特徴を現はしてゐる。
- 一、濕度が少く、蒸發量が大である。
- 一、初霜が早く晩霜が遅くまでである故に、無霜期間が割合に少い。

一、風は日本内地よりも一般に大であるが風向一定し、暴風雨は稀である。

かかる氣象條件なる故に滿洲の農業には自ら次の特徴、制限がある。

一、栽培作物の制限——滿洲の氣象が大陸的で寒暑の差甚だしく、日照時數多く、空氣乾燥し、蒸發量大なるに反して、降水量少ない結果、栽培せられるものは高粱、大豆、粟等の比較的乾燥地に耐える畑作物が主とされてゐる。

一、農地利用の制限——農作物の生長期間が短い結果、謂はゆる裏作を行ふことが出來ず、一年一毛作に止めざるを得ない。ために農耕地一人當の面積は大となり、耕作期には短い期間に廣い面積を耕作せねばならぬことになる。

一、耕種作業に及ぼせる關係——滿洲の降水量が少い故に、地下水の保水に留意し灌漑の必要がある。

一、農具に及ぼせる關係——在來の先住支那人の農民が行ふその農法は、技術に於いては邦農に遙かに劣つてゐるが、耕作には畜力を使用してゐた關係上、構造は不完全ながら大農具を使用してゐる。

滿洲の土質

滿洲の地質分布中最も廣大な面積を占めてゐるのは太古代層に屬する片麻岩類と前寒武利亞紀時代の花崗岩類

及び第三紀の中頃噴出した新期噴出岩類等である。且つその分布状態は片麻岩類は主として渾河以南にあり、花崗岩類は北方に占め、東部満洲は主として新期噴出岩よりなつてゐる。前寒武利亞紀からオルドビスシア紀に至る水成岩層は前記三者に次いで到る處に發達し、石炭紀以後第三紀に至る間の地層は何れも局部的に發達してゐる。

第四紀層は滿鐵本線を略境とし、遼河を挟んで遠く東内蒙古に及んでゐる。洪積層は南は遼陽、奉天附近の山麓から初まつて北は鐵嶺以北滿鐵沿線に至れば階段状を呈してゐる。且つこの堆積せる平坦面は實にこゝから西方遙かに内蒙古まで分布してゐる。長春及び吉林附近の波状低丘の地域は第三紀若くは本紀の地層で廣く發達し、額穆、寧古塔即ち牡丹江の北岸では洪積層の發達してゐる地方もある。

沖積層は遼河の河口に一番よく發達してゐる。その他松花江下流域、輝發河上流域及び大孤山の東方海岸に於いて、稍々廣潤な分布をしてゐる。これ等の沖積層の發達した地方は常に低平廣潤なところで、その地味は通常黄土質または砂質で——滿洲の如き乾燥地は砂質土壤は耕作に適する——その上表土深く、耕地に適してゐる。

滿洲の土壤は大體以上の如き分布状態なる故、その農業地は主として第四紀古層または新層で、地質學上からいへば最も新らしく形成された沖積層と洪積層の壤土及び埴土が多い。砂土及び礫土はその分布すくなく、また前記二者は奉天を境に以北には洪積層以南には沖積層が分布されてゐる。

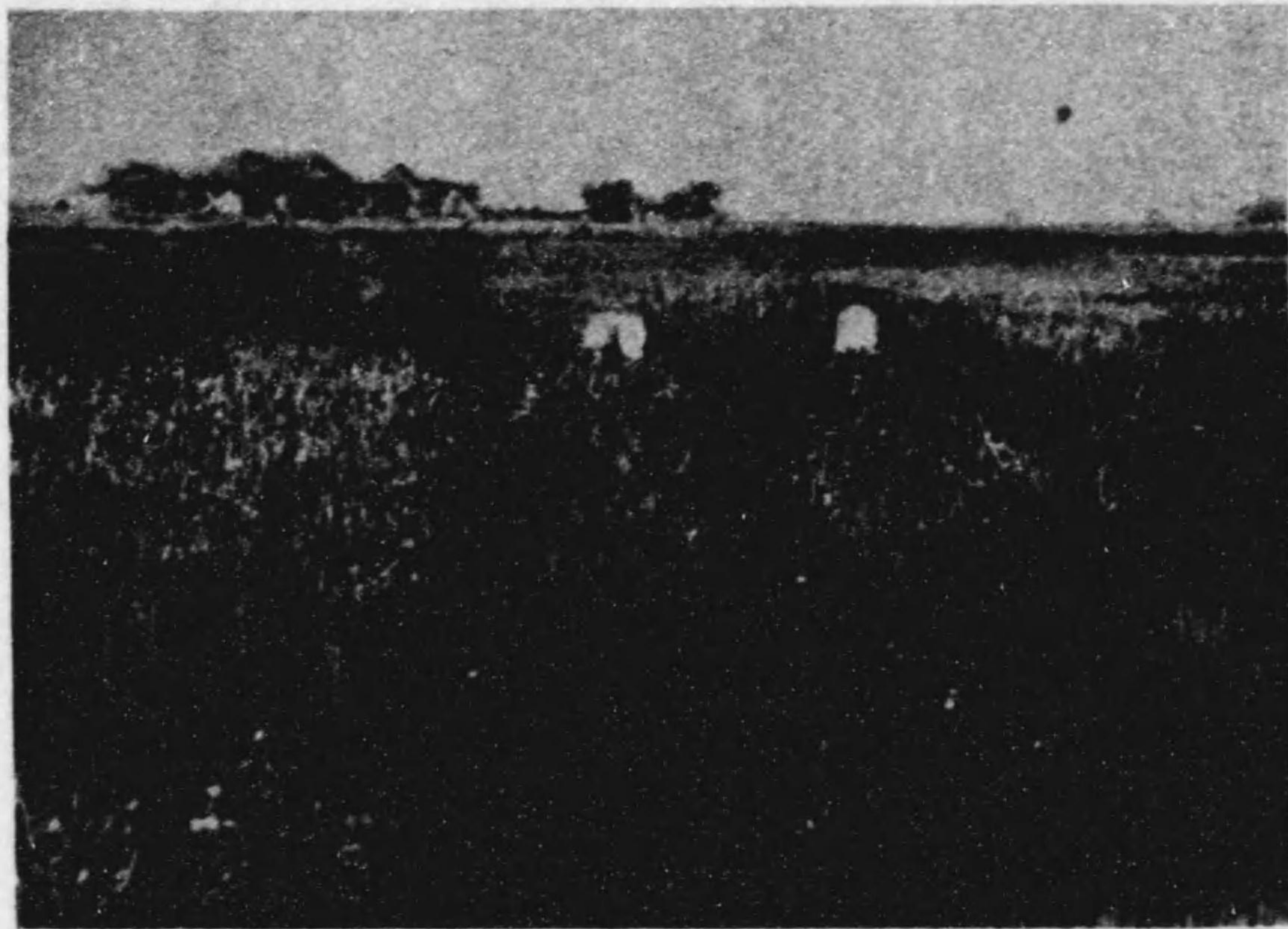
滿洲の土壤の理學的性質は一般にその分子は極めて繊細にして凝集力、及び附着力強くために重粘である。その上孔容容量少くために空氣と雨水の透過不充分であるが、水分及び養分の吸収力は大である。支那農民は土壤の色によつて黄色土、紅色土、黑色土、藍色土、白糖土等に分つてゐるが、色からいへば南滿洲に紅色土、または黄色土が多く、北滿洲には黑色土と藍色土が多い。

尙次に滿鐵農事試験場の化學分析の結果を示しておく。

- 一、反應は微鹽基性で、殆んど酸性土壤はない。
 - 一、可溶鹽類は概して多い。春季アルカリ斑各地に出現する。純然たるアルカリ土壤は營口、白旗方面及び東支西部沿線、東部内蒙古に多く現はれてゐる。その中營口、白旗方面は鹽化物、湯崗子地方は硫酸鹽、内蒙古は炭酸鹽及び鹽化物よりなつてゐる。
 - 一、有機物及び窒素含有量は概して少い。
 - 一、鹽酸に不溶解礦物質含有量が多い。
 - 一、石灰含量は多くないが、苦土、曹達含量が多い。
 - 一、磷酸及び加里の含有量は豊富である。
- よつて滿洲の土壤は化學的には豊饒といへよう。また土壤分析の結果日本に比較し、これを綜合すると、滿洲



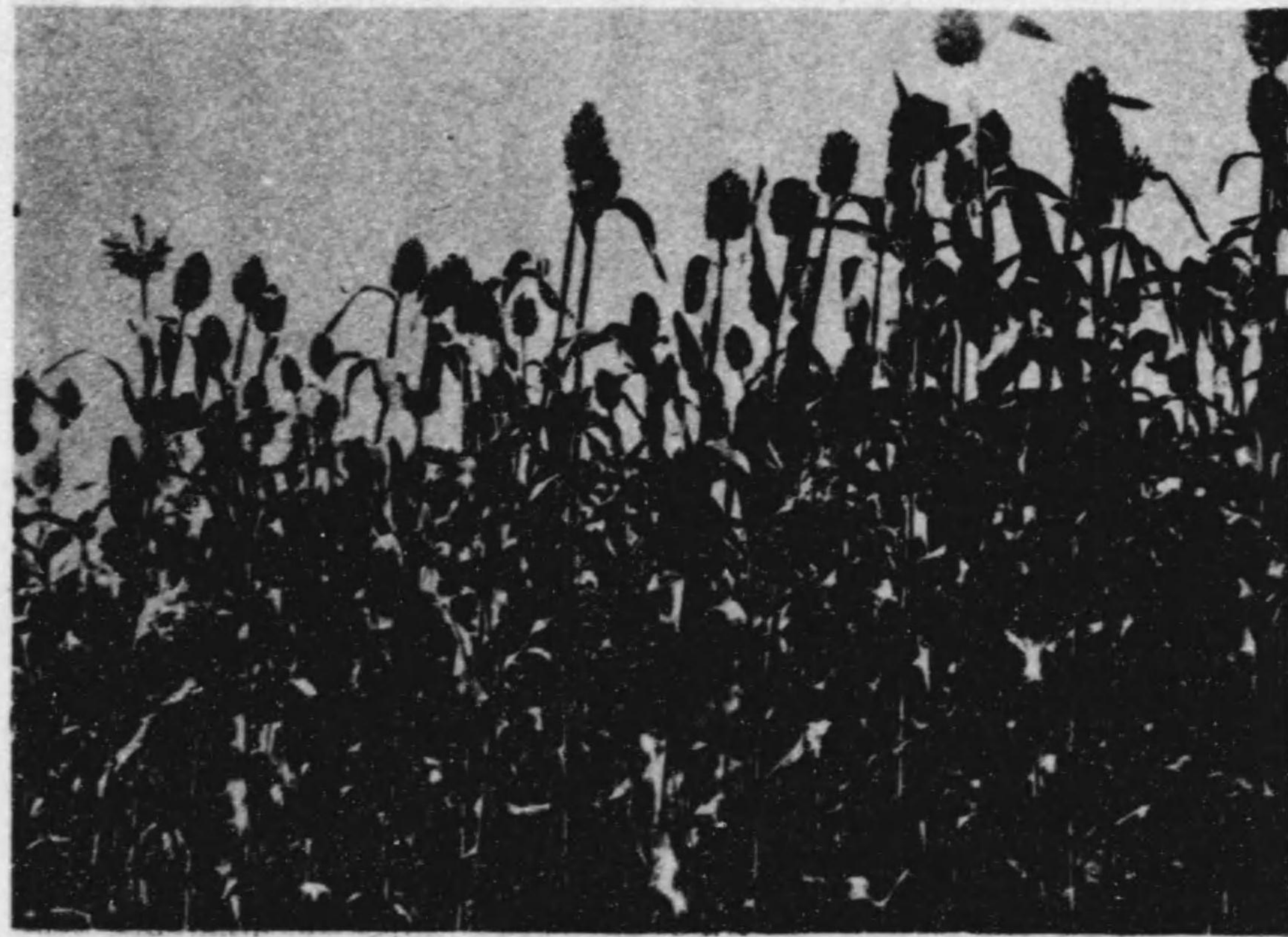
愛川村の桑畑 關東洲愛川村は邦人移住地として成せる一例
。水田のみのずら桑畑もつくらる。



牡丹江上鮮農の田水は營農技には特殊の技術あり
。牡丹江上鮮農の田水は營農技には特殊の技術あり



古山の向日葵 向日葵は觀賞すのみならず食用料として盛んに栽
。培はるむて。



金洲の高粱 高粱は物作的代表の滿洲は、その大豆をも
。大豆

の土壤には一長一短あつて、必しも良土とはいひ難いが不良土ではない。日本土壤に較べると化學的には有機質並びに窒素の含有量に乏しく石灰や硫酸等足らざる成分もあるが、燐酸加里の含量は遙かに多い。理學的性質では満洲の土壤中埴土は比重重く、吸収力含水量少く、土壤孔隙量容氣量等共に少く、一般に不良であるが、壤土は日本内地と大差はない。

ために全般的に満洲の土壤は決して内地土壤に劣つてゐないといひ得る。たとひ強ひてその缺點を求めらば有機質並びに窒素の含有量の乏しい點であるが、これには先住支那農民が僅少なる肥料で吸収力の強い高粱、粟を栽培し、その上燃料に窮した結果言葉通り根こそぎ作物の根幹、路傍の雜草に至るまで採取する結果にもよるもので、邦農の如く極端に土壤を愛撫するのと好對照をなしてゐる。幸ひ大豆の輪作と冬期地下凍結して土壤の風化を促し空氣中の窒素を吸収する故、辛うじてその缺點は補はれてゐるが、今後邦農がこの地に移住するならば、土壤を愛撫せよと指導しゆくことに心懸くべきである。

邦農の學ぶべき乾燥地農業

満洲の氣象が空氣乾燥し降水量少きに反して、蒸發量多くその結果日本内地のやうな濕潤地とは自らその農法が異なる。従來邦人の農業移住者が深くこの點に留意せず、満洲に於いて營農に失敗を繰返してあり、また識者間

にはその營農が異なる故に農事移民は不能なりと消極論を唱へるものさへあるが、満洲移民は已に國策としても萬難を排して遂行すべきものであり、その論の是非を論ずるよりも進んで満洲に類似した氣象を有する海外の他地方に發達した農法を研究し、満洲の新農法を創定すべきである。勿論在來の支那農民の營農法及び二三先驅者はこの地の營農法を研究し、乾燥地の營農を行ひ來つてゐるが、その現状は未だ改良發達の餘地の充分ある有様で、この點に於いて北米北西部の乾燥地帯その氣象満洲に類似し、その營農法は満洲より遙かに發達してゐる故に好箇の參考とならう。

仰々乾燥地農業とは、一般に降水量少き地に灌漑を施さず特殊の耕作方法によつて常に土壤中に作物に所要の水分を保存せしむる農法をいふ。しかし降水量の多少のみならず降水量は相當あつても春夏作物の成長期にその降水量分布が適當でなければこれを行ふことは出來ぬ、参考に別表に満洲と北米の降水量及びその分布の態を示しておく。

しかし乾燥地帯で乾燥農法を行ふ場合と、濕潤地でその農法を行ふ場合と土壤の選定の標準は著しく趣が異なる。例へば日本内地では砂質土は最も劣等の土壤とされてゐるが、北米の乾燥地帯では砂質土は理想的の耕土とされてゐる。

その理由の一つは、濕潤地の砂質土壤は降雨の爲めに溶解したる成分は洗滌せられ、農作物の營養力が著しく

減退してゐるけれど、乾燥地帯の砂質土壤は岩石が機械的に破碎せられて、未だ粘土に變化せぬ中間の砂粒多く、降雨の少いため溶解せられた養分は洗滌せられず、土壤中に保存せられてゐる。例へば北米ユタ州の土質の如きその中に腐植質中の窒素成分は、日本内地の砂質土壤の腐植質に比して三倍半の窒素分を有してゐる。

その二は、乾燥地農法の要訣は降水を多く土壤中に浸透せしめ、その蒸發と流逸とを防ぎ植生に必要な水分を多く土壤中に保存せしめるにある。この點に於いて浸潤地の砂質土質を考ふるときはこの條件を全く備へてゐないが、乾燥地の砂質土壤は粘質土のやうに土壤の表面に硬皮層を生ずること少く、降水に際して水温の浸透容易であり、蒸發に際しては毛細管引力のため上騰發散する水分を中斷防止して極めて好都合である。

第三には、乾燥地農法で最も必要なことは常に肥耕し、土壤の粘着固結を防ぐことである。しかるに粘質土なれば一雨あれば直ちに硬結し、乾天續けば硬皮層を生ずるのに反して、砂質土壤にはその憂がなく、耕耘も容易である。

しかして北米ユタ州の如きは、この砂質土壤土層八尺—十尺に及んでゐる故に、乾燥地農法として理想的の地とされてゐる。しかるに滿洲の土壤はもとより一樣ではないが、その大部分は（特に南滿洲）蒙古奥地から送られた謂はゆる黄土の堆積か、または大遼河その他の河川によつて運ばれた黄土の沖積せられたもので、粗粘土または粘土なるが、大部分石英砂または正長石斜石等の風化の度の進まぬ礦物粒子を多く含有する、養分に富める

土壤であるのみならず、その土層も深く、よく北米乾燥地の土壤に類似してゐる。故に滿洲に於いてその土壤に適應した耕作法を考究することは目下の急務である。

土壤中の水濕——降水は一部流失し、一部は蒸發し、一部は浸透して土壤中に保有せられる。しかして土壤中に浸透し保有せられる水を更に吸浸水、重力水、毛細管水に區別せられる。いまこれを更に詳説すれば第一の吸浸水は土壤粒子の表面に薄層をなして存在するもので多く役立つ。第二の重力水は地球引力によつて土壤の下層に流下する地下水となつて存在する水で、濕潤地には多くあり、乾燥地には極めて少い。またあつても植物が吸収し得ぬ深さにある故これも役立つ。第三の毛細管水は土壤の吸孔隙の毛細管引力によつて重力に對抗して保持せられるもので、乾燥地の植物根に供給せられる水分はこの毛細管水である。

毛細管水は常に表面の水分蒸發缺乏するに従つて、下層の毛細管水が漸次に上昇し補充せられるもので、濕潤地に於いては地下水が補充せられることもあるが乾燥地ではこのことがないため、なるべく底土を耕鋤してその孔隙を多くし、水分の抱容力を大ならしめる必要がある。乾燥地農業で深耕の必要のあるのはこのため、幸ひ滿洲では冬期地下數尺まで凍結し、ために底土數尺まで膨軟して水分の滲透性に富む故に、乾燥地農業には好適である。

土壤中に水分の蓄積——濕潤地にあつては水分の供給は降水及び地下水の二つがあるが、乾燥地では地下水を



求めること難く、ために降水を出来るだけ有利に利用せねばならぬ。よつて降水の流失を防ぎ出来る丈多量に土壤中に滲透せしめてその散逸を防ぐのが、乾燥地農業の要諦である。

北米ユタ州で實驗するところによると、休閒地の表面固結せる場所で豪雨の際その降水量の一〇%を土壤に透入せしめたが、残餘は地表を流水してしまつた。しかるに小麥の刈株ある畑地では六〇%は地下に透入したと報告してゐる。よつてこの目的を達するため同地では農作物收穫後に、耙耨等を以つて、圃場を膨軟にして次作のための降水を蓄積する準備をなしてゐる。

現在滿洲では降水は夏季に多く、秋冬に少いたため秋耕の習慣がないが、少量の降水にても猶土壤中に蓄積する方法を考究するの必要がある。

水温の蒸發防止——乾燥地帯の常として、空氣は乾燥し、高温にして風力また強大なるを特徴とする。北米に於いては蒸發量は降水量の殆んど四倍に達し、滿洲に於いても夏季は二三倍にあたる。勿論こゝにいふ蒸發量は水面蒸發量であるが、折角土壤に浸透せしめた水分も蒸發せしめたのではなんにもならない。いかにこれを防止するかは乾燥地農業の作業の一つである。北米ではそのために地表に乾土層を作つて下層の水分の蒸發を防いでゐる。即ち降雨後若干の深さに表土を攪拌し硬結したる土壤の表層を膨軟鬆粗にして下層との毛細管の連結を絶つてゐる。その他雜草は土中の水濕を奪取發散せしめる力が極めて大なる故に、圃場の除草をよく行つてゐる。

また麥類その他の作物を高刈にして庇蔭法を講じてゐる。更に雜草木の葉で土表を被覆してゐる。

これ等の點からして滿洲先住農民は、燃料のため收穫後切株を一株を残さず抜き取つてしまふなど考ふべき點である。

以上乾燥地農業の原理を説明したるにとゞまるもので、乾燥地農業は土壤中に常に埴生に必要な水濕を保存せしむるが主眼である故に、その耕耘の様式農具も自ら異なる。北米カルフォルニアから滿洲に最初の農業移住者として大連郊外に大規模の果樹園を經營せる栗屋萬兵衛氏は、よくこの乾燥地農業の原理を應用して、自己考案の農具を使用し、絶えず耕土全面に三吋位の乾土層を作り、滿洲農家が年々最も多く惱まされる四五月の乾燥季節に於いても、人工灌溉をなすことなく、よく土壤中の水濕を保存して良成績を擧げてゐる。

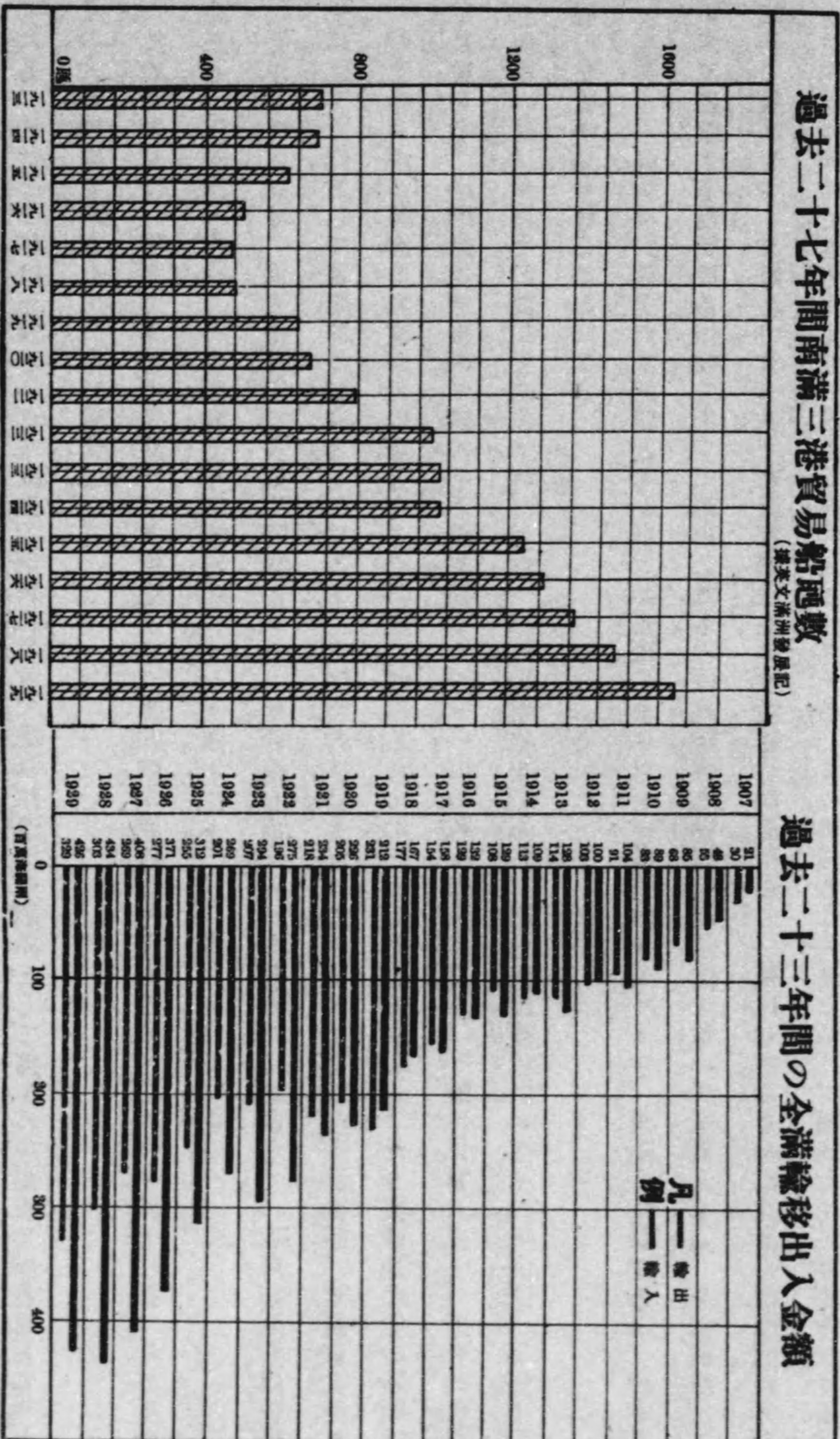
よろしく今後滿洲に移住する邦農は、指導者の指導を俟つて、この點を研究改良すべきである。

どんな作物が出来るか

満洲の農作物の種類は四五十種にも上るであらうが、普通作物として十二三種を数へ、一般農家で栽培するものは、大豆、高粱、粟、小麥、玉蜀黍の五品である。その他特用作物として棉花、煙草、落花生、麻等あげられる。

主要作物の生産状況

大豆——満洲産大豆は大別して黄豆、青豆、黑豆とされるが尙二〇〇餘種に細分せられる。中黄豆は元豆とも云ひ含油量多く食用搾油用いづれにも適して一番多く栽培せられてゐる。今日でこそ満洲大豆といへば世界的の産物として知られ、世界の大豆産額の約五分の三を占めてゐるが、従前は農家の食用燈用の油を搾取する目的で栽培され、その粕は馬糧に供せられてゐた。然るに最近に於いてはこの物は本邦に於いては豆腐、味噌、醬油の原料として多く用ゐられ、その油は最近十數年間に著しく發達し、現代工業として製造せられる油は殆んど全部の歐米諸國、就中米國、英國に輸出せられ、これに化學的操作を施して人造牛酪、臘燭、石鹼、塗料等に賞用せ



られる。またその粕は豆餅まめもちといつて家畜の飼料になり、或ひは菜園の肥料として僅かに原産地で消費せられるが、その大部分は肥料として日本に輸出される。

ために大豆は、現在で満洲の特産物の首位を占め、昭和四年度の作付反別四〇・二六一・四七〇反、その生産高三七・二四三・八八〇石、昭和七年度輸出額一五七・四七二・〇〇〇圓にのぼつてゐる。

しかして大豆は、元來播種期はんしゅうきに多量の降雨があり、その生育期間中は温暖多濕の地にして、成熟期間中は乾燥すれば大豆作として理想的の條件とされてゐる。満洲での主要産地は東支東部沿線及び南部沿線、吉長線に沿ふ一帯であるが、満洲の氣候が先の條件をよく具備してゐるためにその反當收量もよい。たゞ播種期にその降雨は不足勝ちで、滿鐵農事試験場で試作せる結果反當九五・一升の收量があつたが、一般に反當八三・一五升の收量しかない故、今後その農法を改良すれば反當一二升の増收を見られ、昭和四年度に於いても四・八三一・三七六石の増收が見られることになる。

高粱——高粱は高糧かうりやうまたは紅糧べんりやうともいひ、わが國のモロコシ、若くはタカキビで、蜀黍の俗語である。わが國の米に匹敵する重要な作物であつて精白したものは高粱米かうりやうまいといつて飯、粥に炊いて主食とする。また製粉して團子、饅頭まんじゅうをつくり好んで食べる。なほ粗悪なものは粉條子の原料にし、精白せざるものは家畜の濃厚飼料とし、脱穀調製の際にできる屑をさへ家畜の飼料とされてゐる。この外重要な用途として、醸造して高粱酒をつくる。

高粱の碎粉さいふんと小豆及び小麦の麴こうから醱酵はうかうせしめた強い酒である。

高粱は生長すればその丈七・八尺から一丈四・五尺に達する長大なる作物で、過去匪賊ひぞくの横行せるこの地では高粱の生長期は彼等の跳躍期たうやくきであつた。従つてその長大なる稈は燃料に不足するこの地では切株までよい燃料となり、灰は加里製造の原料となりまた屋根や壁の材料に用ひられ、外皮を剥いて席子いしを編みアンペラとし、枯葉は家畜の飼料となり、工業的には製紙原料に供せられる。

元來高粱の原産地は支那の南部からインドにかけて地方で高温を好む作物であるが、よく乾燥に堪え、氣候の適應性强く、世界中その栽培區域の廣い作物の一つである。南は熱帯地方から北は、北米では北緯四〇度、歐洲では四八度、滿洲では四八度、奉天以南、京奉線地方に主として産する。

昭和四年度その生産數、三六・五六二・七三〇石、作付反數二九・九二〇・六九〇反、輸出額一五・二九九・〇〇〇圓に及んでゐる。しかしてこの作物は元來が熱帯作物故に滿洲の八月の多濕高温の氣候はよく適してゐるが、五月は低温にすぎる嫌ひがある。且つその栽培技術も粗放なる儘で滿鐵農事試験場の成績によると反當二・六三六の生産高に拘はらず、實狀は反當一・一二二の二分の一以下である。ために今後改良を加へ管理よろしければ二倍の生産を得られることは確實である。

粟——粟は支那語で穀子こくしまた谷子こくしと稱し、その精白されたものを小米せうまい、また小米子せうまいし（梗）小黃米せうわんまい（糯）と呼ん

である。従来滿洲農家の常食として消費され、一部は黃酒（はくせん）の原料とされてきたが、最近鮮人がこれを好んで食する故に朝鮮に輸出され、朝鮮の米は日本に移出される有様である。また粟稈は家畜の飼料として必要缺くべからざるものなる故に、農家で家畜を飼畜してあれば必ずこれに必要なだけの粟を栽培してゐる。

元來粟はその吸収力の著しく大であるのに反して、蒸發量は極めてすくないため、溫暖乾燥の地によく生長する。極めて氣候の適應性強きため北米では北緯四五度、歐洲では北緯五〇度の地點まで栽培され、オーストラリヤにては南緯四五度の地點で栽培されてゐる。滿洲に於いては主として北滿東支西部線、次に南滿呼海沿線、間島地方、鄭通線（しふんせん）に集團分布されてゐる。

その生産高は昭和四年二八・七二六・三五〇石、作付面積二一・五一一・三五〇反に及んでゐる。草丈四尺内外、穂の形が紡錘形をなして子實の黄色のもの多く、この色で黄色粒、黒色粒、白色粒、紅色粒の四種に大別され、二十餘品種に別れてゐる。

反當收量は、日本内地の一・二七石に比して僅かにすくなく一・一八石だが、農事試験場の試作の結果は一八〇石になつてゐるから、これもその農法を改良すれば著しい増収を見ることが明らかである。

玉蜀黍——玉蜀黍は支那名を苞米（はまき）といひ、滿洲では玉米と呼んでゐる。元來が溫暖多濕の氣候に適する故に、この地では多少氣温に不足を感じ、北部地方にはその作は少く、南滿奉天以南及び開原、瀋海沿線に主として栽培せられてゐる。

玉蜀黍の年産額は昭和四年度、一・二九三・三一〇石、作付面積八・八四一・七九〇反、農産物としては大豆、高粱につぐもので、その粉で饅頭をつくり農家の食用に供する外、高粱酒製造の原料の一部に用ゐられ、その粉（こな）は粉條子の原料ともなり、莖は燃料として、枯葉及び實は家畜の飼料となる。

反當の收量は栽培地によつて差多く、また品種によつて差があるが平均大約一・二六石、内地で一・二一石の割合よりすこしよい。しかし農事試験場の試作は二石内外の好成绩を示してゐるから、今後品種の選擇等に留意すれば、これもまた二倍近くの増収を見られるもの、一つである。

小麥——小麥は南滿が大豆で穀倉をなしてゐるやうに、北滿の穀倉になつてゐる。元來が溫暖の氣候に適し、よく寒氣に堪ゆる特色を持つてゐる故に、その世界での分布状態は極めて廣く、北半球に於いて北緯六四度のノルウェーから北米北緯五〇度の地點まで栽培され、南半球は南緯四五度の南米、濠洲の地にも作付されてゐる。しかしてその中北米カリフォルニア北部は最も理想的の地である。滿洲に於いては冬期嚴寒にすぎるため四月に播種するがこの時期に常に降水が不足勝ちである。

小麥の年産額は昭和四年度一千二百萬石と稱せられ、この地の小麥は蛋白質に富み、製粉原料として適してゐるため、その大部分は製粉されて歐洲にまで輸出されてゐる。そのためにハルビン、及び海倫には一規模の製粉

工場がある。また本邦に於いても従来小麦粉はうどん麩類に多く使用されてゐたが、パン製造用としての需要激増し、本邦の需要も年と共に増してゐる。

その他このものは家畜、家禽の飼料となる故、この需要もあなどり難い。また品種は、満鐵公主嶺農事試験場で改良に腐心し、従来より二・三〇%の増収を見られる品種も改良され、反當一石内外の収量をみてゐる。

水稻——滿洲の農業は、在住滿人によつて開かれたものでなく耕種農に優れた移住漢人によつてなされた。邦人が滿洲に移住せんとせば内地人の誰しも注目するのは水稻栽培である。ところが最近この水稻栽培は移住鮮人によつて著しく發展し、既に年産額昭和四年度一・四二四・七六〇石、その作は面積八九〇・八六〇反に及んで、著しく増加の割合を示してゐる。

既に記述した如く、滿洲の河は自然河にて、治水灌漑工事等の人工設備なきため、従つて將來この方面が開拓せらるれば、良田美田を得られ、また水稻栽培も現在行はれてゐない地方も次第に行はれ、この地の收穫はたしかに注目囑望するに價する。

しかして元來この水稻は熱帶の植物であるから、氣温高く、多濕の地によく生育するものゝ、作物として極度に改良されてゐる結果、氣候に對する變異性といはふか適應性といはふか、その各地の氣候によつてよく生育し、品種によつては北緯四五度または南緯四〇度の地にも栽培されてゐる。しかし最良の地は三〇度乃至四〇度であ

る。滿洲に於いては従つて奉天以南の地に現在主とし、關東州愛川村の如きは、最近極めて好成績を示してゐる。反當収量は約一・八石内外で内地と大差がない。

陸稻——陸稻といへども多濕の地を好み、滿洲の地は乾燥しすぎる故、陸稻の栽培地は低地を選ぶ必要がある。従つて現在滿洲の陸稻の産地は水稻の産地とほゞ同じである。昭和四年度の生産高一・七九七・七四〇石、作付反數一・一二九・〇六〇反、これも水稻と同じく最近激増した作物の一つである。

以上の普通作物の外に特用作物として、邦人の親み易いものに棉花、煙草、甜菜がある。

煙草——菸といひ、吉林省の南部及び東部、奉天省の北部及び東部に従来相當に栽培されてゐたが、在來種は品種悪く到底紙巻煙草にはなり難い。しかしわれ々注目する處は在來品種でなく、煙草の栽培地として適してゐるといふ一點で、滿鐵は既にこの點に着目して鳳凰城及び得利寺地方に米國種の試作をなし好成績を擧げてゐる。

棉花——滿洲に於ける棉花は、奉天以南に栽培され、棉實より棉子油を搾取してゐた。その品種十五六種に及ぶが、いづれも纖維太く、弾力強く、紡績用としては不向であつたが、最近紡績會社の設立と共に、遼陽附近の棉花栽培は多少みるべきところがあつた。しかしこれとても従前のと比較對照しての話だが、最近日印貿易商條約の破棄等日印關係の貿易圓滑を缺き、政府及び民間當業者間にインド棉花の不買、滿洲棉花栽培の促進などの

議がおきてゐる故、恐らく近き將來にこの棉花栽培は著しく進展するだらう。

果樹——滿洲に栽培せられてゐる果樹は、その種類は少く苹果、梨、葡萄、杏の四種類である。

その中で葡萄と梨は、比較的好成績とされてゐるがその産額も未だすくなく、氣象状態からいつて南滿地方に限られてゐる。

たゞその中で苹果は、その南滿地方の氣象状態が特に苹果栽培に適してゐる。特に日本や朝鮮よりも優れてゐるから、將來この地は他を凌駕するに至るであらう。滿鐵はこの點に留意し、苹果栽培を奨励した結果、熊岳城以南の地には十年前の二倍半も果樹園増加して五千町歩にもなつてゐる。

蔬菜——滿洲は冬期嚴寒のため農作物なく、近時大連はじめ都市の人口激増の結果、蔬菜の需要は著しく、大連市場の如きは、冬期のみならず夏期も蔬菜を移輸入するの有様である。その上隣邦朝鮮及び在滿人はこの蔬菜栽培は不得手であり、これをつくらず需要する態で、今後滿洲各地の蔬菜の需要は相當多額に上ることは想像に難くない。

しかして蔬菜栽培を得意とする先住漢人も、邦農の如く集約園藝農には進歩發達してゐない故に、この點に着目し管理、販賣統制等よろしければ有利の事業の一つとなる。

近來その作付面積の増加は昔日の比でなく、促成栽培をさへ試みてゐるものがある。

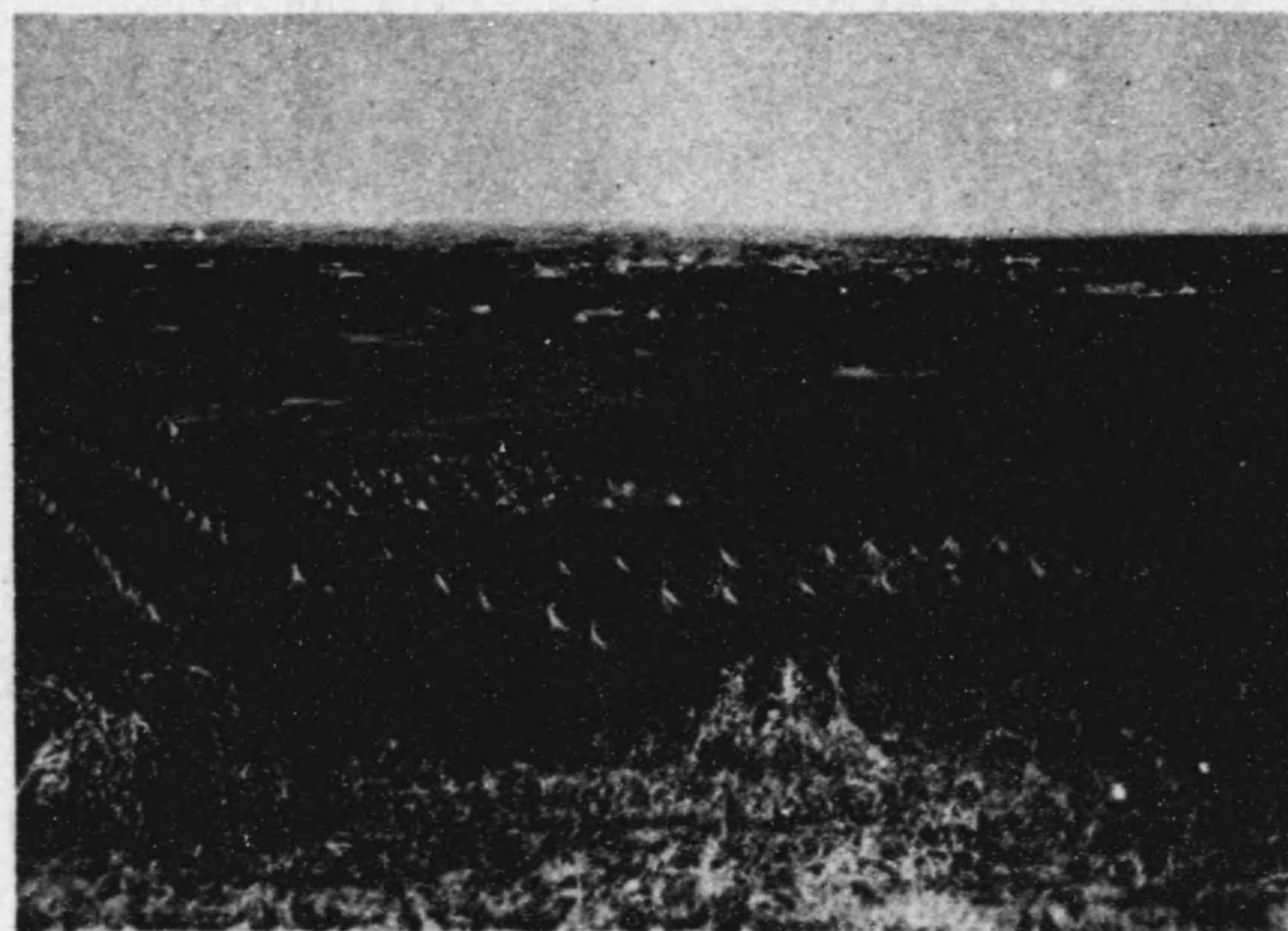
農家實際の營農狀況

北米で一日に三ドルも五ドルも取れた話をきき、南米ブラジルに行けば氣候がよくてバナ、ヤバインアップルが實つて、コーヒーの花が咲き、米は無肥料で反當三石も收穫が出来るなど、移住地のよい話だけをきき込んで居る頭で滿洲へゆくと大に失望する。滿洲は現在稍々もすれば宣傳にすぎ樂土のやうに考へてゐるものもあるが、冬は寒くて農業は出來ず、春から秋までの農繁期は従つて極めて多忙であり、氣候や土質の關係から農作物に制限をされてゐるから、苦勞しなければ中々食ふてゆけない。たま／＼一時の感激で一躍千金を夢みてゆけば失敗する。その上先住移住漢人があり、移住鮮人も多い。これ等の中に伍してゆくには文字通り、生命がけの非常の決心が必要である。

しかして既に滿洲の農業に關してはその自然的條件、及びその農作物に就いて説明をしておいた。よつて邦農は滿洲の農業はわが國の農法と著しく趣を異にすることを知られた筈である。ならば滿洲の農家ではどんな營農をやつてゐるかを知ることには、邦農移住者にどんな方針で營農すべきかを示す参考指示にもならうかと思つて、南北の大中小農家を選んで、その家計の調査を示しておく。(據滿鐵調査)



さ拓開てつよに手の農鮮に實は培栽稻水、るけ於に洲滿 田水の農鮮
。いよもてついとたれ



は現くよで眞寫の枚一、が態の落集のそび及村農洲滿 景全城縣農東
。るあてれさ



望有はに民農がわ、は培栽樹果の洲滿南び及洲東關 花の梨の店房瓦
だつ一の業事るな



き如の氏衛兵萬陸栗、れさ視望有も最はゴンリに特 園ゴンリの州金
。るあが者功成

大農經濟の南北の一例

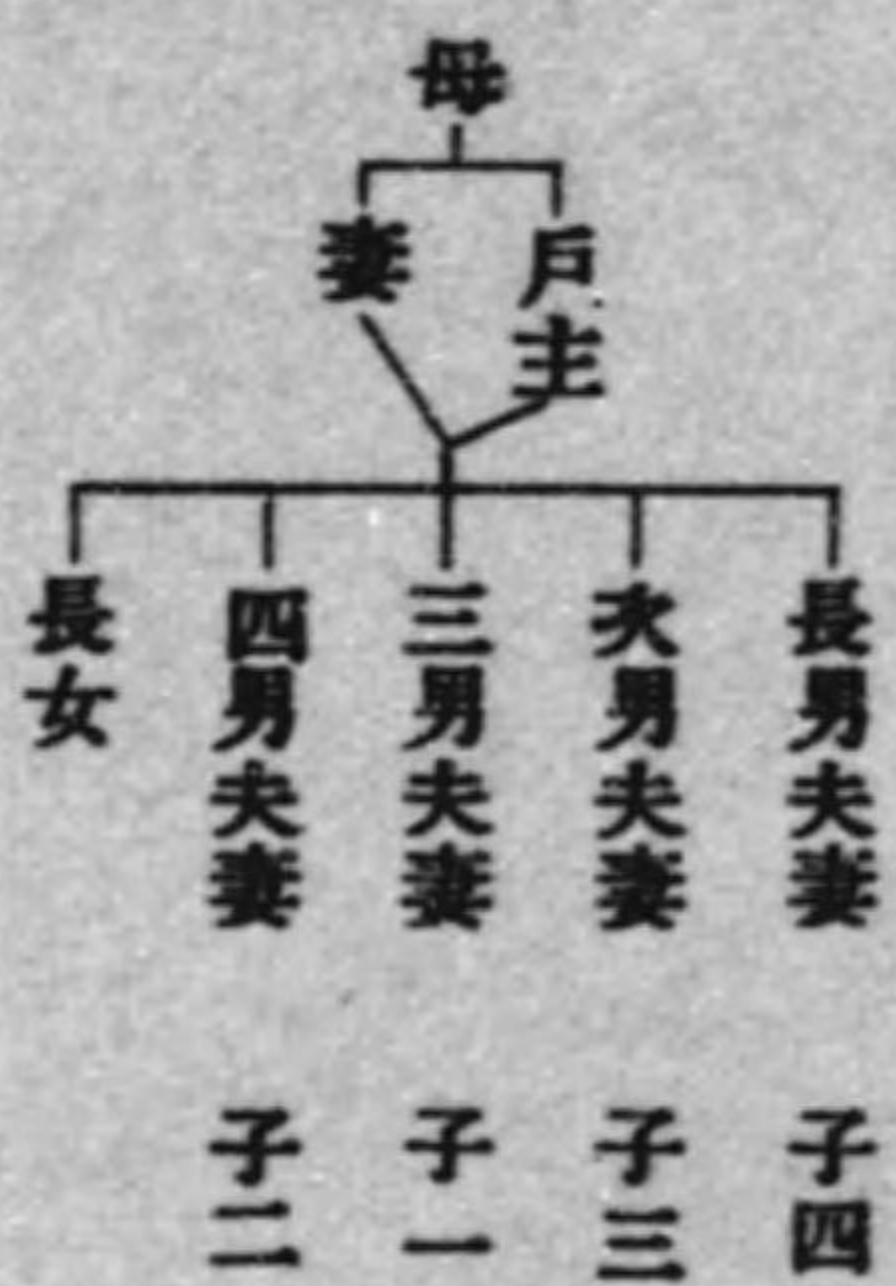
滿洲の南北によつて、その大農といつてもその規模は同じでない。従つて自ら家計の状態も違ふ。

一、南部大農の一例（所在——復縣金斗房（滿鐵幹線王家驛西方二里））

A 高粱、大豆、玉蜀黍、粟等を主體とした有畜農業、自作、小作を併せて行ふもの、所有地

畑	四六・八町歩	自作地	一八・〇町歩
榨蠶場	二・〇町歩	貸出地	二八・八町歩
宅地	三反歩	貸出	

家族 二二人（男大五、小五、女大七、小五）



使用人 八人（農夫男大六、厨夫男大一、豚飼男大一）
 家畜 牛大三、小一、骡大一、驢大一、豚大小三〇

右の家族構成の者の營農家計狀態の大略の調査は次の如くである。中支出に關しては邦農の生活様式も異なる故に特に大略にし、詳細な説明を省いておく。

B 収入 二・四〇二・〇〇元

品目	數量	單價	金額	摘要
高粱	八石	七元	六〇元	
玉蜀黍	九二・〇〇	九・五〇	八七四・〇〇	
黍子	一四・〇〇	八・〇〇	一一二・〇〇	
粟	一五・〇〇	七・五〇	一一二・五〇	
大豆	二三・〇〇	一二・〇〇	二七六・〇〇	
小豆	一・七〇	一六・〇〇	二七・二〇	
硬子	三・一〇	一〇・〇〇	三一・〇〇	(陸稻)
黑豆	二・五〇	一〇・〇〇	二五・〇〇	
蕎麥	二・四〇	一〇・〇〇	二四・〇〇	
小麥	九〇	一五・〇〇	一三・五〇	
高粱稗	一・二〇〇	百把一・〇〇	一二・〇〇	

大農經濟の南北の一例

家族 四〇人(男大一一、女大一一、小一八)



使用人 男六、農夫頭一、農夫四、豚飼一、
家畜 馬四、騾八、驢一、豚五五、
收入 六・三八二・二〇元

種別	數	單價	金額
大豆	二二〇石	一〇・〇〇	二二〇〇・〇〇
高粱	二四〇〇〇	八・〇〇	一・九二〇・〇〇
粟	一一一〇〇	六・〇〇	七二六・〇〇
糜子(黍)	二〇〇〇	七・〇〇	一四〇〇・〇〇
糜子(陸稻)	一五〇〇	九・五〇	一四二・五〇
小麥	二〇〇〇	二五・〇〇	五〇〇・〇〇

C 支出 五・四〇二・一一元

種別	金額	摘要
高粱	二四〇・〇〇	
粟	三三八・〇〇	
大豆	七五・〇〇	
糜子(黍)	五二・五〇	
糜子(陸稻)	四三・二〇	
小麥	一五・〇〇	
農家收入合計	五・三九二・二〇	
大豆	一三〇・〇〇	
高粱	一一二・〇〇	
粟	七八・〇〇	
小作料收入	三三〇・〇〇	
豚賣上高	六〇・〇〇	
冬期勞働	五六〇・〇〇	大豆、穀類の運搬
副業收入	六二〇・〇〇	
雜收入	五〇・〇〇	家賃

種別	金額	摘要
主食費	五七二・〇〇	

大農經濟の南北の一例

計	副食費	住居費	被服費	薪炭費	備品費	公課	借入費	教育費	種苗費	肥料費	負債利子	飼料費	雜費
五・四〇一・二九	三〇五・八〇	三〇二・六四	三九二・〇〇	四〇・五〇	一九七・〇〇	二四六・三九	一・一一三・二〇	一四・四〇	一三一・七一	ナ	七五〇・〇〇	一・二〇三・六五	一三二・〇〇

D 差引收支 殘九八〇・九一

中農經濟の南北の一例

一、南部中農の一例（所在——蓋平鐵道附屬地西子）
 A 主として畑作を主體としたもの

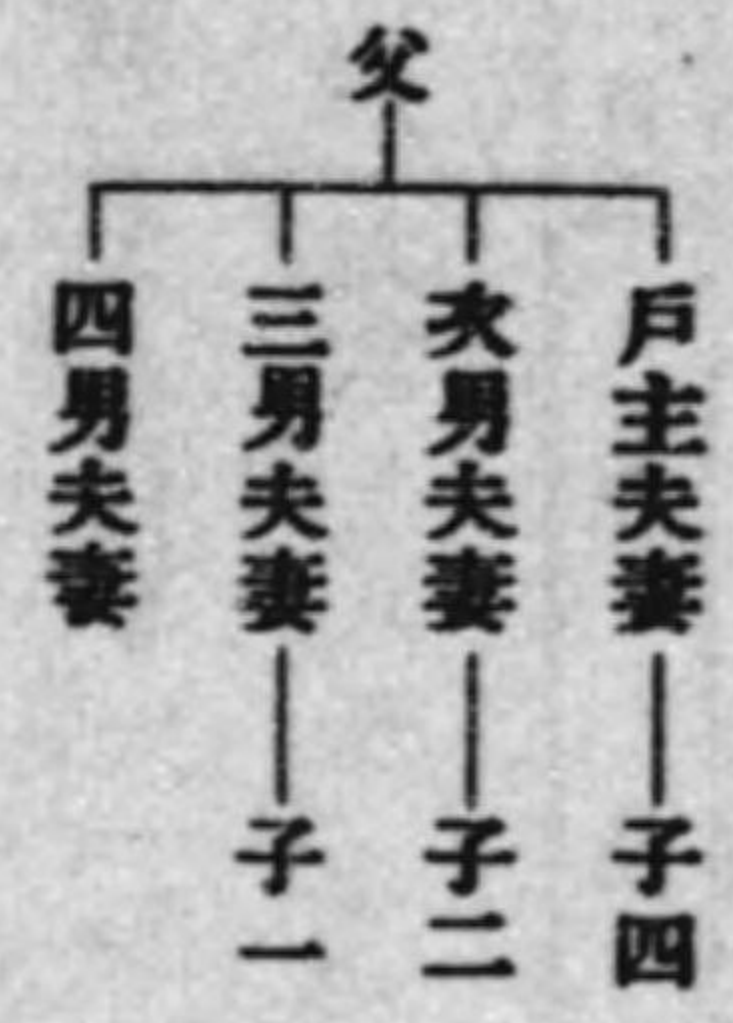
所有地

畑（七町二反） 滿鐵借受地 三町步
 所有地 四町二反
 作付反別 高粱 三町
 粟 玉蜀黍 大豆 各一町四反

家屋

住宅	滿鐵所有家屋一棟
物置	自己所有
物置、厩舎	

家族 一六人（男大五、小三、女大五、小四）



使用人 一人（農夫男大一人）

中農經濟の南北の一例

農家實際の營農狀況

B
 家畜 騾大二、豚大三
 車輪 大(荷車)一、小車(客馬車)一、
 收入 七九六・八五元

品目	數量	單價	金額	摘要
高粱	二四〇〇石	八元五〇	二〇四〇〇元	
粟	一〇・五〇	八・三〇	八七・一五	
玉蜀黍	四・五〇	九・三〇	四一・八五	
大豆	四・五〇	一一・三〇	五〇・八五	
高粱稈	六・〇〇〇把	百把一・〇〇	六〇・〇〇	
粟草	六・〇〇〇斤	百斤一・〇〇	六〇・〇〇	
苜蓿	二・四〇〇	一・〇〇	二四・〇〇	
豆	四・五〇〇	二・〇〇	九・〇〇	
農業収入			五三六・八五	
馬車賃			二五〇・〇〇	兼業
船宿賃			四〇・〇〇	
豚賣上			一〇・〇〇	一年大豚一頭の割
被備賃			六〇・〇〇	

C
 支出 九〇一・〇〇元

種別	金額	摘要
主食費	三〇六・九〇	
副食費	五五・二五	
住居費	二三・五七	
被服費	四三・五〇	
薪炭費	九六・八〇	
備品費	一一・〇〇	
公課	一一九・一八	
借入費	八四・〇〇	
教育費	二・〇〇	
肥料費	ナシ	
種畜費	八・八〇	
飼料費	一四五・〇〇	自家製土糞ヲ用フ
負債利子	ナシ	
雜費	五・〇〇	
計	九〇一・〇〇	

中農經濟の南北の一例

農家實際の管農狀況

D 差引收支 不足 一〇四・一五元

二、北部中農の一例(所在—公主嶺鐵道附屬地附近小孤榆樹)

A 畑作を主體とし、養豚を行ふ。

所有地

畑 二四・〇〇〇
 借受地 一二町〇〇
 所有地 一二町〇〇

作付反別 大豆、高粱、粟、各八町歩

家族 一三人(男大三、小三、女大四、小三)



使用人 五人(農夫頭一、農夫四)

家畜 馬四、騾三、驢一、豚大小一六

B 収入 一・九二七・五〇元

品目	数量	単價	金額	摘要
----	----	----	----	----

品目	数量	単價	金額	摘要
大豆	五八・五〇石	一二・〇〇元	七〇二・〇〇元	
高粱	六五・〇〇	七・〇〇	四五五・〇〇	
高粱	六五・〇〇	七・〇〇	四五五・〇〇	
高粱	一三・〇〇把	六五・〇〇	八五五・〇〇	
高粱	一三・〇〇把	五・〇〇	六五・〇〇	
高粱	一九・五〇〇斤	一一・七・〇〇	二二六・〇〇	
豆			二六・〇〇	
農産收入			一・八三〇・〇〇	
馬車運賃			七〇・五〇	
豚賣上代			三七・〇〇	
副業收入			一〇七・五〇	

C 支出 二・〇六九・四二一元

種別	金額	摘要
主食費	二二三三・六〇元	
副食費	四四・八三	
住居費	一六・〇〇	家庭修繕費
被服費	四二・〇〇	
薪炭費	六九・七五	

中農經濟の南北の一例

備品費	小作料	公課	備人費	教育費	種畜費	肥料費	飼料費	負債利子	雜費	計
三四・〇〇	三六四・〇〇	四九・二〇	六三八・〇〇	ナシ	四二・六四	ナシ	五三五・四〇	ナシ	ナシ	二・〇六九・四二
自家製土糞を用ふ										

D 差引收支 不足 一四一・九二 元

小農經濟の南北の一例

A 一、南部小農の一例（位置——熊岳城鐵道附近杜家營）
 水田及び畑作を行ふもの、

所有地（借受地）

畑 一町八反
 水田 七反二畝

家屋

住宅、物置、厩舎借家（満鐵所有）

家族 九人（男大二、女大四、小三）

母
 戸主夫妻
 長男夫妻 子三
 長女

使用人 ナシ

家畜 騾大二、豚大二

車輛 大車（荷馬車）一

B 収入 五一五・六八 元

品目	數量	單價	金額	摘要
高粱	九石	八・五〇 元	八一・六〇	
粟	四・四〇	八・〇〇	三五・二〇	

小農經濟の南北の一例

農業收入		大豆	玉米	高粱	水稻	水	高粱	玉米	大豆
三・六〇〇	七〇〇	二・六四〇	二・二五〇	九・九六	一・七五	一・七五	一・七五	一・七五	一・七五
百斤	百把	百斤	百把	百斤	百把	百斤	百把	百斤	百把
〇・五〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
一八・〇〇	七・〇〇	七・〇〇	二六・四〇	二二・五〇	二二・四八	二二・五〇	二二・五〇	二二・五〇	二二・五〇
副業收入		馬車運賃		同作		同作		同作	
三五五・六八	一五〇・〇〇								

C 支出 四六〇・〇八

種別	金額	摘要
主食費	一三三・五〇	
副食費	二一・九〇	
住居費	二八・二五	
被服費	一二・五〇	
薪炭費	八・四〇	
備用品費	五・五〇	地代その他
公課	六四・四五	
小作料	七三・七四	
備人費	ナ	
教育費	ナ	
種苗費	一〇・八四	
肥料費	一五・〇〇	
飼料費	八六・〇〇	
負債利子	ナ	
計	四六〇・〇八	

D 差引收支 残五五・六〇

二、北部小農の一例（所在——長春鐵道附屬地附近二道溝）
A 畑作を主體としたもの

所有地

畑 六町歩

家屋

小農經濟の南北の一例

農家實際の管農狀況

借家(無料、地主所有)

家族 一人(男大五、小二、女大三、小一)



使用人 ナシ

家畜 馬五、豚大五

車輛 大車(荷馬車)一

B 収入 九〇〇・〇〇元

品目	數量	單價	金額	摘要
大豆	二〇・〇〇石	一一・〇〇元	二二〇・〇〇元	
高粱	一八・〇〇石	八・〇〇元	一四四・〇〇元	
粟	一八・〇〇石	八・〇〇元	一四四・〇〇元	
豆	四車	八・〇〇元	三二・〇〇元	
高粱	四車	八・〇〇元	三二・〇〇元	
草	四・五〇〇斤	二二・〇〇元	九九・〇〇元	

農業收入	馬車運賃	豚賣上高	副業收入
六七五・〇〇	二〇〇・〇〇	二五・〇〇	三三五・〇〇

C 支出 九四四・七五元

種別	金額	摘要
主食費	二六八・七〇元	
副食費	七三・四〇	
住居費	ナシ	
被服費	四三・四九	
薪炭費	三六・三五	
備品費	一六・三六	
公課	三・五〇	
小作料	二五四・〇〇	
備人費	ナシ	
教育費	ナシ	
種苗費	一〇・四五	

小農經濟の南北の一例

肥料費	ナ
飼料費	二三八・五〇
負債	ナ
雜費	ナ
計	九四四・七五

D 差引收支 不足 四四・七五 元

以上の大中小農の收支を比較してみると、

種目	南部			北部		
	大	中	小	大	中	小
經營面積	四六町八	七町二	二町五二	七八町〇〇	二四町〇〇	六町
收入	二・四〇二・〇〇元	七九六・八五	五一五・六八	六・三八二・二〇	一・九二七・五〇	九〇〇・〇〇
農業收入	一・七六一・〇〇	五三六・八五	三六五・六八	五・三九二・二〇	一・八二〇・〇〇	六七五・〇〇
副業收入	二六・〇〇	二六〇・〇〇	一五〇・〇〇	六二〇・〇〇	一〇七・五〇	二二五・〇〇
雜	六一五・〇〇			三二〇・〇〇		
支出	二・二五四・三八	九〇一・〇〇	四六〇・〇八	五・四〇二・一一	二・〇六九・四二	九四四・七五
收支	+ 一四七・六二	- 一〇四・一五	+ 五五・六〇	+ 九八〇・九一	- 一四一・九二	- 四四・七五

これによつて、滿洲の産業經營の規模は、南から北に向つてゆくに従つて氣象その他作物の關係上、次第に大きくなつて、南部の大農は略々北部の中農に、南部の中農は略々北部の小農に等しい。

收入中北部の大中小農いづれも副業收入の多額なのは、冬期馬車運搬業のやうな比類ない好箇の仕事があるからである。

支出中主要なものは飲食費、薪炭費、飼料費であるがこれをこゝに計上はされてはゐるものゝ實際は自家自給制で現金支出がない。次に邦農の特に氣を附けた驚くところは肥料費、教育費、醫藥費の支出少なきことで、支那農民の知識生活程度農法のなほ幼稚なることを示すもので、計上された支出は今後文化の發達と共に増加するであらうし、しかし邦農の場合にはこれ以上に見なければならぬ。

以上の結果から、結論をいそげば、大體に於いて滿洲の小農は水田、蔬菜園の如き特殊農業を加味せねば收支は償ひ難く、普通作農業を合理的に經營するにはその經營面積は最小限度三〇町歩内外とされる。また冬期の仕事及び耕作上の必要からも滿洲では必ず有畜農業を必要とされてゐる。

いま滿洲農の生活状態を見るに、一ヶ年の生計費は農民一人當り大體左の如くであつて、邦人移住民がこれと對抗するには非常な努力が必要である。(滿蒙要覽による)

小作農	自作農			食料費	衣料費	住居費	光熱費	雜費	合計						
	平均	小農	中農												
三〇・二七六	二六・一一八	三四・四三四	四五・八八一	四九・七四四	四三・〇六八	四四・八三〇	七・〇六八	一二・二三六	九・八六七	八・九九五	六・四二六	一一・一八〇	四・〇四五	三・五〇〇	六四・五四九
七・六二三	一〇・八六八	四・三七八	九・七二三	六・八四二	八・八四八	一一・六二一	八・九四八	四・〇〇〇	四・五〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	三・五〇〇	七五・三九四
四・八〇六	五・一五九	四・四五四	六・八四二	八・九九五	一一・六二一	一一・一八〇	八・九四八	四・〇〇〇	四・五〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	三・五〇〇	八四・七二四
一一・一五六	一二・一〇六	八・二〇六	八・九四八	一一・六二一	一一・一八〇	四・〇四五	八・九四八	四・〇〇〇	四・五〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	三・五〇〇	五八・二五一
三・七五〇	四・〇〇〇	三・五〇〇	四・〇〇〇	四・五〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・五〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	三・五〇〇	五六・六一一

邦農移住者への指南

先に滿洲在住農家の家計調査を参考のために述べておいた。よつてこゝには邦農移住者にどんな標準で營農すべきかその大綱を示しておく。勿論これは一つの理想案であつて實際に立案通り几帳面にゆくか否か疑問である。特に仕事に馴れず、内地の營農法と趣を異にし、氣候風土等たま／＼著しく異なる故、その最初は諸種の困難や豫測せぬ障礙があるかも知れぬ。しかし農業に於いては經驗は特に貴い教訓である。決して一度や二度の困難や蹉跌にあつてひるむやうなことがあつてはならぬ。

各作物の反當收量はどんなか

既に説明した如く、滿洲農家の經濟の根幹をなすものは南滿洲では高粱、粟、大豆、玉蜀黍である。現在以上四種の作付面積は農耕地の七九・七九%を占めて居る有様で、右の外は小麥、大麥、黍、稗、水陸稻、蕎麥等があるが、その作付面積は極めて少い。

また北滿洲では、大豆、粟、小麥、高粱、玉蜀黍がその農耕地の大部分を占め、全耕地面積の八八・二三%を

各作物の反當收量はどんなか

占めてゐる。その外は南滿洲と同じく、その作付面積は極めてすくない。
先に滿洲の農作物を紹介した折に、各作物の反當收量をも簡単に述べておいたが、これを再び詳述すれば反當收量は南滿と北滿とは大に異り、また上中下耕地の状況によつて著しく異なる。

作物名	大豆	その他豆類	高粱	粟	玉蜀黍	小麥	水稻類	陸稻類	その他穀類
南滿洲反當收量	〇・九六二	〇・八一八	一・三三〇	一・二七〇	一・二九七	〇・七五三	一・八一〇	一・五七二	一・二二〇
北滿洲反當收量	〇・九三九	〇・六八六	一・一二二	一・〇八二	一・二二六	〇・七九五	一・九七四	一・四〇二	一・一六二
南北滿洲平均反當收量	〇・九五一	〇・七五六	一・二三七	一・一八二	一・二六四	〇・七七三	一・八八六	一・四九二	一・一九二

右の結果は、反當收量は比較的すくなく見えるが、これには最も悪い條件として下耕地を加へた平均價なる故で上中耕地の平均は大約次の如くである。

作物名	大豆	小豆	高粱	粟	玉蜀黍	小麥	水稻類	大麥	蕎麥
南滿洲反當收量上耕地	一・三〇〇	一・六〇〇	一・〇〇〇	一・四〇〇	一・五〇〇	〇・九〇〇	三・〇〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇
中耕地	一・〇〇〇	一・三〇〇	〇・八〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	〇・七〇〇	二・〇〇〇	一・三〇〇	一・二〇〇
南滿洲反當平均收量	一・一五〇	一・四五〇	〇・九〇〇	一・三〇〇	一・三五〇	〇・八〇〇	二・五〇〇	一・四〇〇	一・三五〇
北滿洲反當收量上耕地	一・二〇〇	一・三〇〇	〇・九〇〇	一・三〇〇	一・四〇〇	一・〇〇〇	三・〇〇〇	一・七〇〇	一・四〇〇
中耕地	〇・九五〇	一・一〇〇	〇・八〇〇	一・一〇〇	一・二〇〇	〇・八〇〇	二・〇〇〇	一・四〇〇	一・一〇〇
北滿洲反當平均收量	一・〇七五	一・二〇〇	〇・八五〇	一・二〇〇	一・三〇〇	〇・九〇〇	二・五〇〇	一・五五〇	一・二五〇

右表から見ると、小麥はその作物の性質上北滿地方がその收量大なるも、他は南滿地方の方が遙かに多い。これは氣象等の關係もあるが、も一つは北滿は農家一戸當の耕地面積廣く、耕種法も粗放なるため将来多少集約さるれば現在よりも收量の増加をみるゝことあきらかである。

なほ、これ等の反當收量を、滿鐵農事試験場の成績と比較すると次の如くである。

大豆	高粱	玉蜀黍	小麥	水稻	陸稻	粟	その他穀類	その他豆類
南北平均反當收量	〇・九五一	一・二三七	一・二六四	〇・七七三	一・八八六	一・四九二	一・二六四	一・一九二
農事試験場成績	一・三〇四	二・四四〇	一・九八〇	〇・七六四	四・一八五	一・六四二	一・六二六	〇・七五六
差引計	〇・三五三	一・二二三	〇・七二六	〇・〇〇九	二・二九九	〇・一五〇	〇・三六二	

右表の如く、在來の農家の反當收量は、これに改良を加へるならば、更に收量の激増をみるゝこと火を見るよりも明らかである。たゞし小麥は農事試験場の位置よりして成績あしく、このもののみは試験場の收量の方が減じてゐる。なほ試験場の成績はいづれも三種乃至五種の平均收量にして、これ等の事實からしても如何に滿洲農業者は、その品種の選擇改良に心掛くべきかを暗示してゐる。

どんな作付割合にするか

どんな作付割合にするか

ならば滿洲に於いて邦人農業者はどんな作物を選び、その作付歩合はどんなにするか、して收穫量はどの位になるかといふと、いづれも農場の土質地味氣候風土によつて異なるが、南北の場合を別々に、地味は中の上を標準として夫々二例づゝを示せば次の如くなる。

一、南滿洲の畑作のみをなす場合、左の如き作物と家畜を取入れ有畜農業を適當とする。

作物	作付反別	作付割合	收穫量	
			反當收穫量	全收穫量
大豆	四〇反	三三・三三%	一・一五石	四六・〇〇石
高粱	三〇	二五・〇〇	一・四五	四三・五〇
粟	二〇	一六・六七	一・三〇	二六・〇〇
稷	一五	一二・五〇	一・八五	二七・七五
五穀黍	一五	一二・五〇	一・三五	二〇・二五
計	一二〇	一〇〇・〇〇		一六三・五〇

一、南滿洲水田を主體とした場合、養豚、養鶏、また養蜂等有畜農業を適當とする。

作物	作付反別	作付割合	收穫量	
			反當收穫量	全收穫量
水稻	三〇反	三七・五〇%	二・五〇石	七五・〇〇石

作物	作付反別	作付割合	收穫量	
			反當收穫量	全收穫量
高粱	一五	一八・七五	一・四五	二一・七五
大豆	二〇	二五・〇〇	一・一五	二三・〇〇
粟	一〇	一二・五〇	一・三〇	一三・〇〇
五穀黍	五	六・二五	一・三五	六・七五
計	八〇	一〇〇・〇〇		一三九・五〇

一、北滿の畑作を主體とした場合、左の如き作物と家畜を取入れ有畜農業を適當とする。

作物	作付反別	作付割合	收穫量	
			反當收穫量	全收穫量
大豆	五五反	三六・六六%	一・〇七五石	五九・一二五石
高粱	三〇	二〇・〇〇	一・二〇〇	三六・〇〇〇
粟	二〇	一三・三四	一・二〇〇	二四・〇〇〇
五穀黍	一五	一〇・〇〇	一・三〇〇	一九・五〇〇
小麥	三〇	二〇・〇〇	〇・九〇〇	二七・〇〇〇
計	一五〇	一〇〇・〇〇		一六五・六二五

一、北滿水田を取入れたる場合

作物	作付反當	作付割合	收穫量	
			反當收穫量	全收穫量
水稻	三〇反	三七・五〇%	二・五〇石	七五・〇〇石

どんな作付割合にするか

計	大豆		高粱		粟		玉米		小麦	
	反	石	反	石	反	石	反	石	反	石
一〇〇	三〇	一・〇七五	二〇	二・五〇〇	一五	一・二〇〇	一〇	一・二〇〇	一五	一・八〇〇
一〇〇・〇〇	三〇・〇〇	三三・二二五	二〇・〇〇	五〇・〇〇	一五・〇〇	一八・〇〇	一〇・〇〇	一二・〇〇	一五・〇〇	一八・〇〇
一〇〇・〇〇	一五・〇〇	一三・五〇	一五・〇〇	一三・〇〇	一〇・〇〇	一二・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一三・五〇
一〇〇・〇〇	一五・〇〇	一三・五〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇
一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五	一三・八七五

どんな收支の見込みか

以上營農法の標準が示された。しかし現在南滿洲地方に於いて邦農はその得意とする蔬菜栽培、または養蠶、果樹栽培をも取入れた多角的有畜農業をなす方が更に有利と考へられる。次に示すのは滿鐵農務課主案の營農標準である。

また移住者としてその資本を検討するに、いづれの地に移住するも土地資本がその主をなすことはいふまでもない。資本を大別すると、土地資本、建物資本、農具その他器具資本、動物資本となる。土地はその場所によつて地價が著しく異なる故これを別として、他の資本をみると、滿洲に於いては寒風甚だしきため、比較的住居に多額の金を要することは、移住者には不利なる條件であらう。更に比較的井水悪しく、井戸に金をかけるの必要が

ある。大略の割合は次の如くである。

住居 五九% 垣 三〇% 倉 五% 井戸 四% 家畜 二%
 滿鐵立案の營農標準の收支

一、水稻作を主體とする收支案 (其の一)

(A) 水稻作を主體とする經營に在りては左の如き作物及家畜を取入れたる多角的有畜農業を適當とする。

- 水稻 五町歩
 - 桑(又は果樹) 一町歩
 - 蔬菜類 一反歩
 - 普通作物(大豆、粟、高粱、玉米) 一町八反歩
 - 豚 蕃殖化豚四頭
 - 鶏 産卵鶏五五羽
- 右の外場所によりては養蠶を取入ること。

(B) 固定資本

(イ) 土地資本

種目	数量	單價	金額	備	要
土地購入費	八町歩	二五・〇〇	二、〇〇〇・〇〇		一反歩は宅地に充當する

どんな收支の見込みか

邦農移住者への指南

計	造田費	同	三・〇〇	一五〇・〇〇
	灌排水工事費		一〇・〇〇	五〇〇・〇〇
				二、六五〇・〇〇

(ロ) その他の固定資本

種目	数量	単価	金額	摘要
住宅	一棟		三〇〇・〇〇	支那式家屋
居室	一棟		二〇〇・〇〇	
倉庫兼苦力舎	一棟		一五〇・〇〇	
厩舎	一棟		五〇・〇〇	
豚舎	一棟		五〇・〇〇	
鶏舎	一棟		五〇・〇〇	
井戸	五戸共用	一〇〇・〇〇	二〇〇・〇〇	
土盤	一部兼共用	一・五〇	四八・〇〇	
種豚	蕃殖化四頭、種牡一頭五戸共用	一五・〇〇	六三・〇〇	
農具	一式		二〇〇・〇〇	
耕牛	一頭		五〇・〇〇	
計			一、一八一・〇〇	欄槽は共同設備

(C) 事業収入

イ 初年度収入

品名	段量	總收量	単価	金額	摘要
稻	二・八石	一四〇石	六・五〇	九一〇・〇〇	
稻	八〇貫	四、〇〇貫	〇三	一二〇・〇〇	
養蠶收入				五〇・〇〇	
蔬菜				四〇・〇〇	
在來作物	一・三石	二・三・四石	四・五〇	一〇五・三〇	
在來産物	一〇〇把	一八、〇〇〇把	百把七〇	一二・六〇	
哺育仔豚賣却		二二頭	二・五〇	五五・〇〇	〔生産仔豚四八頭内死亡四頭と見て残り四四頭の二分の一賣却 三〇羽六ヶ月〕
鶏		一、八〇〇箇	〇二	三六・〇〇	
鶏		三五羽	一五	五・二五	
尿糞類				四八・五五	
勞働收入		二〇〇人	三〇	六〇・〇〇	本人及家族自家勞働
副業及雜收入				三〇・〇〇	
計				一、四七二・七〇	

ロ 初年度支出
どんな收支の見込みか

種別	反當	總數量	單價	金額	摘要
種別	一斗	五石	七・〇〇	三五・〇〇	
灌排水費	二〇錢			一〇・〇〇	
桑苗	一〇〇本	一、〇〇〇本	〇・二	二〇・〇〇	
蔬菜種子	五圓			五・〇〇	
蔬菜藥劑費	五〇錢			五〇	
在來作物種子	二〇錢			三・六〇	
肥料				一三九・〇〇	反當り水稻、桑二圓、蔬菜一〇圓在來作物五〇錢
勞役賃		一、一七〇人	三〇	三五一・〇〇	反當り水田二〇人蔬菜三〇人桑在來作物五人
耕牛飼料			月、四・〇〇	四八・〇〇	牡〇・二頭牝四頭哺育豚四頭肥豚二頭
豚飼料				一五三・七五	初生雛時代一〇〇羽 産卵時代三〇羽
初生雛		一〇〇羽	二〇	二〇・〇〇	土地以外の固定投資金一、一八五圓五〇錢の割
鶏飼料				三三・六〇	
原價償却費				一一八・五五	
諸税公課	五〇錢			四〇・五〇	
生活費		大人二人 小人一人		三〇〇・〇〇	
雜費				三〇・〇〇	
計				一、三〇八・五〇	
差引益金				一六四・二〇	

ハ、二年度收入

品名	段當收量	總收量	單價	金額	摘要
稻	三石	一五〇石	六・五〇	九七五・〇〇	
養蠶收入				七〇・〇〇	
蔬菜				四〇・〇〇	
在來作物	一・三石	二三・四石	四・五〇	一〇五・三〇	
室稗類				一四〇・〇〇	
哺育仔豚賣却		二二頭	二・五〇	五五・〇〇	
肥豚賣却		二〇頭	一五・〇〇	三〇〇・〇〇	
鶏卵		三、三〇〇個	〇・二	六六・〇〇	前年生二五羽一羽六〇個 若雄三〇羽一羽六〇個
鶏糞		三五羽	一・五	五・二五	
鶏卵廢糞		二五羽	三〇	七・五〇	
尿糞類				六〇・八〇	
勞働收入		二〇〇人	三〇	六〇・〇〇	
副業及雜收入				三〇・〇〇	
計				一、九一四・八五	

どんな收支の見込みか

二 一年度支出

種別	反當	總數量	單價	金額	摘要
種別	一斗	五石	七・〇〇	三五・〇〇	
灌排水費	二〇錢			一〇・〇〇	
蔬菜種子	五圓			五・〇〇	
蔬菜藥劑費	五〇錢			五〇	
在來作物種子	二〇錢			三・六〇	
肥料				一三九・〇〇	
勞役費		一、一七五人	三〇	三五二・五〇	
耕牛飼料			月 四・〇〇	四八・〇〇	
馬飼料				二三五・〇五	〔牡〇・二頭、牝四頭、哺育 豚四頭、肥豚豚三頭〕
初生雛		一〇〇羽	二〇	二〇・〇〇	〔初生雛時代一〇〇羽、産 卵前年生二五羽、若雌 三〇羽〕
鶏飼料				四九・三五	
原價償却費				一八・五五	
諸税公課	五〇錢			四〇・五〇	
生活費				三〇〇・〇〇	
雜費				三〇・〇〇	
計				一、三八七・〇五	

一、南滿地方畑作を主體とする收支案

(A) 南滿地方畑作に在りては左の如き作物及家畜を取入れたる多角的有畜農業を適當とする。

烟草	又は果實、草花種子、忽布、薄荷、水稻、但し烟草 以外の作物のときは多少面積を増加するを要する	一町歩
棉花	奉天以北は棉花に適合するを以て適宜他の作物に代 ふること此の場合には多少面積を増加するを要する	二町歩
蔬菜		二反歩
落花生(奉天以北は大豆)		一町歩
陸稻		一町歩
在來作物(高粱、粟、玉蜀黍)		二町七反歩
ルースン		一町歩
桑		一町歩
豚(又は肥牛、養蠶、綿羊)		養殖化豚四頭
鶏		産卵鶏五五羽

差引益金

五二七・八〇

(B) 固定資本

どんな收支の見込みか

右の外場所によりては養蠶を取入れること。

邦農移住者への指南

(イ) 土地資本

土地購入費一〇町(一反歩は宅地に充當す)反當り三〇圓 三、〇〇〇圓

(ロ) その他の固定資本

種目	數量	單價	金額	摘要
住宅	一棟	一	三〇〇・〇〇	支那式家屋
竪室	一棟	一	二〇〇・〇〇	
乾燥室	一棟	一	二五〇・〇〇	
倉庫兼苦力舎	一棟	一	一五〇・〇〇	
厩舎	一棟	一	五〇・〇〇	
豚舎	一棟	一	五〇・〇〇	
鶏舎	一棟	一	五〇・〇〇	
井戸	一	一	二〇〇・〇〇	
土壁	一	一	五〇・〇〇	
耕馬	一頭	一	七〇・〇〇	
耕馬	一頭	一	六三・〇〇	
農具	一式	一	二〇〇・〇〇	
計			一、六三三・〇〇	

(C) 事業收支

イ 初年度収入

品名	段當收量	總收量	單價	金額	摘要
葉煙草	三六貫	三六〇貫	一・五〇	五四〇・〇〇	
同層葉聯乾	五貫	五〇貫	四〇	二〇〇・〇〇	
棉花	一六貫	三三〇貫	一・〇〇	三三〇・〇〇	
落花生	四〇圓	一	一	八〇・〇〇	
陸稻	三五〇斤	三五〇斤	百斤一・二〇	七七・〇〇	
陸稻	一・七石	一七石	五・〇〇	八五・〇〇	
在來作物	一・三石	三五・一石	四・五〇	一五七・九五	
莖稈類	一	一	一	三五・〇〇	
ルータン	二五〇疋	二、五〇疋	百疋一・五〇	三七・五〇	
養蠶收入	一	一	一	五〇・〇〇	
鴨仔豚賣却	一	一	一	五五・〇〇	生産仔豚四八頭内死亡四頭と見て残り四四頭の二分の一賣却 三〇羽六ヶ月
鴨卵	一	一、八〇箇	〇二	三六・〇〇	
鴨雄	一	三五羽	一五	五・二五	
尿糞類	一	一	一	四八・五五	

どんな收支の見込みか

種別	反當	總數量	單價	金額	摘要
棉花	一六貫	三二〇貫	一・〇〇	三二〇・〇〇	
蔬菜	四〇圓	一		八〇・〇〇	
落花生	三五〇斤	三、五〇〇斤	百斤二・二〇	七七・〇〇	
陸稻	一・七石	一七石	五・〇〇	八五・〇〇	
在來作物	一・三石	三五・一石	四・五〇	一五七・九五	
重稗類				三五・〇〇	
ア・イ・ナン	六〇〇疋	六、〇〇〇疋	百疋一・五〇	九〇・〇〇	
養蠶收入				七〇・〇〇	
哺育仔豚賣却		二二頭	二・五〇	五五・〇〇	
肥豚賣却		二〇頭	一五・〇〇	三〇〇・〇〇	
鶏卵		三、三〇〇個	〇・二	六六・〇〇	前年生二五羽一羽六〇ヶ 若雌三〇羽一羽六〇ヶ
鶏糞		三五羽	一五	五・二五	
尿糞類		二五羽	三〇	七・五〇	
勞働收入		二〇〇人	三〇	六〇・〇〇	
副業及雜收入				三〇・〇〇	
計				二、〇八七・五〇	

二 二年度支出

種別	反當	總數量	單價	金額	摘要
煙草種子	一反	一〇匁	一〇	一〇・〇〇	
苗床及乾燥材料	一三圓			一三〇・〇〇	
蔬菜種子	五圓			一〇・〇〇	
煙草及蔬菜藥劑費				二・〇〇	反當り煙草一〇錢、蔬菜五〇錢
棉花種子	一五斤	三〇〇斤	十斤一五	四・五〇	
落花生種子	三五斤	三五〇斤	百斤二・二〇	七・七〇	
陸稻種子	六升	六斗	五・〇〇	三〇・〇〇	
在來作物種子	二〇錢			五・四〇	
勞役賃				二九八・五〇	在來作物の内一町歩煙草の後作に付無施肥
肥料				二二三・五〇	
耕馬飼料			月五・〇〇	六〇・〇〇	牡〇・二頭牝四頭哺育豚四八頭肥豚前年生二〇頭當年生二二頭
豚飼料				二三五・〇五	初生離時代一〇〇羽産卵
初生雛		一〇〇羽	二〇	二〇・〇〇	前年生二五羽若雌三〇羽
鶏飼料				四九・三五	
原價償却費				一三七・五〇	
諸税公課				五〇・五〇	
生活費				三〇〇・〇〇	

どんな收支の見込みか

邦農移住者への指南

計	1	2,227.00
---	---	----------

1331

(C) 事業收支

イ 初年度収入

品名	段當收量	總收量	單價	金額	備要
大豆	一石	八〇石	五〇〇	四〇〇・〇〇	
玉蜀黍	一・〇石	六〇石	四〇〇	二四〇・〇〇	
粟	一・二石	七二石	三・五〇	二五二・〇〇	
小麦	一石	六〇石	七・〇〇	四二〇・〇〇	
燕麥	二・五石	二五石	二・五〇	六二・五〇	
ルイナン	二五〇疋	七五〇疋	百圓・二〇	九〇・〇〇	
苧稈類	1	1	1	一五〇・〇〇	
哺育豚賣却	1	一二頭	二・五〇	二七・五〇	生産仔豚二四頭中斃死見込二頭残り二二頭の二分の一の家畜の尿糞は自家用肥料に供するを以て収入を見込まぬ
鶏卵	六〇個	一、八〇〇個	〇・二	三六・〇〇	
鶏糞	1	三五羽	一・五	五二・五	
羊	六封度	一九二封度	四〇	七六・八〇	
計				一、八九〇・〇五	

ロ 初年度支出

種別	段當	總數量	單價	金額	備要
大豆種子	五升	四石	五〇〇	二〇〇・〇〇	
玉蜀黍種子	四升	二・四石	四〇〇	九六〇	
粟種子	六合	〇・三六石	三・五〇	一・二六	
小麦種子	六升	三・六石	七・〇〇	二五・二〇	
燕麥種子	七升	〇・七石	二・五〇	一・七五	
ルイナン種子	二・五疋	七五疋	一・〇〇	七五・〇〇	
勞役賃	五人	一、五〇〇人	五〇	七五〇・〇〇	
役畜飼料	1	五頭	三〇〇	一八〇・〇〇	
豚飼料	1	1	1	七〇・〇〇	
初生雛	1	一〇〇羽	二〇	二〇・〇〇	
鶏糞	1	1	1	二七・〇〇	
羊飼料	1	三二頭	四五	八六・四〇	
計				一、八九〇・〇五	

どんな收支の見込みか

〔夏期六ヶ月間を放牧す(飼料は冬期六ヶ月分)〕

1333

計		差引損失	雑費	原價償却費	生活費	公課	家畜管理勞役費
						二〇錢	
					大人 二人 小人 一人	四〇町歩	三五〇人
							四〇
							一四〇・〇〇
							八〇・〇〇
							三〇〇・〇〇
							二二一・七〇
							三〇・〇〇
							二、〇三七・九一
							(一)一四七・八六

ハ 二年度収入

品名	段當	總收量	單價	金額	摘要
大豆	一石	八〇石	五・〇〇	四〇〇・〇〇	
玉蜀黍	一・二石	七二石	四・〇〇	二八八・〇〇	
粟	一・二石	七二石	三・五〇	二五二・〇〇	
小麦	一石	六〇石	七・〇〇	四二〇・〇〇	
燕麥	二・五石	二五石	二・五〇	六二・五〇	
ルナン	六〇〇疋	一八、〇〇〇疋	百疋一・二〇	二一六・〇〇	
苧稗類				一五〇・〇〇	
哺育豚賣却				二七・五〇	
肥豚豚賣却				一五〇・〇〇	

ニ 二年度支出

種別	段當	總收量	單價	金額	摘要
鶏卵		三、三〇〇個	〇・二	六六・〇〇	
拔雄		三五羽	一・五	五二・五	
廢鷄		二五羽	四・〇	一〇〇・〇	
羊毛	七封度	一九二封度	四・〇	七六・八〇	次年度よりは本年生仔羊の毛二四頭分、六封一四評價格を増す
仔羊		二四頭	八・〇〇	一九二・〇〇	
勞働收入		二〇〇人	五・〇	一〇〇・〇〇	
副業及雜收入				三〇・〇〇	
計				二、四四六・〇五	

種別	段當	總收量	單價	金額	摘要
大豆種子	五升	四石	五・〇〇	二〇・〇〇	
玉蜀黍種子	四升	二・四石	四・〇〇	九・六〇	
粟種子	六合	〇・三六石	三・五〇	一・二六	
小麦種子	六升	三・六石	七・〇〇	二五・二〇	
燕麥種子	七升	〇・七石	二・五〇	一・七五	
勞役賃	五人	一、五〇〇人	五・〇	七五〇・〇〇	
役畜飼料		五頭	三・〇〇	一八〇・〇〇	

どんな收支の見込みか

邦農移住者への指南

計	養豚	養鶏	牛	猪	鶏
			一、〇〇〇把	一、〇〇〇把	一、〇〇〇把
			一、〇〇〇貫	一、〇〇〇貫	一、〇〇〇貫
			(百貫) 六〇	(百貫) 六〇	(百貫) 六〇
			五・〇〇	六・〇〇	四八・二〇
			一三七・〇〇	一三七・〇〇	一、三九一・二〇
			平均収入により算出		

口 初年度支出

種目	反當	總收量	單價	金額	摘要
種	一斗	六石	六・〇〇	三六・〇〇	
雜穀種子		六町	二・〇〇	一・五〇	
水田肥料		一町	五・〇〇	五・〇〇	
畑作肥料				二一〇・〇〇	
勞賃		一、〇五〇人	三〇	三一五・〇〇	水田反當二〇人畑五人宛とし總計一、二五〇人中二〇〇人は家族労働初年度は建築等の爲家族労働日数を減ずる
役者飼料管理				四八・二〇	飼料月三、六〇その他年五圓
鶏飼料管理費				七五・〇〇	平均支出に依る
豚飼料管理費				一〇三・五〇	麻袋その他
諸材料				五〇・〇〇	
農具維持費				一八・〇〇	一八〇圓の二割

種目	金額	摘要
建築物	三三・五〇	六七〇圓の五分
水利費	六〇・〇〇	
諸税公課	三五・〇〇	
生活費	四〇〇・〇〇	大人三人子供二人
計	一、三〇〇・七〇	
收支差引	九〇・五〇	

備考 投資、建物、農具の償却費は計上せぬ

ハ 二年度収入

品名	反當收量	總收量	單價	金額	摘要
稻	三石	一八〇石	六・〇〇	一、〇八〇・〇〇	
粟	八〇貫	四、八〇貫	十貫 三〇	一四四・〇〇	
雜穀	一三石	一三石	四・〇〇	五二・〇〇	
莖稈	一〇〇束	一、〇〇束	百束 六〇	六・〇〇	
牛糞	一、〇〇〇貫	一、〇〇〇貫	百斤 六〇	六・〇〇	
養鶏収入				一二七・三〇	
養豚収入				一三七・〇〇	
計				一、五五二・三〇	

どんな收支の見込みか

二 二年度支出

種目	反當	總數量	單價	金額	摘要
種穀	一斗	六石	六・〇〇	三六・〇〇	
雜穀種子				一・五〇	
水田肥料		六町	二・五〇	一五〇・〇〇	
畑作肥料		一町	五〇	五〇・〇〇	
勞賃		九五〇人	三〇	二八五・〇〇	所要一、二五〇人中家族勞働三〇〇人とす
役畜飼料管理				四八・二〇	
鶏飼料管理				一一四・〇〇	
豚飼料管理				一〇三・五〇	
諸材料				三五・〇〇	
農具維持費				一八・〇〇	一八〇圓の割
建物維持費				三三・五〇	六七〇圓の五分
水利費			一・〇〇	六〇・〇〇	
諸税公課		七町	五〇	三五・〇〇	
生活費				四〇〇・〇〇	
計				一、三三四・七〇	
收支差引				二二七・六〇	

ホ 三年度收入

品名	反當收量	總收量	單價	金額	摘要
稻穀	三・二石	一九二石	六・〇〇	一、一五二・〇〇	
粟	八〇貫	四、八〇〇貫	十貫三〇	一四四・〇〇	
雜穀	一・三石	一三石	四・〇〇	五二・〇〇	
苧稈	一〇〇束	一・〇〇〇束	百束五〇	五〇・〇〇	
牛糞	一、〇〇〇貫	一、〇〇〇貫	百貫六〇	六〇・〇〇	
養鷄收入				一五四・四五	
養豚收入				一三七・〇〇	
計				一、六五〇・四五	

ハ 三年度支出

種目	反當	總數量	單價	金額	摘要
種穀	一斗	六石	六・〇〇	三六・〇〇	
雜穀種子				一・五〇	
水田肥料		六町	三・〇〇	一八〇・〇〇	
畑作肥料		一町	五〇	五〇・〇〇	
勞賃		九五〇人	三〇	二八五・〇〇	

どんな收支の見込みか

邦農移住者への指南	
役畜飼料管理費	四八・二〇
鶏飼料管理費	一三一・〇〇
豚飼料管理費	一〇三・五〇
諸材料	三五・〇〇
農具維持費	一八・〇〇
建物維持費	三三・五〇
水利費	六〇・〇〇
諸税公課	三五・〇〇
生活費	四四〇・〇〇
計	一、四一一・七〇
收支差引	二三八・七五

C 手持資金

前項説明の通りの設備をなして又其の事業が豫想の如く進むべきものと前提に於て移民の要する手持資金及地代並借入金の返済豫想を見ると次の如くである。

算出基礎

建物費	二六八・〇〇	建築費六七〇圓の五分の二
農具費	一八〇・〇〇	

耕牛費	種豚費	事業經營及生活費	波航費	計
五〇・〇〇	三三・〇〇	一、一〇〇・〇〇		一、六三一・〇〇
				一、二〇〇・〇〇
				四三一・〇〇

初年度所要經費の約八〇%
約三〇〇圓を要する見込なり全額補助

除隊兵其の他特別の事情あるものに對しては全額貸付けを受くることがある。

この計算に従ひ普通移民は金四〇〇圓以上の資金を有するものに限り移民たる資格を與ふることとするも家族内に若し被扶養者を含むる時は手持資金は金二〇〇圓迄減することを得る。

D

土地代並借入金返済表

移民一五箇年間の收支豫想

年次	収入	支出	差引	土地代元利拂込	借入金元利拂込	再差引	残高累計
一	一、三九一・二〇	一、三〇〇・七〇	九〇・五〇			九〇・五〇	九〇・五〇
二	一、五五二・三〇	一、三三四・七〇	二一七・六〇	七〇・八〇	一一三・五三	四三・二七	一三三・七七
三	一、六五〇・四五	一、四二一・七〇	二三八・七五	七〇・八〇	一一三・五二	五四・四三	一八八・二〇
四			二三八・七五	七〇・八〇	一一三・五二	五四・四三	二四二・六三

どんな收支の見込みか

種目	数量	金額	摘要
一五	棟	二〇〇・〇〇	支那式家屋
一四	棟	三〇〇・〇〇	
一三	棟	二〇〇・〇〇	
一二	棟	二〇〇・〇〇	
一一	棟	二〇〇・〇〇	
一〇	棟	二〇〇・〇〇	
九	棟	二〇〇・〇〇	
八	棟	二〇〇・〇〇	
七	棟	二〇〇・〇〇	
六	棟	二〇〇・〇〇	
五	棟	二〇〇・〇〇	
計		二、二二三・〇〇	

一、北滿に於ける畑作中心經營案

A 固定資本

種目	数量	金額	摘要
住家	一棟	三〇〇・〇〇	支那式家屋
倉庫兼苦力舎	一棟	二〇〇・〇〇	

B 事業の收支

イ、初年度收入

計	農具	種豚	種羊	牛	馬	耕馬	土壁	井戸	豚舎	鶏舎	牛舎	厩舎
	二頭二分		二頭	一頭	四頭		一	一	一	一	一	一
	三五〇・〇〇		三三三・〇〇	三九〇・〇〇	一五〇・〇〇	二八〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	二二〇・〇〇	八〇・〇〇
	〔牝一八〇頭—一〇圓〕 〔牡一〇頭—一五圓〕 共五戸											
	二、二二三・〇〇											

品名	反當收量	總收量	單價	金額	摘要
大豆	〇・九石	九〇石	四圓八角	四三二・〇〇	一〇町歩

どんな收支の見込みか

計	五 蜀 黍	粟	燕 麥	小 麥	ル ー サ ン	莖 稈	養 鷄 收 入	養 豚 收 入	乳 牛 收 入	綿 羊 收 入
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	一・〇石	一・〇石	二・五石	〇・八石	二〇〇疋	六、〇〇〇疋				
	七〇石	七〇石	二五石	四〇石	百疋一・二〇					
	三・五〇	三・二〇	二・〇〇	六・五〇						
	二四五・〇〇	二二四・〇〇	五〇・〇〇	二六〇・〇〇	七二・〇〇	一四八・〇〇	四八・二〇	一三七・〇〇	一五〇・〇〇	六七・八四
	七町步	七町步	一町步	五町步	三町步					
										一、八三四・〇四

備考 五〇町步中一七町步は放牧地として餘裕の生ずるに従ひ優良放牧地とする。

ロ、初年度支出

種 目	反 當	總 數 量	單 價	金 額	摘 要
大豆種子	五升	五石	四・八〇	二四・〇〇	
玉蜀黍種子	四升	二・八石	三・五〇	九・八〇	
粟種子	六合	〇・四二石	三・二〇	一・三四	

種 目	反 當	總 數 量	單 價	金 額	摘 要
燕 麥	七升	〇・七石	二・〇〇	一・四〇	
小 麥 種 子	六升	三・〇石	六・五〇	一九・五〇	
ル ー サ ン	二・五疋	七五疋	一・〇〇	七五・〇〇	大豆、小麥、ルーサン反當五人高 粟、粟陸稻六人總計一、八〇〇人 中家族勞働二〇〇人とす但當地 に於ける反當人夫は三人見當なる も單價高き爲結局相似たるも ある。
勞 賃	1	一、六〇〇人	・三〇	四八〇・〇〇	一頭年額三〇圓
役畜飼料管理	1	1	1	一五〇・〇〇	
鶏飼料管理	1	1	1	七五・〇〇	
豚飼料管理	1	1	1	一〇三・五〇	
牛飼料管理	1	1	1	九六・三〇	
羊飼料管理	1	1	1	一〇三・二〇	
諸材料	1	三〇町	三〇	九〇・〇〇	三五〇圓の一割
農具維持費	1	1	1	三五・〇〇	一、〇〇〇圓の五分
建物維持費	1	1	1	五〇・〇〇	
諸税公課	1	五〇町步	二五	一二五・〇〇	
生活費	1	1	1	四〇〇・〇〇	
計	1	1	1	一、八三九・〇四	
收支差引	1	1	1	五・〇〇	

どんな收支の見込みか

ハ 一年度収入

品名	反當收量	總收量	單價	金額	摘要
普通作物收入				一、三五九・〇〇	
ルイサン	六〇〇疋	一八、〇〇〇疋	百疋一・二〇	二一六・〇〇	
養鶏收入				一二七・三〇	
養豚收入				一三七・〇〇	
乳牛收入				一五〇・〇〇	
綿羊收入				六一・七二	
計				二、〇五一・〇二	

ニ 一年度支出

種目	反當	總收量	單價	金額	摘要
各種種子				五六・〇四	
勞賃		一、五〇〇人	三〇	四五〇・〇〇	一、八〇〇人中家族勞働三〇〇人
役畜飼料管理				一五〇・〇〇	
鶏飼料管理				一一四・〇〇	
豚飼料管理				一〇三・五〇	
牛飼料管理				九六・三〇	

ホ 三年度収入

品名	反當收量	總收量	單價	金額	摘要
普通作物收入				一、二二一・二〇	
ルイサン	八〇〇疋	二四、〇〇〇疋	百疋一・二〇	三〇・〇〇	
養鶏收入				三五・〇〇	
養豚收入				五〇・〇〇	
乳牛收入				一二五・〇〇	
綿羊收入				四〇〇・〇〇	
計				一、七三一・〇四	
收支差引				三一九・九八	

品名	反當收量	總收量	單價	金額	摘要
普通作物收入				一、三五九・〇〇	
ルイサン	八〇〇疋	二四、〇〇〇疋	百疋一・二〇	二八八・〇〇	
養鶏收入				一五四・四五	
養豚收入				一三七・〇〇	
乳牛收入				一五〇・〇〇	
綿羊收入				二一六・四四	
計				二、三〇四・八九	

どんな收支の見込みか

へ、三年度支出

種目	反當	總收量	單價	金額	摘要
各種種子				五六・〇四	
勞賃		一、五〇〇人	三〇	四五〇・〇〇	
役畜飼料管理				一五〇・〇〇	
鶏飼料管理				一三一・〇〇	
豚飼料管理				一〇三・五〇	
牛飼料管理				九六・三〇	
羊飼料管理				一二七・二〇	
諸材料				三〇・〇〇	
農具維持費				三五・〇〇	
建物維持費				五〇・〇〇	
諸税公課				一二五・〇〇	
生活費				四四〇・〇〇	
計				一、七九四・〇四	
收支差引				五一〇・八五	

綿羊は三年度に比し四年度は三、二〇圓五年度以降二、八八〇圓の利益を増すものとする。

C 手持資金

算出基礎

種目	金額	備考
建築費	四〇〇・〇〇	
農具費	三五〇・〇〇	
耕馬費	三〇〇・〇〇	
牛飼料	一五〇・〇〇	
羊飼料	三九〇・〇〇	
豚飼料	三三三・〇〇	
事業經營及生活費	一、五〇〇・〇〇	初年經營費の約八〇%
初年度缺損	五・〇〇	
計	三、一二八・〇〇	
經營資金借入	二、七〇〇・〇〇	
差引所要手持金	四二八・〇〇	

建築費一、〇〇〇圓の五分の二

D 土地代並借入金返済表

移民十五箇年間の收支豫想

年次	収入	支出	差引	土地代元利拂込	借入金元利拂込	再差引	残高累計
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							

どんな收支の見込みか

一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五
一、八三四・〇四	二、〇五一・〇二	二、三〇四・八九												
一、八三九・〇四	一、七三一・〇四	一、七九四・〇四												
五・〇〇	三一九・九八	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五	五一〇・八五
	三七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇	一一七・五〇
	一〇八・〇〇	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七	二七〇・二七
三・〇〇	一七四・四八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八	一一三・〇八
借入金を以て填補	一六九・四八	二九二・五六	四一五・六四	五三八・七二	六六一・八〇	七八四・八八	九〇七・九六	一〇三一・〇四	一一五四・一二	一二七七・二〇	一四〇〇・二八	一五二三・三六	一六四六・四四	一七六九・五二

拓務省第一次自衛集團移民の營農標準

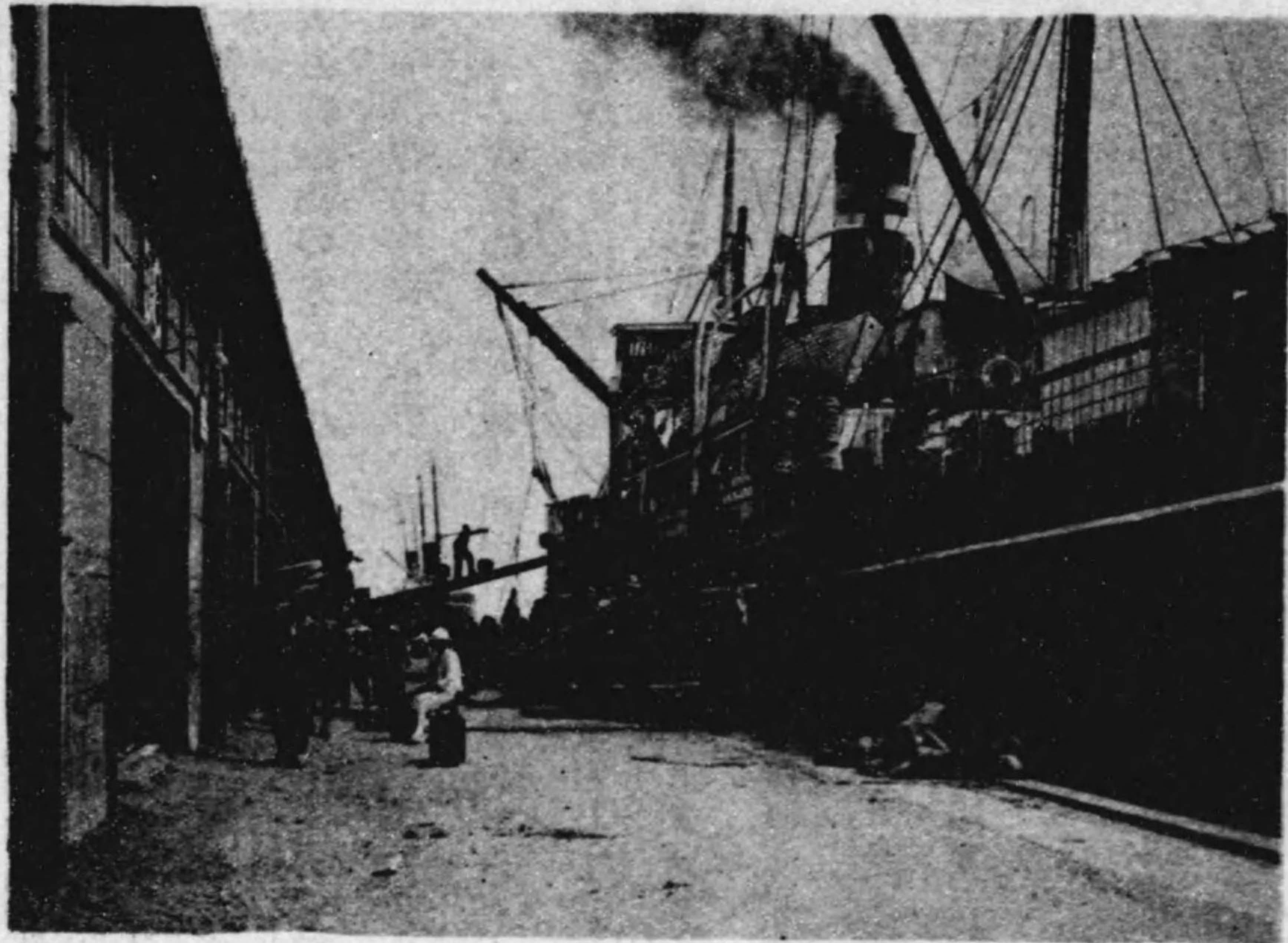
滿洲國成立後拓務省は率先して自衛上在郷軍人から移民を募集して、その五百餘名を一團として毎年自衛移民を送つてゐる。特に第一次に移住したものは、吉林省北部地方の中心地たる依蘭地方には集團せる農耕適地が二萬町歩もあるので、この地方を將來邦人移住地經營の一大中心地とする目的で計畫されたもので、移住地は松花江の右岸に沿ひ、中央には牡丹江が流れ一帯の沃野をなしてゐる。

地は北緯四六度から四七度の間にある故、樺太の眞岡に相當する。日照並びに氣温の狀況は農作物の生長に適當し作物の生長は極めて旺盛である。

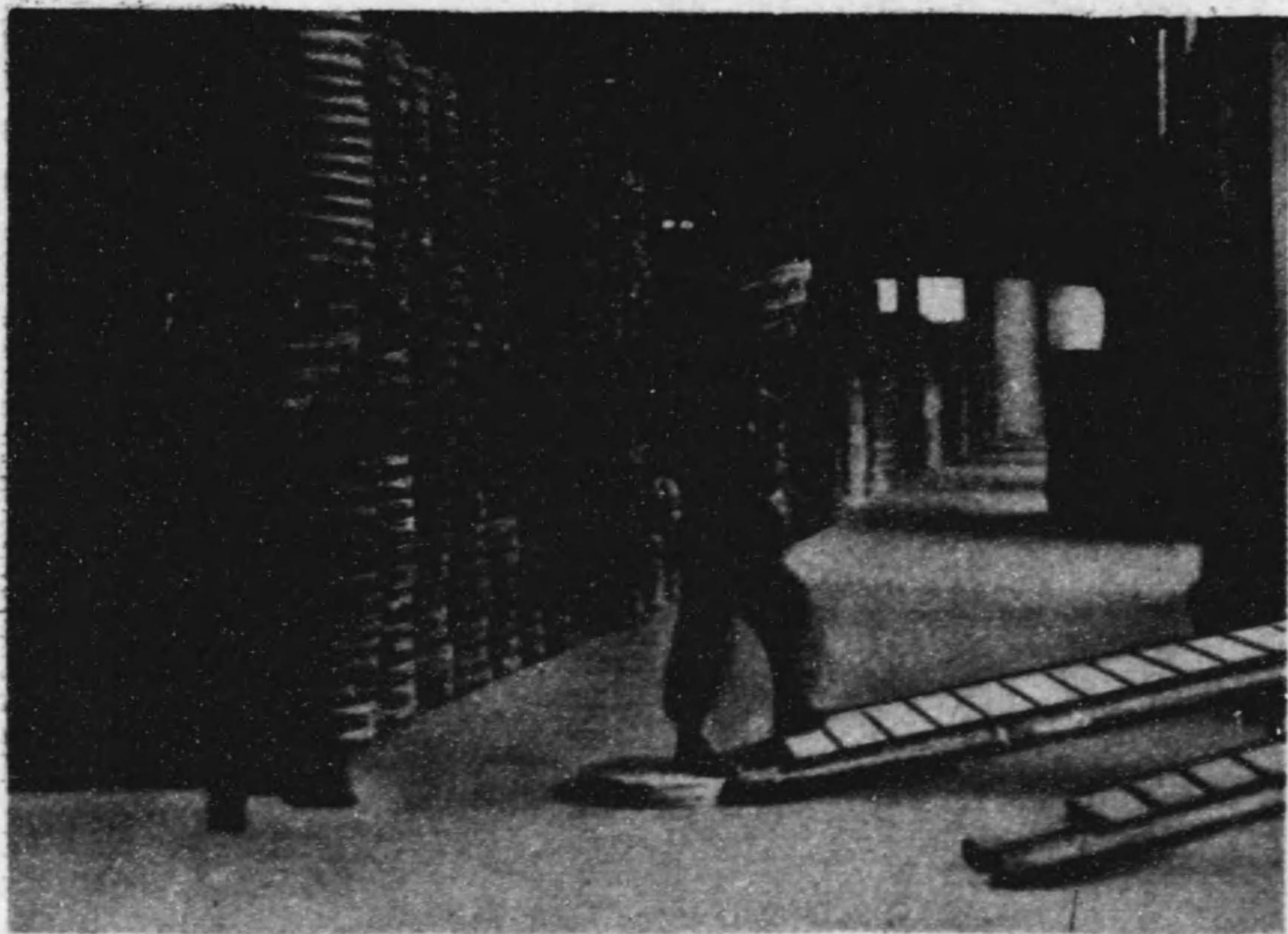
しかも同地方一帯は土地の利用程度いまだ進まず現在利用せられてゐる可耕地は、農耕適地の二%にすぎぬ有様で到るところ開墾せられ得る山林原野の大集團地が散在する有望地である。たゞ従來は經濟的に未だ開發せられてゐぬために、僅かに優良なる大豆、小麥等を松花江の水運を利用して搬出してゐたにすぎぬが、今後交通關係も整備せらるれば、經濟的にも必らず面目一變するものと期待されてゐる。

移住者は最初單獨に移住し、移住二ヶ年後漸次に家族を招致せしむる計畫で、移住地は約一二五戸を一集團として周圍に警備上必要な共同圍壁を設け、一集團の中には小學校、共同作業場等の移住地に必要な諸般の施設がほどこされることになつてゐる。

營農の方式は豫定の二〇・〇〇〇町歩の土地五・〇〇〇町歩は、將來醫療費、教育費に支辨する財源にあてる



入収るな要主る入に庫國の國洲滿,は出輸の粕豆,豆大 み 積 船
。るあでつ一の



枚五枚四に實は力苦 るあで變大もにふ擔個二が男の大 搬運の粕豆
。ぶ運に易容と



のもの形圓,るあてれま團が體全落集,體全村に壁土 ひ 裝の村農
。るあで倉藏貯物穀は



てれさ拓開は線沿鐵滿で勢るな常非,に共と建發の鐵滿 出搬の豆大
。るあ

ため保留し、個々の移住者には一戸當り一五町歩を割當てる計畫になつてゐる。

右一五町歩の割當地の内五町歩は薪炭備林並びに放牧地とし、耕作地は一戸當り一〇町歩とする見込みである。耕作すべき作物は、次の如く、自家資料として馬鈴薯、ライ麥、燕麥、黍、粟、玉蜀黍を利用し、一方この地方の特産物の大豆、小麥は市場に販賣する豫定である。

- 一、普通作物 小麥、ライ麥、燕麥、大豆、小豆、綠豆、玉蜀黍、黍、粟、蕎麥、馬鈴薯
- 一、特殊作物 大麻、亞麻、甜菜、

耕作は約三〇戸乃至四〇戸を一單位として共同耕作を行ふ計畫が樹てられ、役畜は一戸當一頭の牛または馬を用ひる外、一單位に數臺の機械農具（トラクター及び附屬耕耘機）を設備して勞力の浪費を防ぎ、勞力の不足を補ふやうにされてゐる故、家族呼寄せ後は先づ勞力は自給し得られる見込みである。

また飼料を自給し得る範囲内に綿羊、牛等の家畜を飼養して、經營を合理化されんとしてゐる。

なほ、冬期農閑期には山林伐採、製炭作業、用畜の飼養、綠豆を原料とする粉條子の製造等穀物調査並びに市場搬出に餘剩勞力を消化し得る見込みである。

よつて従來稍々もすれば畑作主體の營農は邦人には經濟的に困難とされてゐるが、左の諸點で充分に成功するものと信ぜられる。

- 一、土地肥沃で金肥を要しない。
- 一、役畜、機械農具を使用し、共同勞力によつて勞力が合理化され、殆んど勞銀の支拂ひを要しない。
- 一、冬期の副業があり、餘剩勞力がない。
- 一、土地獲得の資金が要らない。

右の諸點を、前項營農標準の資本、支出の部から控除するならば、その收支はほとゝ推定されやう。

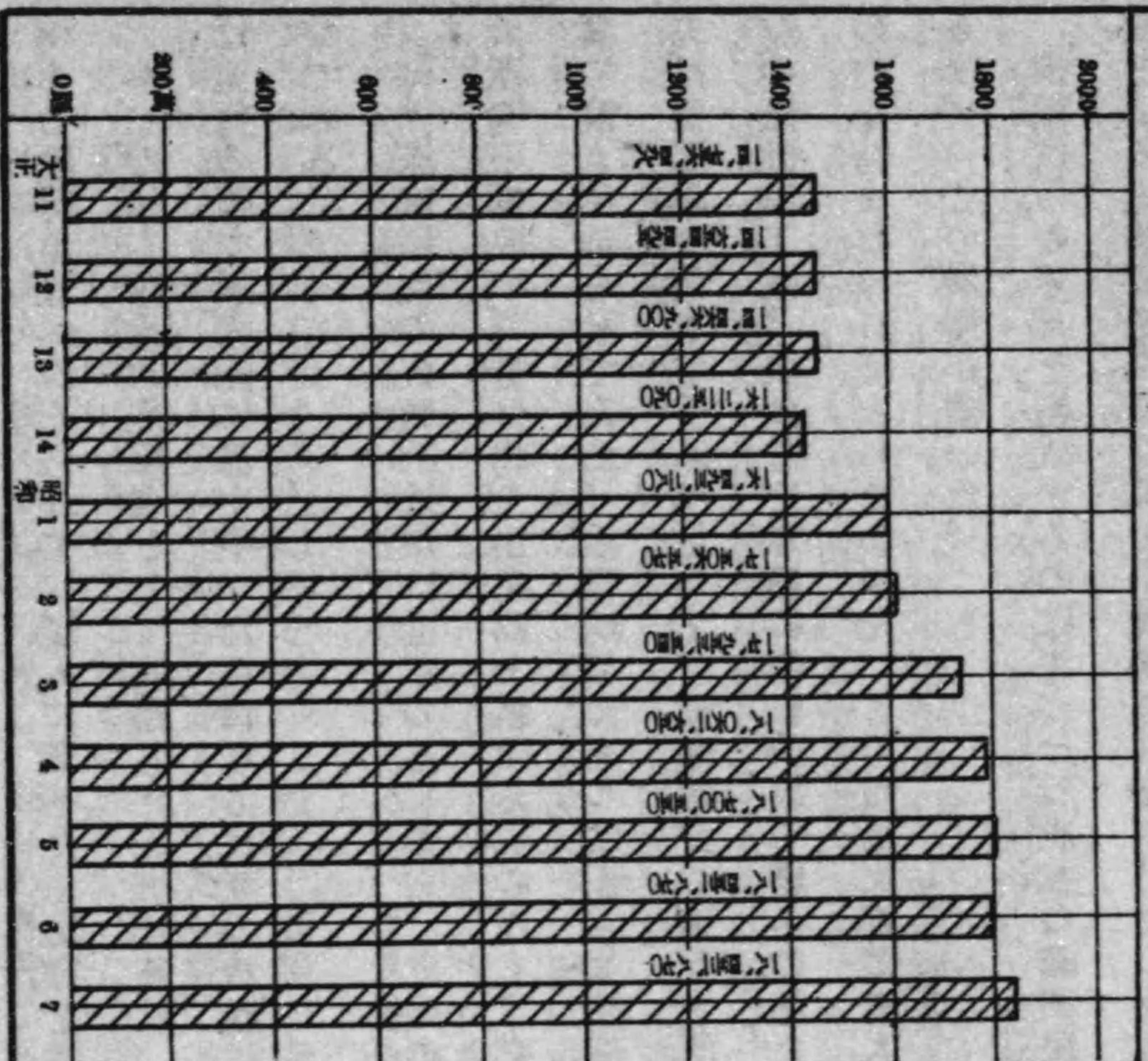
滿洲農村のすがた

農民は大部分漢人

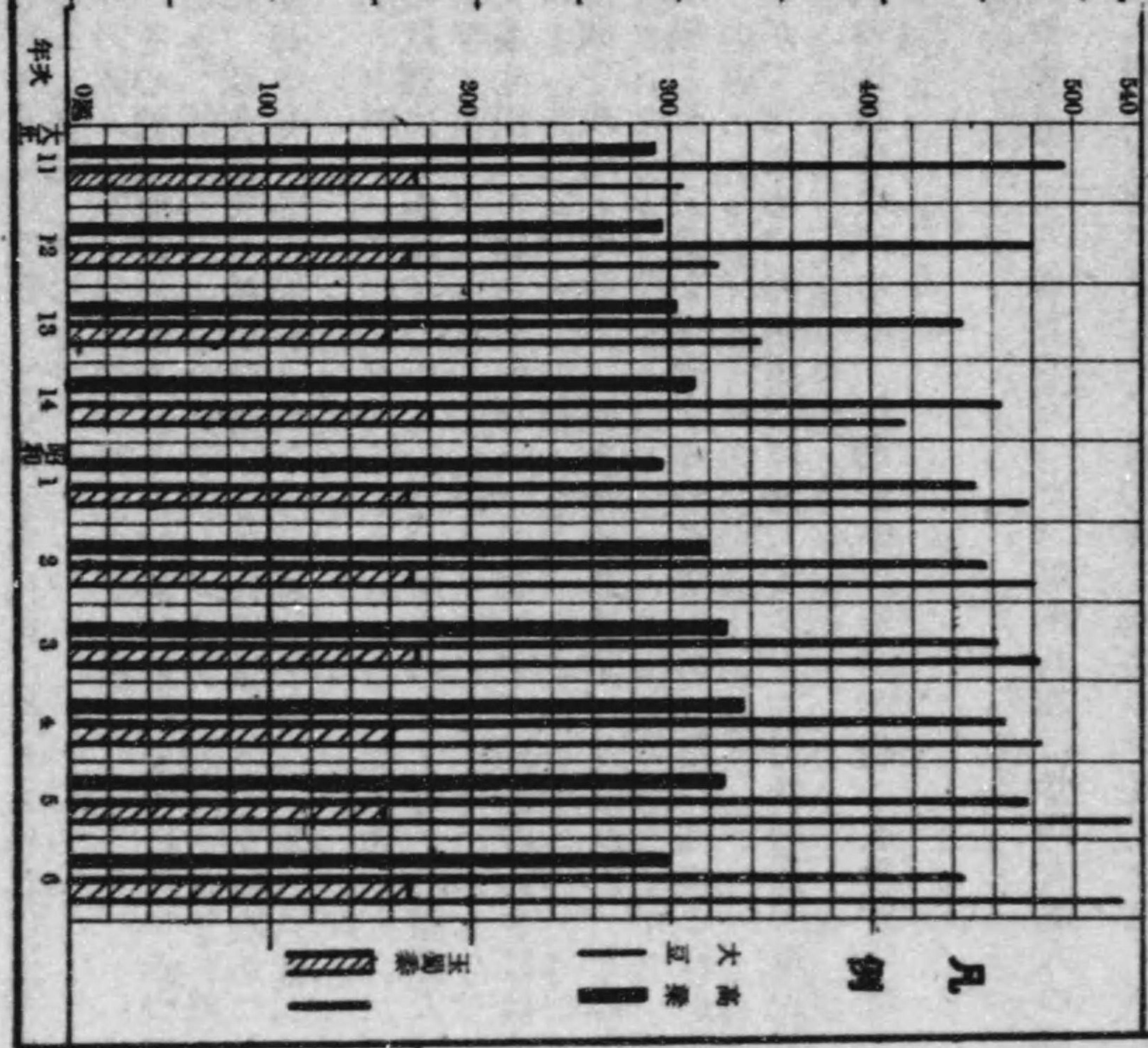
滿洲の農民の歴史は宛ら民族闘争の跡であり、葛藤の繪卷である。滿洲民族の研究家稻葉岩吉氏は、「滿洲民族に關する兩方面の觀察」と題して東亞經濟研究にこの沿革を次の如く發表せられてゐる。

滿蒙の農業史上もつとも重要な役割を演ぜるものは、土着の滿人でなく、南方の漢人であつた。由來滿人は耕種農に對する技能を缺き、専ら狩獵、人蔘の採掘等自然物の原始的採收をこゝせる民族であるのに反して、漢人は昔から耕種農に對する技術をもち、滿人の顧みざる荒地をその腕によつて營々として開耕し、荒野も一歩一歩開發されて恰も碁盤目を詰めるが如く現況の村落を形成した。更にその尖銳は滿洲より奥深く東部蒙古にまで侵入した。そこには羊と牛とを無二の財産として何の屈託もなく遊牧の生活を送つてゐた蒙古民族があつた。彼等は耕種農を生命とせる漢人とはいふまでもなく、農業の組織を異にし、こゝに再び葛藤を生じ、民族の相違、文化の程度の相違は、魯鈍の蒙古人は巧みに弄玩されて、屯界と稱する狹窄なる地域に閉鎖され、或ひは黒地と

滿蒙農産物・穀類總收穫高



滿蒙農産物分類收穫高比較圖



農民は大部分漢人

稱する脱税地さへつくられて、漢人に確乎たる地盤を築かしめてしまった。

かくの如く政治的征服者として君臨した滿洲民族は、その被征服者の漢人にその經濟的地盤を奪はれ、かつては元朝の頃支那大陸に覇を唱へた精悍なる民族の後裔は、祖先傳來の沃野牧地を彼等に提供せざるを得なかつたのである。

仰々滿洲民族の經濟的地位は進關の當初から、危殆の状態におかれてゐたもので、歴史の示すところ滿洲人は天産物の採收の外勞作物や工藝品と稱するものなく、交易も漢人と物々交換をなすの有様で、五穀の如きは被征服者の漢人に作らせてゐた。後世清朝になつてからも諸部落を攻略して次第に覇を稱するに至つたけれど、その勢力は尙微弱で天下を争ふに足らず、漢蒙軍民の歸順を奨励しその大業を完成するの必要があつた。殊にこれが股肱の滿洲旗丁は、概ね身を軍籍に委ね耕收を顧るの違なかつたため、糧餉軍需に關して主として新附民の漢民族の力を恃まなければならなかつた。このために歸順漢人の保護をなすなど、順治年間に至る清朝の基礎安固になるまで、この状態が續いた。

清朝はその軍兵を編成するのに先づその股肱の滿洲民族を以つて八旗をつくつた。滿洲八旗は當時女真人の傳統とする民族制度によつてよく統制されたが、その反面に經濟思想に乏しく、漢民族の軍兵の素質こそ缺くが、經濟民としての地位は、女真滿人の到底追隨するところではなかつた。彼等は傳統的民族經濟にたてこもり、性來

破壊性をもつてゐたが、その生活に少しの弾力性もなかつた。滿洲民族が今日の悲惨の状況につき落ちたのはここに原因するものである。

蒙古民族に至つては更に封建的社會組織の下に、單純なる生活を營んでゐたため、清朝の謂はゆる蒙古懷柔策にあやまたれ、祖先傳來の沃野を漢民族のために蠶食されてしまつた。

顧みるに滿洲は西紀前五〇〇年頃肅慎國を建てたのを初めとして數次王朝の交替興廢はあつたが、漢民族に犯さるゝことはなかつた。愛親覺羅氏のおきるに至つて滿洲の歴史は中斷し、滿洲は無人の境となつた。これは清朝が北京に遷都後、その發祥地方の住民たる旗人に滿洲八旗を組織招致せしめたため滿洲は空虚になつてしまつた。ために漢人のこの地に侵入するを虞れて、謂はゆる「滿洲封禁」の政策を布くに至つたのである。その後この政策は嘉慶四年——今から一三五・六年前——に當時八旗の戸口殖えて定祿のみで家計を支へられなくなり、長春附近に農業者を招んで開墾せしめてゐる。また乾隆の中頃（一七〇九年）——今から二二四年前——には山東直隸の大饑饉のため漢人は禁を破つて侵入し開墾の利益の多いのを發見したので長春府を開いて滿洲八旗にだけ開墾せしめた。これが封禁地の開墾を許した起源である。然るに今から八十年前に長髮賊の亂があつて清朝はこれを鎮定するために滿洲を省る暇がなかつた。この間に漢人は勝手に滿洲に侵入してゐる。

かくの如く漢人の侵略するもの多く、彼等の優秀なる耕種をもつて着々と農耕地は出來、最早大勢は阻止する

農民は大部分漢人



墓墳の人古蒙、は土堆の形圓の前手のそ、野原るた漠廣 野原古蒙
。るあて



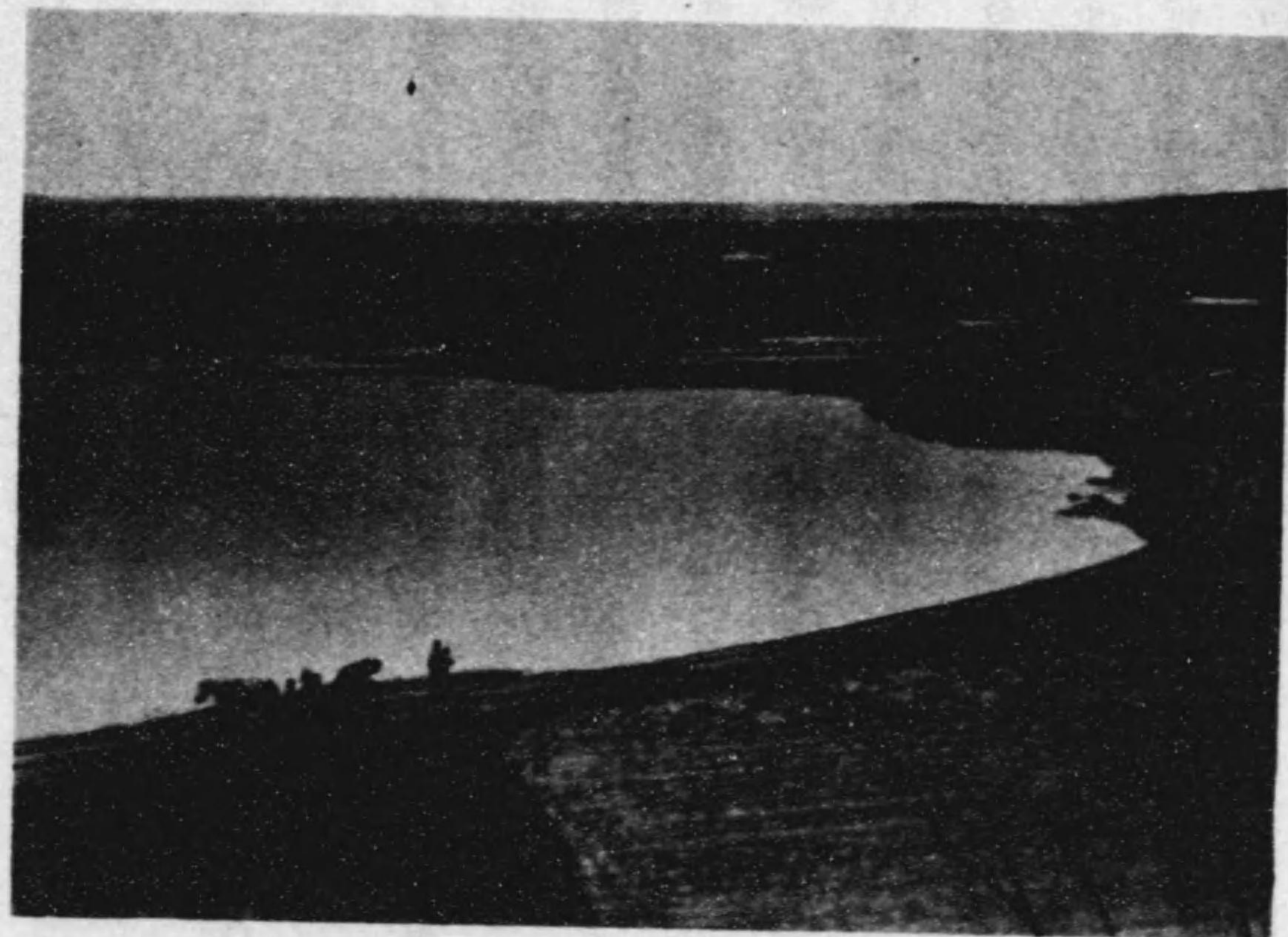
くよを地の礫礫てつ到に地僻間山は人鮮 地耕の人鮮の流上河林海
。るむてし墾開

一六三

滿洲農村のすがた



のるむてつちまが羊山に頭先の群一のそ、で牧放の羊 牧放の屯家鄭
。るけ受見を



うくよ、が窟るれはいとし如がきな道てつあ道は洲滿 區農の河子贊
。るれはどか

一六二

ことが出来ず同治六年（今から六十八年前）政府は方針を一變して封禁地を開放し、地方官を存置して漢人も開墾を許すに至つた。こゝに於いて旗民交産制即ち漢民族滿洲民族の自由交産を認めるに至り、漢人は土地の所有權を得られて一層の移住者を見るに至つた。

後露國が一八九七年東支鐵道の工事を始めるに至つて、勞力の需要大いに起り、勞働者に對する食物供給の爲開墾事業に従事するものを生じ、更に一九〇三年鐵道竣工後はその交通便利のため大いに北滿に移住するものが増加した。更に日露戰爭の後日本が滿鐵を經營し、その開發につとめると益々支那本部の漢人に移住心を刺戟し今日の盛況を見るに至つた。

特に近年は支那本部の禍亂、北支那の大旱魃、南支那の大洪水等相亞ぎ、窮民益々増大して移住するもの多く、更に張家二代の移民招致策は更にこれに拍車をかくる有様であつた。

農村の生長を語る

滿洲の農村の發達は近世に屬し、農村史と同じく清朝以後にやうやくその形をなすに至つたものである。既に記述した如く、滿洲農地の開墾には、官兵の兵餉を得んがために開發された處がある。農村の中に先住者の後を追ふて來り次第にその地域を増して農村を形づくつてゐる處がある。また政府の招民令による團體移住をなした

ところもあるが、これは極めて稀で團體移住地はそのまゝ一箇の農村として孤立して存在してゐる。しかし農村の主なるものは以上二例の外、主として流民の單獨移住したものが、年を経るに従つて家族も殖え、移住家族を中心に次第に發達したものが多し。現存滿洲の村名に魏家屯、蘇家屯、李家屯、孔家窩柵等人の姓名のまゝその屯の頭に附してゐるのはこの間の事情を物語るものである。また村名に孤家子、八果樹、三塊石等簡單なる地物の名のみえるのは全く同じ理由で、わが國ならば二本松の家、一本杉の家など人の名をいはずに村人に言ひ傳へられたものをそのまゝ村名としたものである。更に東部內蒙古に至ると全順號、廣泰號等漢人の掻子、燒鍋の屋號をそのまゝ附してゐる。

かくの如く滿洲の農村は廣漠たる草原に、その初めは茅屋點々と散在し、縷々たる炊煙をあげて形づくられたものなる故に、荒寥たる狀況を呈してゐた。しかしその開墾は年々と開發されて南滿の如きはいまはいつしか、屯堡相呼應するの有様である。しかしその發達の課程にあるものもあり、農村全體より見るならば數百戸の戸口を有するもの、または僅かに數戸の戸口しかないもの大小區々として一定しない。

またその發達の狀況がかくの如きため、農村は總て密居制になつており、匪賊の警備に備へるため自衛上部落を圍んで土壁など障壁を設けられてゐる。

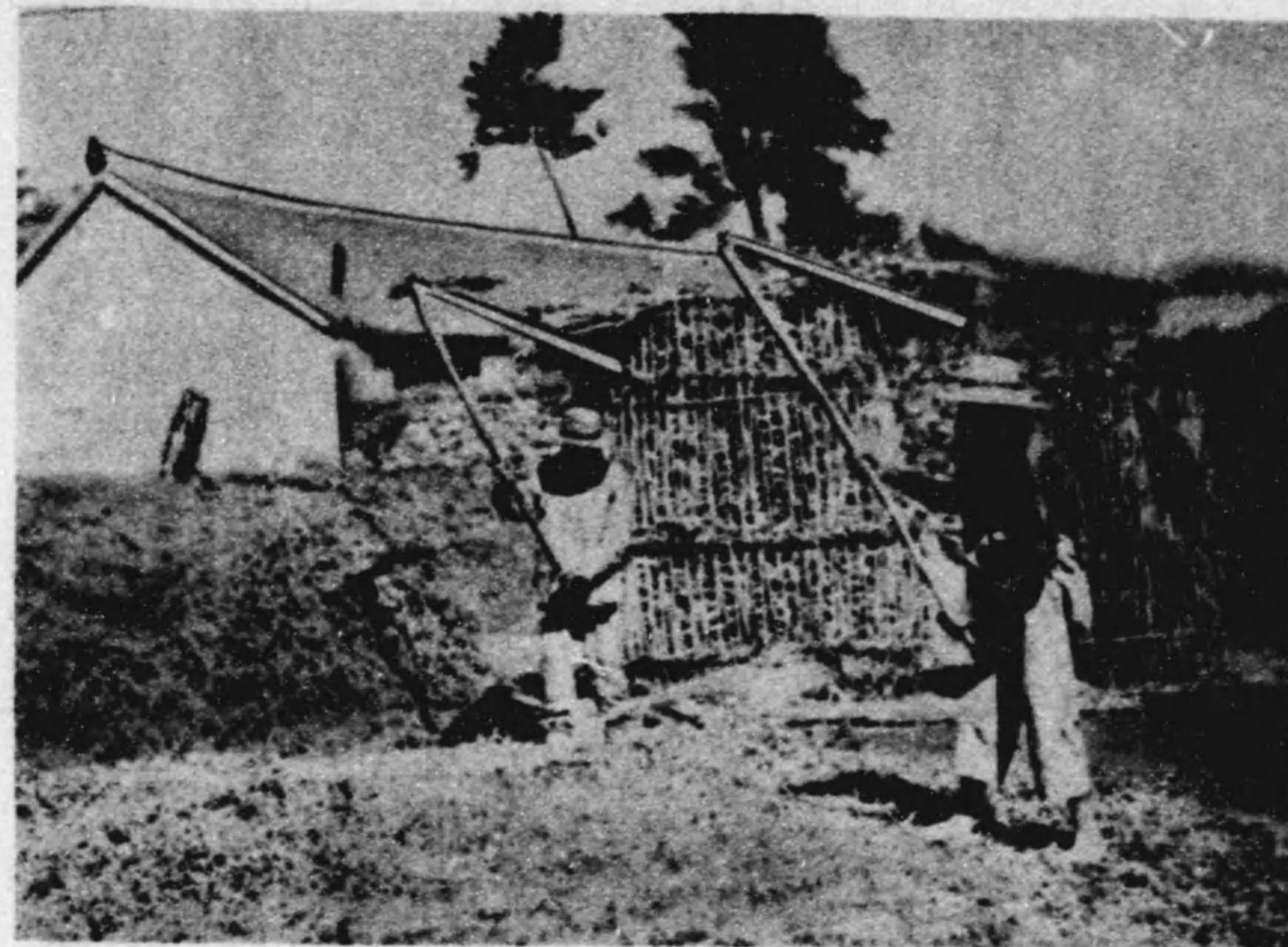
更に農村の發達をその外貌から見るのみならず、内部に入つて検討してみるに、その土地の所有權が、農村自



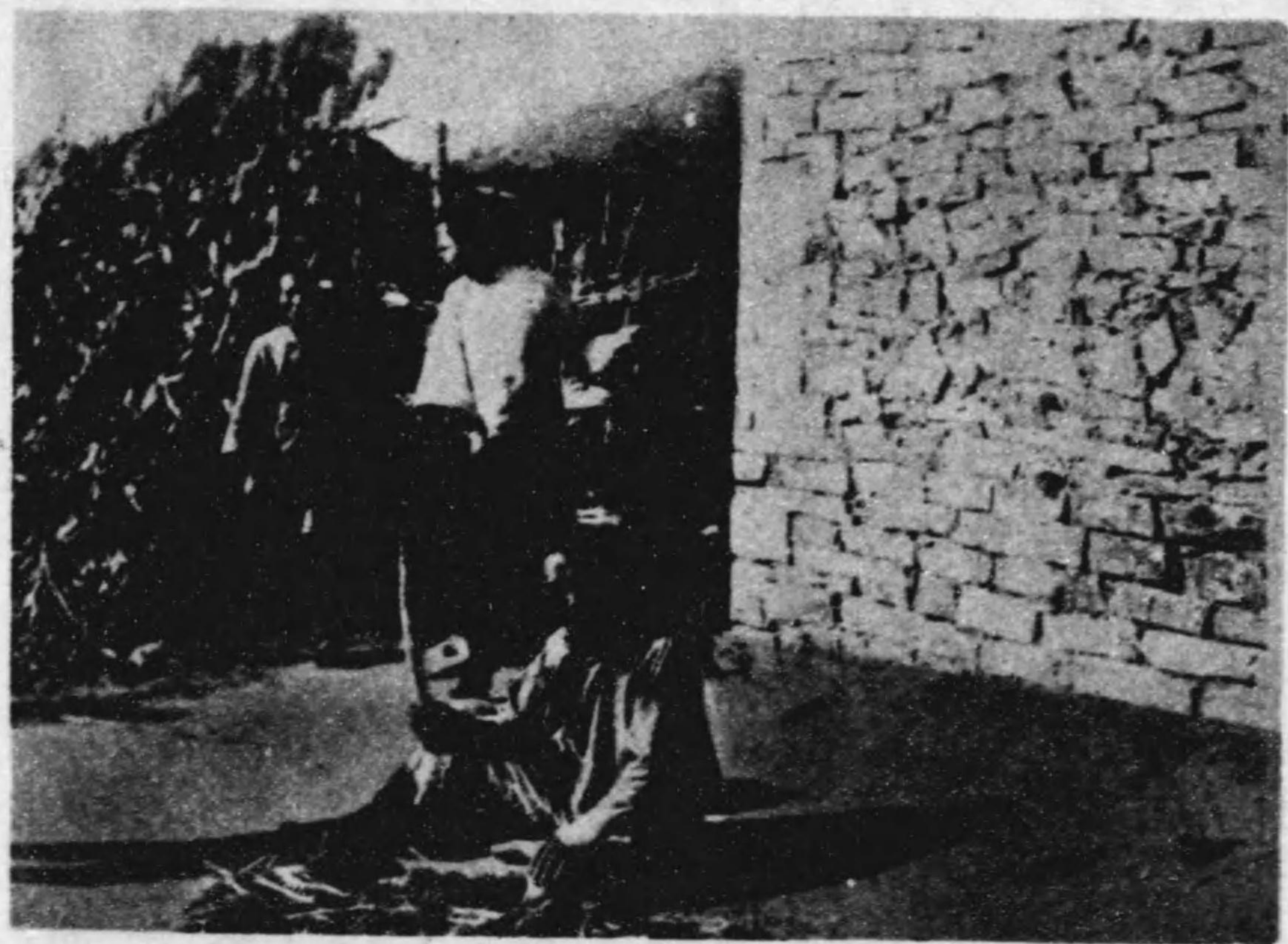
家自たま、れら買てしと料燃、はり残たれさ穫收を梁高 穫收の梁高
。るらせ供に用



立設が社会粉製の模規大はでまい、態の粉製の洲満な式舊 坊 磨
。るむてれさ



忙にうやるは週の目、は時穫收はで洲満るす變激の候氣、び喜の穫收
。いしが



にうさ氣存もでまこど、るむてし落さいたを實の梁高、くいたを梁高
。るえ見

身、即ち農耕者にありとするならば恐らく農村の健全なる發達をせるといへやう。土地所有權の問題は農村發達の尺度である。農村の土地が農耕者の所有であつて初めて農村自治體は國家組織の基幹ともなるものなるに、滿洲の農村は已に漢人の私有制の發達、支那政府の官僚政治に害せられて攪亂されて、地主階級を生じ、農村自治を破壊してゐる。特に地主の中に純地主はまだしも官僚階級の地主、軍閥關係の地主、商人地主あつて良民を苦しめてゐる。

鮮人の動向と邦人の覺悟

現在滿洲在住者を民族別にすると、支那人に亞ぐものは鮮人である。その比は支那人の二、七%にしかあたらぬが實に八〇・〇〇〇人の數にのぼつてゐる。

しかもこの移住鮮人はまた漢人が農業の開發をなしたと同様に滿洲の農業發展の一役割を演じてゐる。漢人が耕種農に特種の技術をもつてゐたが、鮮人は水田を作るに妙を得てゐた。現在滿洲の米の生産額水稻陸稻併せて實に三百五十萬石に達してゐるが、これは主として鮮人の努力の賜である。

顧みるに朝鮮と滿洲とはその地相接してゐるため、古くから鮮人の滿洲に移住するものあり、清朝時代滿洲移住を封禁せられたにも拘はらず禁を犯して移住するものあり、西紀一六二八年には間島を緩衝地帯につくつて鮮

人の移住を禁じたが、その後も屢々紛争を起してゐる。しかしその最も多數にのぼつたのは日韓合併後の最近で、その移住増加の態は別表で明らかである。

しかして鮮人の滿洲の移住の動機、原因に關しては朝鮮總督府に於いては「最近朝鮮人の滿洲移住は物價騰貴に因る生活難に基因するもの多し」とその原因動機を發表し、かく解してゐる。またケルデル氏は、「鮮人の滿洲に移住は日韓合併後日本の政治に不平を抱くためである」といつてゐる。帝大教授矢内原氏は「滿洲に移住する鮮人を調査するに、鮮人の多くは南部のものである。故に鮮人の滿洲移住は内地人の朝鮮植民の結果に外ならず避くべからざる結果である」といつてゐる。

しかして事實移住する鮮人はいづれも貧困を極め、家財家具を賣拂ひ僅かにこの地に渡る汽車賃を得て着のみ着のまゝ移住し來るもので、山崖を險へ漢人の顧みざる瘦薄なる山邊不毛の地を開墾してゆくものをみる。また彼等の多くは懷中無一物で渡滿し、先住鮮人集團地を探し求めてゆき、こゝに寄生的生活を送るか、地主の許に身を寄せて、その代償として何事でも従事勞働することを約して食して貰ふ。謂はゞ奴隸的生活である。ために移住の動機原因を日本の政治的不平など解するは臆測もすぎたるものであるが、たゞ恐るべきは、滿洲に於いて彼等の地位は決して安住のものでなく、ために鮮人は過度に移動し、また移住者としての資質は劣り、鮮人は過去支那官憲とその支配階級の兩者の壓迫に屈服し自暴自棄となつて不逞の徒が多くあることである。彼等は支那

の暴政の走狗となつて諸種陰暴の傀儡となつてゐる。

勿論鮮人の全部が不逞の徒である譯ではないが、支那人と鮮人の移住者の資質を比較すると、彼等はいづれも官憲の後援なくして着のみ着のみで移住するものであるが、就中鮮人は茶碗の外食器二三を携帯して一家眷族を擧げて飄々乎として移住する装をみる。しかしてこの兩者は同じ境遇になりながら支那人は官憲の壓迫を受ければ反撥し、獨立獨歩の大勇猛心を噴起して勤勞を以つて鍛えあげ、經濟的にも實質的にも滿洲で今日の地位を占めてゐる。これに較べて鮮人は自暴自棄に逸り勞働を忌み怠惰な生活を送る傾がある。著者は先年の關東大震災の折軍隊にあつて千葉縣習志野の廠舎に、當時の流言、嵐の中の支那人、鮮人を何萬と收容保護をした監督の任にあつた。この際に支那の瀨戸物焼焼き屋の如き行商人でさへ、懷中に千金に近い金を所持してゐるに拘はらず、鮮人は立派な風装をしてゐるものでさへ無一文なのに驚かされた。この相違は海外移住者に何物かよい教訓を與へまいか。

しかし鮮人の長所は水稻作にあるのみならず、朝鮮の稔角の山地耕作に慣れてゐるため、山地開墾には支那人よりも優れてゐる。この點を着目し、同じ邦人である内地人はよく鮮人の指導にあたる事が、邦農滿洲移住者のまた重大なる使命ではあるまいか？

滿洲國成立以前、また現在でも一部の支那人は、鮮人に關して次の様な考へをもつてゐる。

一、朝鮮人は日本帝國主義の走狗であり、滿洲侵略の先驅者である。

一、日本は滿洲を鮮人の植民地となし永久に自己の領土となさんとしてゐる。

一、滿洲は支那本土にとつて好箇の移住地であるに拘はらず、日本は鮮人を移住せしめてこの好移住地をわれ等から奪はんとしてゐる。

一、日本人は鮮人移住者に對して邦人保護の名目の許に滿洲各地に兵を派し、支那鮮人の紛争に干涉し、諸種の問題を醸し、外交上不便である。

かくの如き考へ方は、已に王道政治を唱へ滿洲國の儼然たる成立をみた今日、一笑に價しないものなるが、邦人移住者は滿洲は樂土であり、われわれを兩手を擧げて全民が迎へてくるものであるなど、夢みず、滿洲には移住漢人が重きをなし、その中には先のやうな迷誤なる考へを持つてゐるものなることを覺悟し、その啓蒙を開くの決心をせねばならぬ。

過去の邦人拓殖事業

滿鐵——滿鐵は滿洲の産業の發達と、邦人の經濟的發達と、邦人の經濟的發展をはからんとし、就中滿洲の農事改良發達を計ることは最大なる急務なりと認め、夙に農事試驗場を設置して農事の調査研究に努め來つたが、

一面鐵道附屬地の廣表數千町歩を一大試驗場と見做し、可成多數の邦人農業者に經營せしめ、滿洲植民問題研究の一資料となし、將來は邦人の農業的發展の核心となさんと期待して、大正三年以降わが鐵道守備滿期兵をしてこれが經營に當らしめた。右の成績に就いては、中途退耕者が半數にも及んだため世人はこれを失敗なりと聲斷してゐるが、中途退耕者の大部は堅實なる志操を缺くものにして、失敗は人選の失敗にあつて滿洲農業移民の悲觀すべき材料にはならない。現在耕者の昭和二年度の成績は次の如くである。

名	家族	耕作面積 坪	固定資本 圓	昭和二年損益 圓	着年當時の資金 圓	備考
A	七	六九、〇〇〇	二、三八〇	三〇	一、二〇〇	生計に差支へなし
B	七	四六、〇〇〇	二、五四三	(-)、五六	二、〇〇〇	夫妻二千圓宛の保險に加入す
C	六	三〇、〇〇〇	二、四二五	(-)、三〇七	三〇〇	同右、借金一〇〇圓質屋營業
D	七	三〇、二〇〇	二、九五〇	四三一	六〇〇	相當裕福なる生活をなし居れり
E	四	四五、〇〇〇	一、八三五	二八九	八〇〇	良好なる成績を示す
F	九	四二、〇〇〇	一、七六五	三四六	五〇〇	貯金三〇〇圓
G	六	三四、〇〇〇	一、八二五	一七〇	六〇〇	貯金四〇〇圓
H	七	四八、〇〇〇	二、〇四七	二五八	六〇〇	貯金一、五〇〇圓
I	七	六〇、〇〇〇	一、七一一	一六	七〇〇	銀票一萬圓

以上の外の在耕者の成績はこゝには省略するが、右表の中B C兩者の損失も詳らかに考察するときは、この損

失は勞役費、種苗費、家畜飼養費等を計算計上の上の損失で、實際に於いては自己の所得となるものもあり實際の損失にはなつてゐない。これを現在のわが農村に比較すれば遙かに樂な實狀であらう。昭和二年度で剩餘金の一番すくないものが三五圓二六錢、最大のものが八七八圓、一六名の平均が四〇三圓四四錢に當つてゐる。

東亞勸業——同會社に對して「滿蒙年鑑」には次の如く云ふてゐる

同社は滿鐵傍系會社の一つであつて、設立は大正十一年である。本社を奉天琴平町に置き、資本金一千萬圓(拂込二五〇萬圓)にて、滿鐵附屬地は勿論南北滿洲に亘り、農場經營、農産物の加工販賣、金融、其他農牧林業に關する各般の事業を經營して居る。

いま昭和五年度の事業成績を徴するに農耕事業は比較的天候順調にて近年になき農作を見たるが生産過剩に米價は稀有の崩落を來たし、又公濟錢家店等の一部農場が水害のため約一萬七千圓の缺損となり、又畜産方面に於ても種羊の改良事業は收支償はず遂に昭和六年二月以降全部之れを滿鐵の經營に移した。

金融事業は大部分社有地小作人其他の鮮農に對する農耕資金の長期貸付であるが穀價低落による農民の苦境甚だしく之れが回收思はしからず、其他山東地方の土地經營も亦支那官民の妨害壓迫を被り豫期の成績を擧げられなかつた、併し滿蒙牛の内地輸出は創始以來健實なる進展を見、本期収益は約三萬七千餘圓に上つた。

次に同年度に於ける收支狀態を見るに農場收入、精米所收入、屠場收入其他を含め百十九餘萬圓を示し、之れ

に對する支出を控除するも五萬一千餘圓の純益を見た、因に同社は滿鐵より二十萬二千圓の補助を受けて居る。同社現在の所有地は水田二千餘町歩の外畑五千八百餘町歩及び荒地十萬七千餘町歩を有する外雜地十八町歩餘（時價二百三十萬圓）を有する。

と云はれて居るが、その内水田に鮮農を入れて居り、大孤山附近の二千町歩は立派なものであるが、その他は東部蒙古その他にあつて、直ちに活用が出来るや否を問題とされて居る様である、従つて以前は日本人の滿蒙移住については關係の皆無と云ふ程尠少なものであつた。

大連農事會社——滿蒙年鑑はこの會社について次の様に云ふて居る。

同社は昭和四年四月の設立にかかり本社を大連市薩摩町に置き、専ら自作農の創定を主眼とし、昭和五年より移民の招來を開始し業務の發展を期して居る、因に資本金は一千萬圓（半額拂込）にして土地の取得及び開墾、移民の募集及び土着、之れに關する運輸水利事業、農業經營に必要な資金及び物資の供給並に貸付を目的として居る。

いま昭和五年度（昭和五年四月より同六年三月に至る）に於ける成績を徴するに土地境界測量方面に於て普蘭店管内及び金洲管内の全部と旅順管内の一部を合せ約一千五百町歩の測量を完了し、尙ほ一千四百町歩は昭和六年度以降に於て順次施行せむとして居る。移住農家に對する耕地の分讓地積は現在六町乃至十町歩に達し、既に

楊樹房農區五十一區劃、石河農區五區劃、小連包農區二十區劃合計七十六區劃約五八〇町歩の區劃處理をなし、尙ほ土地改良工事並に諸施設に於ては三十里堡農區内に築堤、用排水路、地均、道路井戸、貯水池、揚水機、送電線等を施設し又百七十町歩の開田並に畑地約一六〇町歩の耕地整理工事を昭和六年早々完成した。又贊子河農區内約一八〇町歩に對しても諸施設をなし約一五〇町歩の開田並に約一〇〇町歩の畑地の土地改良工事も現在着手されてゐる。また小連包農區一七五町歩に對しても築堤、排水工事をなし、昭和五年七月之れを竣工した、其他李家屯區に對しても目下工事計劃中である。

移住者收容豫定戸數は自作農八〇戸、借地農二〇戸合計一〇〇戸にして同年度末現在に移住契約締結者は合計六〇戸にして内一三戸は借地農で、他は自作農有資格者にして一年耕作者たるもの八戸を示して居る。尙之等に對する資金の貸付は自作農移住者三〇戸に對し金一萬七千餘圓、借地農移住者七戸に金九千五百餘圓、其他自作農移住者二十三戸に對する短期貸附をなしてゐると。

開東廳移民——關東州愛川村の移住地の狀況に就いては、双慶生氏の滿洲農事協會發行農業の滿洲記載の記事はよくその事業及び狀況を物語つてゐる。

斜陽に立つ金州城外の西、州内に毅然として聳ゆる大和尚山を後にして五里の地山河を彩る綠翠細畦の間を縫うて馬車も自動車も自由に馳驅し得る坦々たる良道、それが州内の邦人農村愛川村への通路である。

路を二十里台から執れば一路二里。物資生産物の輸出搬出には主として之れによるのである。植栽後十数年を経たるらしい、徐ろに天空を指す幾百の並木を兩側に送迎して遙かに海邊を望む處大魏家屯川の右岸に歴史ある邦人の水田村「愛川」は鶏犬相和す平和郷として展開されて居る。

日露の戦雲漸く散んして數年州内に徳政の美風が徐ろに薫り秩序が次第に立ち初めて來た時孤家僅かに人の在るを示す鹽廠と稱する地に職務の餘暇土地の利用開發に専心思を練る眞摯なる警官があつた……當時大魏家屯駐在警察官吏橋本市藏君が其の人である……彼の深思熟慮は水稻耕作を以て該地に最も適當なりとした。そしてそれは地方の篤農家によつて實現した力強い意義ある最初の鍬の下された處は今の愛川村南新田の地であつた、希望の第一年（明治四十四年）は安らかに過ぎ去つた黄波攘々たる豊かな秋を迎へた農民は云ひ知れぬ喜びと更に將來に對する雄々しき胸の高鳴を禁じ得ざるものがあつた。

越へて翌大正元年には農商務省の技師恩田鐵彌博士がこの地を踏査し水稻作に好適なることに折紙をつけこれを發表した……園藝學殊に果樹の泰斗として恩田博士を知る人は多いが焉んぞ知らん同博士は水稻に對しても造詣頗る深いものである……ので、土地の貸付を出願するものが續出し全地積二百七十五町歩は眞田、安水、神原、大久保、福西、王の六名に許可され開墾は進歩されつつあつたが當時勸業都督と呼ばれた福島安正氏の巡視によつて方針は變更され新しい計畫が建てらるるに至つた。

福島都督は土を見、地を相して水田作を基調して内地人移民の模範農村建設を計畫されたのである。土地に即して根強く大陸に地歩を占むる植民の計畫こそ當時にあつては誠に卓見であり有意義な企であつたのである。

鑿て當時の關東廳農事試驗場長木下義道氏や土木課の倉塚技師によつて農村建設の設計は進められた約一萬五千圓が道路、畦畔、水源池、堤塘、排水溝等の土木工費として支辨され更に六千五百圓によつて移住の家屋が建設せらるることになつたが何れの時代にも試験困難は伴ふものである暴風雨、洪水によつて幾多の支障蹉跌に遭遇したが大風一過危機は去つて大正四年の四月には之れが完成を見ることが出來た。

斯くて準備は整へられ多大の期待を以つて山口縣から移民が招致されたその人々の郷里玖珂郡愛宕村と川下村との頭字を取りこゝに新農村「愛川村」と命名されたのである。

稻の穂先に風軽く順風慈雨に恵まれて酬ひらるる鼓腹の秋そこに湧き興る平和と希望の氣分こそは農民に天與の特權であるがそれは中々問屋で卸してくれぬ、今日の貧弱なる科學の下に彼等は終年天候と戦はねばならぬ、更に害蟲の跋扈病害の發生、加ふるに物資の購買生産物の販賣等起る人爲的壓迫等の朝夕にはヒシヒシと人生苦の訪れが絶えなかつた。

春去り夏を送つて秋を迎ふる頃には村内に一抹の暗雲が漂ひ初めた大陸滿洲の第一線に骨を埋る男子の意氣の冷めて行つたのか移住後の彼等には餘りに平凡な朝夕が送迎せられた。横溢すべきバイヲニヤの氣分は姿を潜め

て認め得なかつた。

ここに我等の考案が伴ふ大陸の彼方に農民として玄海灘を渡つた男子等として薄志弱行着實に農業經營の決心を有せずとの世評を後にして、在住一年内外にして離散の現實暴露に接せんとはそれは餘りに悲惨な没落と云はねばならない。明媚なる山川を忘れ難く湖北の朔風に身心の堪えざりしか或は所管當局者の保護指導も事業の前途を樂觀せしむるに足らざりしか或は又は勤勉力行の資に乏しき惰農が行くべき當然の経路を辿りしに過ぎざりしか種々なる理由があつたらしい。然し其の年の秋收が全然失敗に歸したことが他の要素と共に著しく彼等を不安に導いたのが事實である。

斯くして第一期の模範農村は山口、新潟の二縣人各一戸づつを残して離散し去つたのである。

大正五年既に都督の職を去つて福島大將はこの報を耳にして村の前途を憂ひ大將の郷里長野縣から希望者五戸を募集して渡航せしめた、更に守備隊出の一名も加へられて合計八戸、村の陣容は整へられて新しき門出を祝福せられた。愛川村の使命は水田である、隨て成否の鍵がその灌漑水にあつたのは云ふまでもないが、不幸その鍵には重大な悩みが懸けられてゐる、最初は附近小蓬泡と稱する土地の溜池より引水したが間もなく其れは涸渴して用をなさなくなつた、大魏家川は滿洲に普通見らるる川であつて流水はない、餘儀なく希望は地下水に向けられたのであるがこれも潤澤なりとは云ひ難く旱天に萎凋する稻株をみつめて農民は悲憤の涙に咽んでゐる。

主作物たる水稻作の状況然りである、水田以外に伸び得る餘地に乏しい、此の地に於て彼等の困窮缺乏は察するに難くない、頑是ない幼童を擁して今夕の食事に主婦の胸を傷めた事もあつたであらう……病床の患者に侍して醫藥の不充分を嘆した事もあつたであらう、郷里から持参した小供の晴着の色は褪せて漫ろに往時を追懐したことも絶無ではなかつたらう、殊に同情に堪えないのは前記八戸の農家中三名の主婦が相前後して死亡したことである。逆境に處して困苦窮乏と闘ふ第一線の勇者であつた彼等主婦の犠牲者の心事を想像せば誠に同情の念に堪えないものがある。

秋風雨を誘ふ時暮れて路遠き農村に忍苦の十年が刻々と過ぎつつある、恰も初代移民の失敗を顧み、雨降りて地固まる農民の意氣は石に啗りついてもと、牢固として動かなかつた。

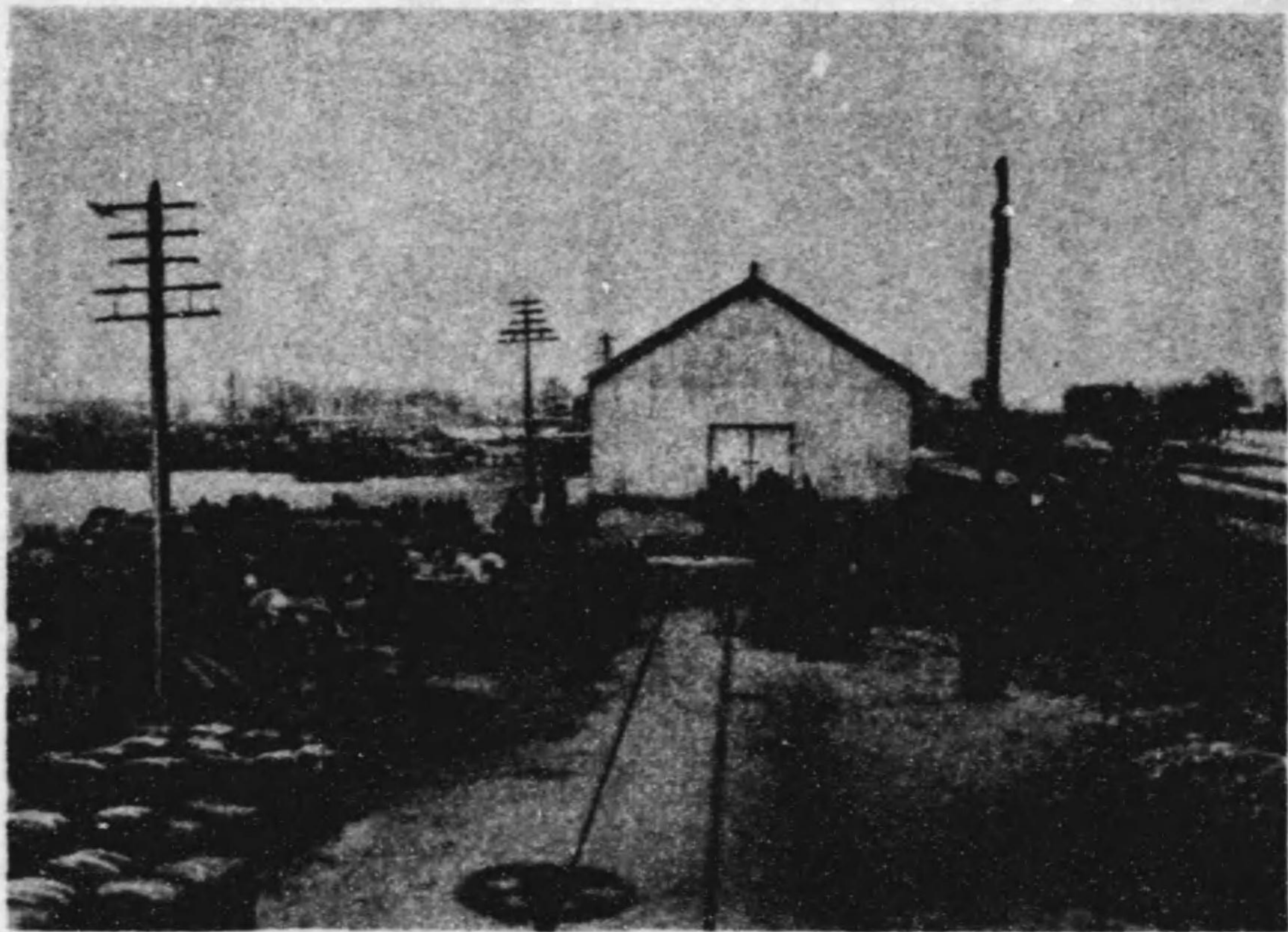
愁雲は過ぎ去つた愛川村の曙光は足下の地中から爽かやに輝き初めて灌漑水の不足に苦しみ抜いた同地は關東廳清水土木技師の實地踏査により地下水利用鑿井工事によつて局面の轉回を計つた大正十三年の九月から各處に試掘した結果は有望井の多數を發見することが出来、昭和二年秋からは相當多量の湧水を見ることが出来た。

水—水—水大旱の雲霓を得た喜悅は筆紙に盡し切れぬものがある、汲めど盡きぬ靈泉の水に彼等の勇氣は幾倍した開墾の敏はグングンと進められ、垂穂を誇る水田が次へくと展開せらるるに至つた。

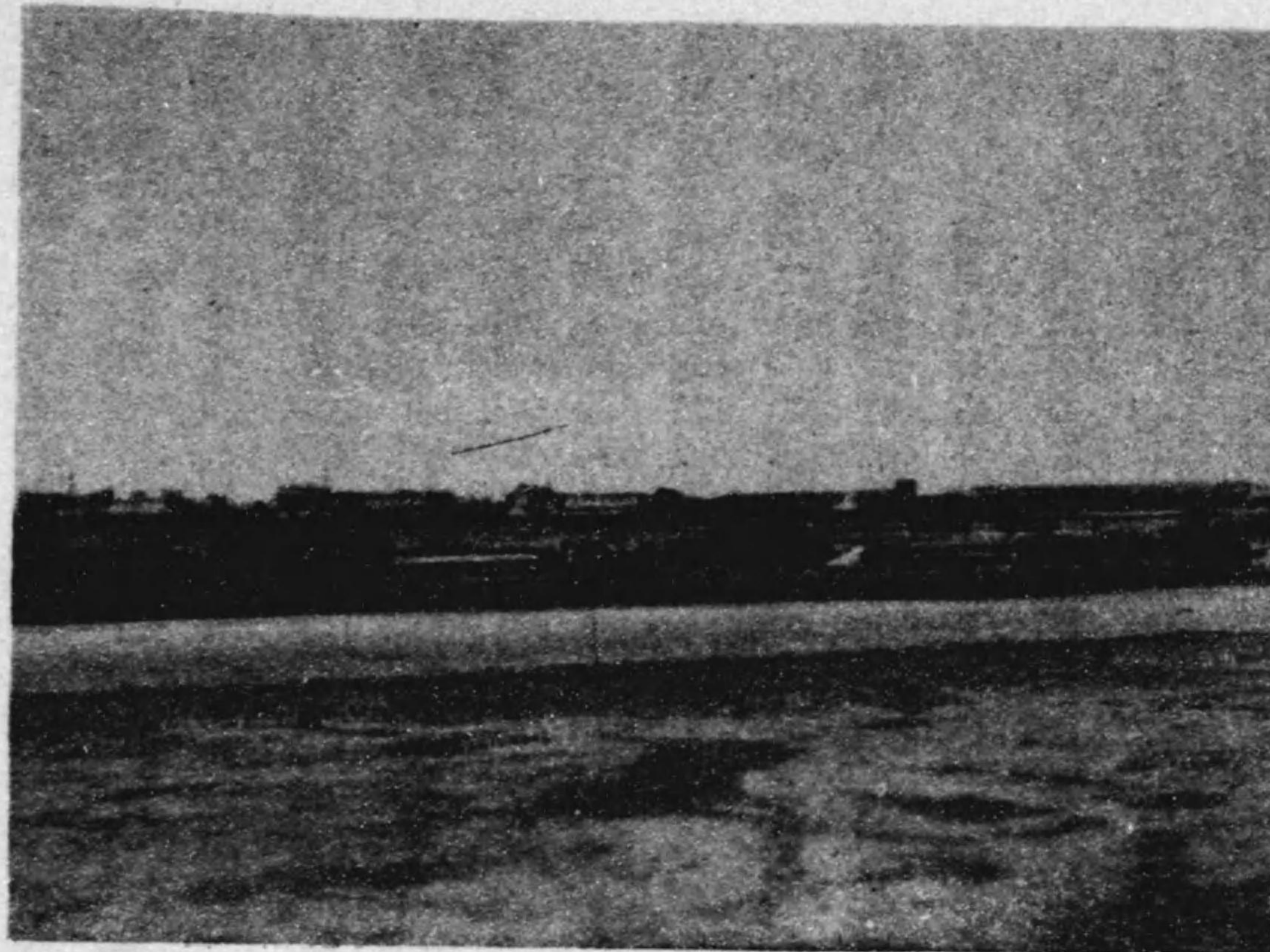
一方大正十四年には一萬二千圓の豫算によつて電力線が布設された、灌漑用揚水は勿論この電氣動力によるの



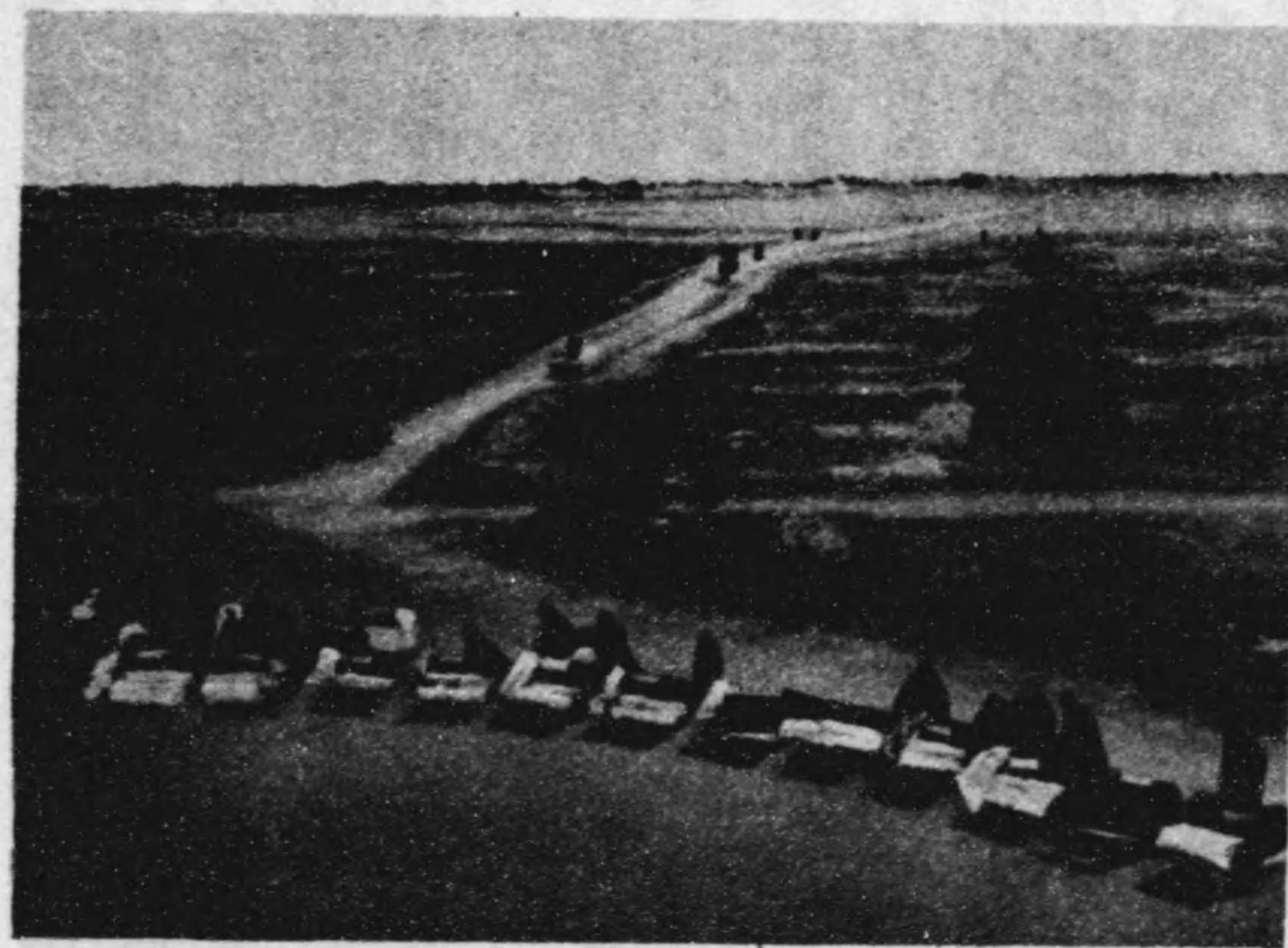
。るあでつーの入収業副るな要重の家農、は搬運の期冬 業副の家農



の驛物貨、は驛の鐵滿、し散集に驛くし著は賣物の線沿 内構驛林古
。るあが販



。るむてれさ搬運は品物諸てつよに車馬の有特洲滿 外郊ンビルハ



。るれさ搬運は物産農で糧故るす結米は河ふいと河期冬 搬運の糧期冬

である、糠摺精白にも利用され僻遠の地にある農家の窓にも快き文化の燈影がさすようになった。
村の現状を記載して見る。

濱田兼三郎(山口) 小野塚定平(新潟)

第二回移民

堀内運次郎(長野) 清水勝儀(同) 宮崎 確(同)
緑川五右衛門(同) 安藤徳藏(福岡)

宮本某は近年退村した其の外駐在所の久木沼巡査があり、村長として又事業の顧問役として種々な斡旋に努めて居る。

水田 約三十五町歩(一戸當三町五段―六町五段)

畑 四町一段歩(一戸當二段―八段)

水田収入は一戸當り最高二千二百四十九圓最小七百九十六圓である、この外副業として養蠶、飼畜、製繩等の収入も若干あり耕作段別の増加によつて収入は段々増加して居る、更に大正六年から八年に亘つて植樹したアカシヤ、松、白楊、柳等約四千本は村の基本財産として年々價值を増しつゝある、尙ほ本村には電氣動力利用による共同精米工場があり生産物は糶、梗共に白米として消費組合その他の需要家へと運ばれる運用宜しきを得れば生

産物の價格を向上せしむる上に於て勞力の分配上又運搬費用を軽減する等の諸點に於ては利益多きは無論である、組合運用の妙味、共同事業の慈味は斯る點から出發して各人の利益を増進する。

電氣モーターの不斷の響きと今春滿鐵の助成によつて設けられたロータリー式風車とは朝夕灌漑の揚水に孜孜として働いて居る田面に響く村人の野歌には活氣が横溢して愛川村は復活して嘗て唱へられた失敗の農村の佛は漸次霧消し去らんとして居るが苦難幾年積つた負債は小數の農家としては相當の重荷である。

最近某社の骨折りによつて極めて低利のものに乗替は出來たがこの元利の償還には緊禪一番を要する。

愛川村の水稲耕作は作況順調ならば反當玄米二石内外の收穫を得ることが難事でない、勞働賃銀も割合に廉價でありそしてそれが白米として販賣せられるのでその利益は相當な額に達する。

現在の愛川村を見るに生命財産の危険なく交通は先づ可なりとすべく借地料は免除、電氣動力の利用が出來、水稲栽培の成績は良好であると云ふ様に好條件に恵まれて居る、こんな土地が果して他にあるであらうか、一戸當りの面積も約八町歩まで擴張せしむる筈だと當局者は云つて居る。これを沿線や奥地の水田農家と比較すると恩寵の大なるを感謝すべきであらう、若し此所で立派な成功が出來なければ成功し得る處は先づ無いと斷言することも敢て過言ではあるまい。

順風快適、舟は一直線に走り出した、吾人は農民諸君に一致協力緊張した經營を期待し、滿洲に於ける邦人移